

南礪系本日蓮尊者盆踊唄詞章校異初稿

吉川良和

はしがき

今日、富山県の市町村合併で南礪市となった地方を中心に伝わる「チョンガレ節・目蓮尊者」の価値や構造については、拙論「チョンガレ系目蓮盆踊唄初攷」ですでに論じた。⁽¹⁾ その際、北陸地方に流传する「目蓮尊者」の盆踊り唄は二系統あって、これと主として石川県地方に伝承するもの（本稿では「金沢系本」と仮称する）の詞章とは、大いに違うことを指摘した。このチョンガレ系の詞章には版本がなく、どれも写本であり、文字の出入がかなりあっていまだに定本がない（こちらを「南礪系本」と仮称する）。しかも、それらの写本は斎藤五郎平氏が「なにしろ昔の人が耳で聞いて覚えたことを筆にし、それをまた借りて写して入るうちに、誤字、脱字、それに毛筆のにじり書きが多く、宛字やら発音の聞き間違え、……、相当の難物で、ちょっとやそつでは読めぬ」と述べる状態の上に、叙事文

でない修辞を含む韻文詞章であるから実に厄介なものである。⁽²⁾ 他方、金沢本は版本が多く刊行されていて、石川、富山両県内だけでなく、西村宗貫本などは京都で出版されている。かく広汎に知られているゆえ、倉石武四郎、川口久雄、岩本裕の三博士から、石破洋、陳芳英の両氏、そして一九九一年と九八年に東京の国立劇場で披露されたものまで、例外なくこの系統の目蓮尊者盆踊唄の詞章を基に論じられている。つまり、北陸地方の盆踊唄「目蓮尊者」物に言及した諸論は、ほぼ金沢系本の系統に属しており、南礪地方のいわゆる「チョンガレ系目蓮尊者」は、ほとんど顧みられることがなかった。これまでに、写本から文字を起し活字化されて出版されたもので、かつ五段すべて首尾の整っているものは、五来重編『日本庶民生活史料集成』⁽³⁾、『富山県民謡緊急調査報告』⁽⁴⁾と『金沢の口頭伝承』⁽⁵⁾などに掲載されているのみで、しかも相互に全く同一の詞章というものではないのである。

この北陸地方に伝承されている「目蓮尊者」物は、盆踊唄ではあるが「口説」^{くどき}、すなわち語り物に属し、かつお盆の縁起である目蓮尊者の話(紀元三世紀の漢訳仏典で竺法護訳とされる『仏説盂蘭盆経』に由来する)である。しかもわが国で遙か昔から現在まで実際にこの唄がなお毎年お盆には歌い継がれてきたということが筆者の注目するゆえんの第一。つぎに、既述のごとく、カナ表記を原則とする「昔の人が耳で聞いて覚えたことを筆にし」た、語り物詞章としての活きた民衆の音声の口頭伝承記録そのもので、まことに珍しく貴重なものであること。また、拙論でも強調したとおり、源信などに代表される知識人達の中国伝来の仏教死生観とは異なったわが国特有の民衆仏教の死生観が如実に表れていること。さらには、目蓮尊者の故事が、中国はもとより、チベット・モンゴル・朝鮮半島からわが日本までと、アジアの民衆の間に広汎かつ長い歲月、各地方独自の展開をしながら伝えられてきた故事で、これこそ無形の文化遺産であること等々、その価値はいくつも挙げられる。両系統の「目蓮尊者」物のうち、とりわけ南礪系本は、一般の庶民(農民)の中で拙筆にして時には内容がわからないまま、時には全部カタカナ書写などというの

あるが、とにかく永い風雪に堪えて、先祖供養の盂蘭盆会の年中行事とともに伝承を絶やさずに我々に伝えて来られた、まことに尊い遺産というべきものである。

こうした筆者の南礪系本が高い価値を有するという認識は、チベット・モンゴル・朝鮮半島、そして中国各地に継承されている目連物の諸相を研究するなかで益々深まった。金沢本に関しては、かつて岩本裕博士が活字化されたところがあるし、論述も数編著されている。これに対して、芸能を研究している筆者としては、語り物としてより優れていると思われる南礪地方の「目蓮尊者」物に大いに魅力を感じ、原本を閲覧したところ、上述のとおり「相当の難物」で作業が遅々として進捗しない。そこで、二〇〇四年孟春再度南礪市に趣いた。その結果、南礪市の数カ所で開催された文書や写本、および写本より書き取ったものを、多くの方々のお蔭で蒐集できた。これによって、諸本校合の準備が調い、初步の定本を作りたいと図ったのである。ところが、諸本を比較する過程で、相互の文字に出入りがかなり多く、かつどの書策もそのなかに割愛したい内容が相当含まれていると認識した。それゆえに、どの一冊がもっともスタンダードな書冊か決定できなかった。各書相互の相違は、基本的に読むための書物ではなく、歌う（語る）ことを前提とした可変的詞章の写本であることに起因する。ここに、わが国民衆の間に、口伝で伝わってきた活きた民間口頭伝承の姿を見ることがができる。くわえて、この書策が単にストーリーを述べるのではなく、表現をいかに豊かにするかに重点がおかれた詞章であり、かつまた三・四・五・三語調を基調とする韻律形式によっているのである。しかも民間の活きたもので、オリジナル詞章が語り手の工夫を経て発展し、各所で独自の表現をくわえてきたため、その詞章が数種にも亘っている。それが、本詞章群の最大の特長であり素晴らしい点であるともいえる。こうした理由から、本稿は定本として詞章を固定せず、このわが国に口伝によって伝承されてきた魅力あふれる南礪系本「目蓮尊者」物の内容を盛れるところはできるかぎり残そうと志向し、諸本との校異を明確にするに止めた。後述に

明らかなように、この「難物」の「難」たるところは、草書体変体仮名の解説だけでは多くの場合判明しない複雑さにあり、どうしてもかくのごとき諸本の校異が求められるのである。それによって、宛字、誤字、脱字があってもこの校異初稿と照査すれば、「南礪系本」書冊もかなりの解説が筆者の経験から可能であり、これが本稿を作成しようと思いついたゆえんの一つであった。かりに新に古い写本が出現しても、その手稿本を解説するのに、本稿は大いに役立つであろうと信ずる。

ただし、この詞章の定本の作成に至っては、単に文字だけを逐っているだけでは成らず、あくまでもチョンガレの節にのらなければならない。だから、文字を糾すだけでなく、歌唱を考慮して共同で作り上げなければならない。それでも、本来のチョンガレ節「目蓮尊者」が「口説」という語り物に属することを考えると、果たして定本に固定することが良いのか、逡巡躊躇させられるところである。

とはいえ、本稿の目的の一つは、チョンガレ節「目蓮尊者」物の具体的な内容を明示すること、そのため、各段の詞章を、金沢系本と対照できるようにして後に附けた。南礪本の参考詞章は、これら発展・展開した諸本詞章の基になったものを想定してそのルーツを探究することや校合として狭く排除するのではなく、発展・展開する段階で豊富になった成果を取り入れることで「緩く」校異し、より豊かな内容を提示することを目的として作成した。それは、あくまでもこの詞章が有する前述のような性格を考慮してのことである。本稿は上述の如き、わが国に現存する目蓮物芸能の性格、南礪系本の具体的内容、わが国における民衆仏教の死生観、民衆の口頭伝承の実相などを闡明すること、および諸本の書写異同を明示して解説の資とするという諸目的を達せんとするものである。

一 南礪系本の諸本について

筆者の目睹した南礪系本は鷹栖本（七段でしかも完結しないが段割が他本と違ってただで内容を増大させているわけではない）を除いて、五段組となっている。そして、五段全詞章が掲載されているのと、一部分だけが書写されているものがある（写本の遺失という原因のほか、近年盆踊りの現場では、長篇全段を唄うことはなくなってきたので、初段から二段目あたりまでの書写に止めている場合もあろう）。和綴じの変体仮名による原本を見ることは数本に止まり、遺憾ながら、多くは原本を原稿用紙などに再度書き写したものである。それがまた誤写の多出をまねく。あまつさえ、仏教の用語に対する認識の不足や富山地方の方言・音声をそのまま写しているので、混乱しているところも少なくない。だが、諸本を照査することで、相互の明白な誤りや文字の確認をすることができる。本稿の趣旨により、相当に包括範囲を広げて字句の排除を緩やかに行った。その意図は、既述したごとく、これが異本の解説の資料であるばかりか、民衆の解釈と再創造による活きた語り物の詞章だという認識に基づいているからである。

筆者が蒐集した諸本は、主に南礪市の福光図書館、井波図書館、城端図書館、および福野図書館所蔵のものであるが、そのほかに城端町の斎藤耕三先生など個人の方からも資料提供をうけた。さらに、斎藤先生と南礪市教育委員会の西村勝三先生からCDやテープを頂戴し、詞章と照査することで現存唯一のわが国目連芸能「チョンガレ系目連」の旋律を鑑賞できたと同時に、それがじつに聞き応えのある口説きであることも確認し得た。以下、校異・校合の資料として用いた諸本を列挙する。配列は無作為で、時代順にしなかったのは、写本の時代考証が、なかなか困難であると判断したからだ。もちろん、書写の年代や刊行年代は明記してあるから判るが、かといって、それがそのままそ

の詞章の成立年代を示しているとは断じ得ないところに、この資料群の特徴と意味があるように思われる。それに活字本、油印本、原本の分類も、あえて故意に配列しなかった。それも、先入観を与えぬようにとの筆者の用意による。

因みに、①を基本としてゴシック体で太字とし、他の諸本は以下に列挙した諸本の番号で、その出自を示してある。①を基本としたのは、それが諸本を校合して定本を目指した跡が見られる割合整ったものだからである。しかしながら、それもやはり他の諸本とかなり乖離を有することも事実で、そこにこそ、この「初稿」を作成した理由があるともいえるのである。本稿のゴシック体での①の詞章の後にある（ ）の番号が多ければ多いほど①のその句の詞章は少数派で、（ ）内の番号の詞章の方が一般的に行われてきたこと、つまり乖離の実際の姿を示している。なお、「原本」は和綴じの物で、「油印本」とは変体仮名原本を分ち書きに改めた手稿本と謄写版印刷した物を指す。活字印刷の物に関しては特に記していない。また、校異中の句読点は原文にはなく、筆者が後から便宜的に付けたものである。

なお、この初稿では、斎藤五郎平編著『目連尊者地獄巡り』（『礪波の民謡・ちよんがれ集』所収）など数本のなかに掲載されている、掛け・囃子声の唱句、例えば冒頭の「ハルワイナーイ、ハルワイナーイ、ハリー、ハルワイナーイ、ハルワイナーイ、もひとつたのんぢゃイ、ハーハ、ドウぢゃイ（囃子）やアーハハー それぢゃ はるばい揃で頼だーエ（合唱）ハルバイナーエ ハルバイナーエ はるばいナー はるばいナード もひとつ はのだーエ（合唱）ハルバイナーエ（囃子）」などは割愛してあるので御了承いただきたい。

二 南礪系諸本一覽

- ① 油印本『千音加礼節目蓮尊者』（全五段）（福光町史編纂委員会の原稿用紙に書写されたもの）
- ② 油印本『ちよんがり目蓮尊者地獄巡』（全五段） 竹田豊蔵写本。表紙に「昭和十五年二月」とあり、その後「目連尊者 初段ヨリ五段 地獄巡り終り」と三行に分けて大書しているから、「目連尊者地獄巡り 初段より五段終り」ということであろう。見返に「竹田豊蔵書 七十二才」と記す。ほとんどの字句をカナ書きにしてあり、その音読を知ることが出来るが、ただし必ずしも統一されていない。これは写すときに、文字を読み誤ったのか、自分（方言）の発音をそのまま写したときと、標準語の書写法に依拠して書いたものが混在しているとも考えられる。例えば、「峠」を多くは「とうぎ」と書写したり、「とうげ」とも書いているなどが、そうである。現、福野町図書館蔵。
- ③ 原本『ちよんかれふし目蓮獄地巡り段』（四段目のみ） 表紙に「明治参拾参年拾月中旬 目蓮獄地巡り段 ちよんかれふし 前川與助」とある。
- ④ 油印本『目連尊者地獄巡り』（前五段） 斎藤五郎平写本（『礪波の民謡・ちよんがれ集』一九八一年 私家版）。
- ⑤ 油印本『チョンガリ節目蓮尊者地獄巡記』（全五段）（井波図書館蔵）
- 奥書に「昭和十二年五月右を書寫 富山県東礪波郡平村松尾 長男 高田左助 十八歳」「昭和二十二年二月之初春 富山県東礪波郡平村松尾 長男 宮脇理四郎 二十七歳」「六月八日攔筆 富山県東礪波郡平村松尾 長男 山本左吉 十九歳」とある。（註3所収）

- ⑥ 油印本『チョンガリ節目蓮尊者一代記』（全五段）（昭和十年八月）
元吉田重太郎写本（奥書に「昭和三十三年五月十五日 福光町広瀬地区開発吉田重太郎代より借用書写 井波町立図書館」とある。
- ⑦ 油印本『ちよんがれ読本目蓮尊者』（全五段）（昭和四十三年十一月十八日 福光ちよんがれ保存会）
この写本は①とほぼ同類。「福光圖書館藏書之印」と押印してある。
- ⑧ 『ちよんがれ台本目蓮尊者』（全五段）（昭和四十九年四月 福光ちよんがれ保存会発行）
原本『目蓮尊者』（三段目前半部のみ）詞章の末尾に「明治廿八年九月 山田村大字大塚新村」、次頁には「明治卅年一月十一日書之 吉田」と墨書され、さらに「竹田作造」と大書してある。
- ⑨ 原本『ちよん加里ぶし目蓮道行』（初段）前川與助写本、見返しに「富山県東礪波郡いぜみ村するかわ 明治三十年六月 平民前川與助」と墨書してある。
- ⑩ 油印本『千音加禮節目蓮尊者』（全五段）昭和二十三年二月写之（南保七三郎）
奥書に「昭和廿九年九月写之、原本は宮崎作藏所持のものを 昭和二十三年二月南保老人書写せしものなり」と記す。
- ⑪ 『千代音歌礼節目蓮尊者』（三段目まで）付盤持特講甚句（城端町古典民謡保存会）
城端図書館蔵（平成七年七月七日）。
- ⑫ 油印本『チョンガレ台本目蓮尊者冥途行願』（全五段）（『城端町の伝承』昭和五十一年 城端ふるさと研究会）
冒頭に「持主 北野村 健名市蔵 蔵書 写」と記す。
- ⑬ 礪波市鷹栖『チョンガレ目蓮尊者』（七段以下欠落）（明治二十一年写本）四段目までの段組は諸本とほぼ同じ、

長い五段目のみ便宜上数段に分けた内の三部分が現存。他の異本と比較すると、かなり文字の出入りが多く、原本を見ないと活字本の読み方には妥当でないと思われるところも往々みうけられるので校合の意味が薄いと判断し、かつ五段目以降の段組は諸本と異なることもあって、本稿の校異は四段目までに止めた。ただ、四段目まで行ったのは、独得の内容を有し、表現も興味深いものがあるためである。私蔵の原本が閲覧できたら改めて整理し論じてみたい（註3所収）。

- ⑮ 油印本『ちよんがれ節目蓮尊者』（二段目まで）（昭和四十三年七月二十五日 福光町福祉会館） 二段目まで掲載。

- ⑯ 『目蓮尊者』（全五段）（『ちよんがれ選集』所収）（越中富山県西礪波郡福光町 福光ちよんがれ保存会 平成十二年二月立春）

- ⑰ 『目蓮尊者地獄巡り記』（全五段）元酒井久進（皆律）写本 昭和十八年（『富山県民謡緊急報告』富山県教育委員会 昭和六十年 所収）

以上が、本稿で参考にした南礪系諸本である。この他にも、活字本は数種入手したが、これは掲載者が後で手を入れたもので、採用しなかった。

三 校異凡例

文学作品の校合と異なり、活きた語り物台本の場合は流動的であり、またそれであるからこそ価値があるので、いささか煩瑣な校異情況となった。そこで、以下その記述の仕方を示しておきたい。

1 抑々(⑦)そもそも

() 前の漢字を仮名で表記したもの。基本的にはテキストにより、漢字になっていたりカナ書きであったるので、それを逐一表記していないが、漢字の読み方を特に示すほうが理解しやすいと判断した場合に、カナ表記を示した。⑦は、「諸本一覧」に挙げられている『ちょうんがれ読本目蓮尊者』の詞章であることを指す。このように、校異詞章中の番号はすべて上記「諸本一覧」の番号に拠っている。

2 勧請(⑤)尊書

⑤の『チョンガリ節目蓮尊者地獄巡記』では、「勧請」を「尊書」と表記していることを示す。

3 る(⑤)に

⑤の『チョンガリ節目蓮尊者地獄巡記』では、直前の「る」を「に」と記していることを示す。

4 みれば(⑥)「みるに」

⑥の『チョンガリ節目蓮尊者一代記』では、「みれば」を「みるに」と記していることを示す。この「」は直前の複数文字を明確にする際に用いた。

5 (⑤)加「有性非性の道引なさる、之は扱置」

⑤の『チョンガリ節目蓮尊者地獄巡記』では、ここに「有性非性の道引なさる、之は扱置」の詞章が附加されていることを示す。複数の資料に同文の附加部分がある場合は、(加⑤⑨「」と「加」を番号の前においた。また附加の言葉が違う時には(加⑤「」⑨「」とする。さらに附加文字がわずか数字の際は、(加③⑩「」(⑩「」)と記して、③とはば同じ文句が附加されるが(⑩「」の部分だけ数字違うことを示す。

6 お (⑤無「お」)

⑤の『チョンガリ節目蓮尊者地獄巡記』では、この「お」という文字は無いことを示す。

7 (⑤無此一句)

⑤の『チョンガリ節目蓮尊者地獄巡記』では、前の一句は含まれていないことを示す。「一句」とは、直前句の句点「、」か、読点「。」までを指す。

8 (⑤「ましま」を「在」に)

⑤の『チョンガリ節目蓮尊者地獄巡記』では、前字句中の「ましま」を「在」に改めていることを示す。

9 (⑤此一句變為「頃は寒さの節であれど丸の裸の立経読せ」)

⑤の『チョンガリ節目蓮尊者地獄巡記』では、前一句を「頃は寒さの節であれど丸の裸の立経読せ」に変えていることを示す。このように、かなり大幅な変更は、「此〇句變為」としてから、変更後の詞章を表記した。

10 (漢字ツケ「消」て)

詞章はカナ書きで「きいて」とあるから、「聞いて」と思われるが、「消えて」の方言読みであることを明示するために、カナ書きの意味が多重のときに補助として付けてある。

11 給「ひ、ふ、へ」、母「わ」等の助詞、助動詞

「給ひ」と「給い」、「母わ」と「母は」などは同音として、一々挙げていない。それは各書策間だけでなく、時には同一書中でも不統一だからで、凡そ同音の場合、全てを逐一挙げず多くは一表記をもって代表としている。

12 (無「杖に六字を」以下)

「杖に六字を」から () の前までの比較的長い詞章が無いことを示す。また③⑥

13 負笈(ルビ「おいづる」)

など複数本で無い場合は、(無③⑥「」)とした。
 ルビは上の様に示す。そのまま読めるようなものは、ルビが本来附いていても逐一挙げていないが、例えば、中(ルビ「ちゅう」)は「中」を「なか」と読むのではなく、さらに「宙」の宛字であることもあるので、こうした「ちゅう」の類にはルビが必ず必要で明記した。

14 大事なるぞ(②③④⑤⑬大事(②だいず)ぢや(③や)程に)

(「」) 前の字句②③④⑤⑬ともに、ほぼ「大事ぢや程に」とあるが、ただ②だけは「大事」を「だいず」、③だけが「ぢや」を「や」と書いているということを示す。

四 南礪系本目連物詞章校異

初段

抑々(⑦⑧そもそも) 勸請(②観状⑤尊書⑥くわんしょ⑦⑬らんしよう⑧ルビ「かんしよう」⑩くわんぢやう⑭くわんしやう)(④「勸請しました。ハイ」(加⑬⑭「を」) 申奉る(⑤に④「申奉る」を「奉れば」⑰加「に」)(⑬「勸請申し奉る」を「巻うやうやしく申し上げ奉るに」)。歳(⑤「歳の月日」⑥④⑩⑬年⑦とし⑧つき⑫⑬月)は(②④⑩⑬「の」) 七月、日は(⑤無「七月、日は」、無④「日」) 十五日(④加「や」)。千部(②進歩④⑧⑫⑬宣布⑬闇に) 施餓鬼(⑥せんぷせがき⑧ルビ「せんぷせがき」) のさ(②偕) て(⑭「歳は」以下を「夫七月十五日せんよふかけるの」)、そ(⑥其) の由来⑭加「をひろめ奉る」。よ(②ゆ) く(⑤能) もつらつら(②ちらちら⑤情) 尋ね

てみれば(⑥みるに⑩めれば)(⑭無「此一句」、忝(②⑥⑦⑭かたじきな)くも(⑧⑫⑬無「忝くも」)(②⑧⑩⑫⑬加「ここに」)大聖(⑩「大小」以下同じ)釈迦牟(⑧⑫⑬「牟」を「無」、以下同じ)尼(⑭大しうしゃかむに)如来、われ等(⑤吾来⑦⑧⑫われら⑬我々)衆生を済度(②再度⑤西道)のために、この世(②加「へ」⑭無「われ等」以下、加「此道へ」)八千余(⑭八)度の(⑭無「の」、⑫⑭加「御」)来迎(⑤来向⑧ルビ「らいこう」⑩「らいはいなされ」⑭「光来」の(④⑧⑩⑭無「の」)後(⑫ルビ「のち」⑭「ちぎに」)の五百の(⑬も)その大願は(⑬も⑭願い)、(⑭加「是」)皆(⑧ルビ「みんな」⑩めんな)衆生の(⑭しやうぢやが)御(⑭無「御」)為め(②をたみ⑬おんため)で御座る(⑭無「で御座る」)。常(②ちに⑭ちぎに)に御苦勞遊ばし(⑬す)給ひ(⑭くろましまして、是わさて置)、(②加「うじよひずよをみちべきなさる」④加「衆生やうじょうを導きなされ、それはさておき」⑤加「有性非性の道引なさる、之は忉置」⑬加「老小夫女を導き給う」。茲(⑤爰④⑦⑧ここ)に大聖釈迦牟尼(⑭無「大聖釈迦牟尼」)如来(⑭加「の」、御弟子ばかりは(⑤⑬が⑩無「は」⑭御弟子)八万余人(⑭加「と聞いたる」、さ(②偕)て(⑭無「さて」)その中を五百人(加⑦⑧「を」⑫「をば」)お(⑤⑭無「お」)す(②志⑥し)ぐり出して(⑧⑫なされ⑬になり)、五百羅漢とお名付けなされ(②④⑤⑧⑫る⑬り、⑭「申なる」、(⑭加「其中百人すぐるだして百佛かんと申なり」)それを(②⑤⑦無「それを」)さてまた(②「また」を「其中を」(⑤加「それを」)(⑧⑫⑬「それをさてまた」を「五百羅漢のさてその中で(⑬を」)(⑭「そのなか」)五十人を(⑫加「ば」)お(②⑭無「お」)す(②⑥し)ぐり出して(⑬「だして」を「になり」)、(⑫加「それをすなわち」⑬加「これを」)五十羅漢と(②⑥⑦⑧加「御」)名(⑦無「名」)付けなされ(②⑧⑫る、「名付けなされ」を⑬「申す」⑭「申なる」、五十人中(⑭無「五十人中」⑥ルビ「ナカ」⑫無「中」)(②⑧加「のさて其中」⑫加「さてあるなか」⑭「そのなか」)を(⑬加「ば」)十六(⑬加「人を」)選び(⑭すぐりだして②加「なさり」⑧⑫「十六選び」

を「十六人を」、これは(2)(4)が(13)を(即ち(6)しなはち)(14無「これは即ち」十六羅漢(14加「と申なる」)、二八羅漢の(10無「の」さて(14無「二八羅漢のさて」その中を、たった(2)たちた(5)唯(13)わず(14)たち)七人御選(2)いら(び(8)おすぐり(13)お選り(14)すぐり)なされ(2)5る、「なされ」を(13)「になり」(14「だして」、(加(2)(5)(8)「これを」(4)「これが」(12)「これがすなわち」七仏(10)ぶち)羅漢と申し(5)す(12)無「と申し」(14)申なり)、阿難尊者(5)(7)(8)(12)(13)加「が」兄(2)あね)弟子尊者(5)「尊者」を「様ぢゃ」(此一句変為(4)「このマなんでも一番弟子は阿難尊者」(14)「あんのお弟子わ阿なんそんぢゃ」)、二番(10)加「の」御弟子(2)寿(は(2)わ(5)(12)(13)「が」(7)(15)「の」、(14)無此一句)フルナイ(2)婦るな(5)富楼那(17)ルビ「ふるなん」の(6)(10)(14)ふるな(11)フルナ(13)ふるないの)尊者、三(10)加「番」の(10)無「の」御弟子は(5)(12)(13)が(10)無「は」目蓮尊者(14)此一句変為「目蓮尊者と申なり」。さては(2)(4)(10)(12)も(7)(15)無「は」東西(7)加「は」憚りながら(5)(8)(13)無此一句、この間「この間」を(5)「其」(10)「其の間」(13)「これや」(8)(12)ルビ「ま」目蓮尊者の由来(10)加「を」、さても(4)無「さても」つらつら尋ねてみれば(5)「見るに」(8)無此一句、(4)加「このマ目蓮はエ」僅(2)わ(じ)か御歳(7)(8)おんとし(14)無此三句)5才のその(2)(4)(5)(7)(8)(10)(12)(13)(14)(15)(16)無「その」春(4)(8)(12)(13)(14)(16)年)に(5)無「に」、(4)加「お釈迦如来の御弟子となって、わず(14)か五歳の春に」、別れ給ふが御(8)無此等語(4)(12)(13)無「御」父「御父」を(7)「ちちうえ」(10)「おちち」(15)「おちちうえ」(4)(5)(8)(12)(13)(16)加「上」様ぢゃ(16)無「様ぢゃ」「様ぢゃ」を(8)「わかれ」(10)「さんぢゃ」、「ぢゃ」を(12)「に」(13)「よ」、(14)此一句変為「父にはなれて」。又も重ねて七つの歳に(4)無此一句(14)此一句変為「七才に」、哀れなるかや(2)(4)(5)な(12)よ、(14)無「哀れなるかや」母(14)加「はなれ」君様に(2)(5)(8)(10)(12)(13)(16)が(4)エ、お(8)御果て(5)加「し」なされて涙(2)(10)なめだ)の種(2)たに)ぢゃ。さては(2)わ(12)(13)も)暫く(10)すばらく(12)(13)これより)元へ(6)い)と戻る(12)し(5)「扱は暫く本へ帰り」、「戻る」を(10)「かえる」(13)「かえ

り」)、調べ(②すらび)て見(②め)るに(⑫⑬れば)、その(⑤「これ」②④⑦⑮「此の」間(⑪「その間」を「さて」も⑬「その間」を「これも」)(無⑧⑭「君様に」以下、⑯「暫く」以下)目蓮五歳(⑥五つ)の年に(④エ⑭無「に」、お(②を)釈迦(⑭無「お釈迦」如来の御弟子となり(④なつてえエ⑤い)て(⑭なる)、昼はひねもす(②「ひねもし」⑥⑩「ひのもし」⑦「日にもす」、夜はよもす(⑥⑩し)がら、二(⑩⑪三)十(④加「と」三歳の(②④⑤⑦⑧⑩⑪⑬⑮⑯無「の」その年までに、(⑭無「昼はひねもす」以下)習い覚え(⑤⑭終り⑥い)し(⑧⑩⑮た)、さて(②其④⑧⑪⑬⑯その⑭無「さて」経巻(⑥きよくわん⑬行願⑭きやう文)は、そもや(⑪さても⑬⑭無「そもや」そもそも(⑭無「そもそも」七千余巻(⑬加「にて」(⑭加「と聞こえたる」、さてある時に目蓮さん(②⑤様⑬尊者)が(⑬無「が」、釈迦の精舎(⑧⑬ルビ「しようぢゃ」のお庭へ(②に⑥い)出て(⑦⑧いでて)(⑭此「二句変為「目れん如来の御寺へ指し上りが、」、主(④⑤⑥⑪⑬四方②⑦⑧⑪⑮⑯よも)の景色(②⑩⑭きしき⑥気しき)を御覧なされ(④⑬り)て(⑧⑯ば)(⑭「なされて」を「すなざるそらいと」、ましま(⑤「ましま」を「在」し(⑬「ましまし」を「ますます」たれば(⑧⑭⑯無此一句)、いづ(②ぢ)く(④⑦⑧⑪⑬「いづく」)ともなく白鳥来たり(⑩⑬る)(⑭「白鳥来り」を「はは鳥一つがい」、梅の梢(②こずい⑤古枝⑥こじい⑦⑧⑮こずえ⑩こじい⑪小枝⑭⑯古木)に、さて巢(⑥し)をかけ(⑥⑩き)て(⑭「栖をくい」、(⑤「て」を「し」)かけ(⑥き)て(⑭無「かけて」十二の卵を生めば(⑤産んで⑭うみおとし)、雄鳥(⑤男鳥⑥をとり⑧⑪ルビ「おちよう」⑩「おんどり」⑭をと小鳥④加「や」)たち行き(⑤立行⑩「たち行き」を「ゆけば」)(加②「ば」⑭「わ」、雌鳥(②めとりが⑩めんとる④⑦⑧⑪⑮⑯加「が」⑧⑪ルビ「めちよう」)来り(⑩きたる④雌鳥来とる⑤女鳥が来る⑭女鳥あといとまりてあたたむる)、雌鳥たちゆけ(④⑦行き)や(②⑭立ち行きば)(⑭あとひ)雄鳥が来り(⑭おとるたちまわり⑤⑥⑩無此一句)、代り代り(⑤替り替り)に(⑭無「代り代りに」)暖め(⑥み④⑦⑧

(12)(15)(16)「温め」ます(6)(10)し(14)あたたま)る。そこで目蓮、鳥の様子をご覧なされて(8)(16)無此一句(12)(13)「ご覧
 になりて」(14)「目蓮よく御覧じて」、さても「さても」を(2)「心へかんず、さてさておもへ」(5)(13)「扱々思ひ」、加
 (4)(7)(8)(11)(12)(15)(16)「心に」(10)「心へ」感じ(2)(10)ず「て見れ(2)り」ば(14)「さても」以下を「ちよちくるいにいた
 るまで」、親となりし(2)なれす(5)成に(14)無「し」もその(2)も、無(10)「その」(14)「もその」子となるも(14)「子
 と成るほどの」、深い因縁(2)(10)ゑんにん(14)深い縁なし)其の訳(8)ルビ「わ」け(10)わき)筋(6)しじ)は(5)
 「筋は」を「しれば」(2)「そのわきしちず」(13)「その訳知らず」、さてもつらつら(5)扱々つくづく(13)聞いてそも
 そも)思うて見れば、(14)「其の訳け筋は」以下を「世のならい中に」子を悲しまぬものぞなき(2)「をやわなき」
 (12)「親もない」(4)(8)(10)(16)無此一句(14)加「とれは」。われは(13)わが)御慈悲(2)をぜひ)の(14)無「われは御
 慈悲の」父母(8)ルビ「ちちはは」様の(4)に(10)「ちちははさんの」(14)「父ほの」、御恩(8)思(13)お思い)お(5)
 う)くり(2)れ)し覚え(2)へ(6)い)もな(8)(16)加「い」し(5)き)「なし」を(4)「ないが」(13)「なきよ」、それ
 を(4)(8)(12)(13)(16)そよと(10)それと(14)「おくりし」以下を「ををくらすして」五才(14)加「のときにすにゆかれし」
 で(14)無「で」父上(5)父君に(13)父上に)はなれ(10)り(14)「はなれ」を「も」、又も(2)(4)加「かさねて」(14)無
 「又も」七つで「七つで」を(2)(4)「七ツの年に」(14)「七才にわかれるなり」(4)加「あわれなるかや」母上(5)母
 人様に(4)母君様が(10)母に(13)母親様に(14)母さまむ)はなれ(4)無「はなれ」(加(4)「お果てなされて涙の種ちゃ」(10)
 「る」、はなれ(5)(13)無「はなれ」別れた(8)(12)(16)し)其の両(ふた)親の(10)無「はなれ別れた其の両親の」、死
 (2)す)ん(15)し)で冥途(5)未来)は(10)と(13)無「は」どう(10)無「どう」遊ばし(4)い)た。愚痴(2)ぐち)
 の(5)(12)(13)(16)な)我身で一才(2)(6)ちよちと)も(5)無「も」知らぬ(2)(4)すらず(13)知らず)。さて(2)(5)(10)加
 「は」(4)(8)加「も」これより難儀(2)なんげ)を致し(4)す)、茲に(2)(5)「茲に」を「どうぞ」に(13)無此二句)

父母 (⑧⑫ルビ「ちちはは」) 両 (⑬ふた) 親共に (④⑫⑬「両親様の」、過 (⑥し) ぎ (②げ) し (⑩無「過ぎ
 し」) 行方 (②⑥⑩ゆくい⑬行く末) を尋ねてみよと (②「めんと」⑥⑬「みよと」を「見たや」に)、音に名高き大
 経読ませ (此一句変為②「ころわさむさのずせちでありどまるのはだかてたち経をよませ」⑤「頃は寒さの節であれ
 ど丸の裸の立経読せ」⑬「頃は寒さの時節であれど丸の裸で小経を読ませ」⑭「はなれはなれ別れた」以下を「ら
 くなしやうどうが、すめかやら、目連さらにしりかたし。かんきの時ははだかの立経をよみ」、昼は法花 (④⑥⑦⑧
 ⑫⑬⑮⑯「華」) 経の御文 (⑧おふみ⑭無「御」を (⑬で) 繰らせ (⑬暮らせ⑭くらし) (②「御文を繰らせ」を
 「ごもんのくらせ」)、(⑥此二句変為「夜るはだかで立ち経を読せ ひるはほき経の御文をくらせ」、昼夜分かたじ
 (②④⑤⑧⑬ず) 見給ひた (⑤け) れど (⑬ば⑩「またまいれども」⑭無此一句)、(⑭加「目連」) 更に未来の行方
 (⑤居所⑫無「行」⑬行く末) が知 (②寿) れぬ (⑤ず) (⑭「更に知りがたし」)。これは (⑧⑯を②こりわ) 如来の
 (④⑧⑯が⑫は) 御存知 (②ごぞんず) なる (⑤⑬り) と (⑩無此一句)、直 (②寿⑥し) ぐに御釈迦のみ許へ (②身
 元へ⑤身許に⑥い⑬おん前へと) 出て (⑦⑧⑫いでて)、さて「さて」を②「みはい」⑤「三拝」④⑧⑫⑯「さて
 も」礼拝 (②らひはい) の (②④⑤⑧⑫無「の」⑪「礼拝は」) 尊敬 (②そんきよ⑥そんぎう⑪ルビ「そんぎよう」
 致し (④なされ) (⑬無「さて礼拝の尊敬致し」、何と (②⑬どうぞ) 御師匠 (⑧⑯大聖) 釈迦牟尼如来 (⑤此一句
 変為「どうぞ御尊の御慈悲を以って」に)、われが「われが」を⑤「我」⑬「わが」父母 (②加「の」) 冥途 (迷
 土) の行方 (②⑥ゆくい⑬行くへ)、知 (②寿) らせ給へ (⑥い) とお願いなされ (②⑤る) (⑬「お願いなされ」を
 「御依頼になり」、拝み上げ (⑩ぎ) ては涙を流し (②「そんきよなざる」、拝み上げ (②⑤「拝みおろし」⑬「拝
 み降っ」) ては (②⑤⑬無「は」) 礼拝致し (②④⑤なざる⑧⑯致す⑬になり) (⑩無「拝み上げては礼拝致し」(⑭
 「これは如来のごぞんじなると」以下を「迷いたるはおのれが心ろは、是如来様のおしひに父法の行衛までしらせて

こそたび給へとはい禮してはふしをがみ」、そこで(14無「そこで」如来は不慙(2婦びん(4不憫(5不便(7(12ふびん)に召(6(13み)され(14「おぼしめし」、これや目蓮これや(4無「や」目蓮よ(10(13無重複「これや目蓮よ」、心沈め(6しじみ)てよくよく聞けよ(10無此一句、13此一句変為「よく聞き給え」、父の行方(2(6ゆくい(13行くへ)を知(2寿)らせてやろう(2(5無重複「これや目蓮」。無「心沈めてよくよく聞けよ」、文末「やろう」を2(13「やるぞ」4「やるぢや」、(2加「心沈めてよくよく聞けよや」、存身(6存命(11(12ルビ「ぞんみ」ところ(5書)は(4(5(8(10(12(16を)(2加「父の此の世の名を」尋ねて見れば(5見に10めれば)(13「存身とくろは尋ねて見れば」を「身のあるところを」、ハラナイ国(2(6原内國(13波羅国)の(2(13で10に)第一番の(5(13無「の第一番の」、チョウレン(2長林(5襍茂輪(6てふり10てふしれ13超輪(14ていおうりん)大(11太)夫(2(13「大王」12ルビ「ダイユ」17諧茂輪大夫ルビ「ておくりんだゆう」と申して(2ゆうて5申す12申されまして、国に稀なる大善人で(4(13ぢや)(14「これや目蓮」以下を「御身の父の家は原内の國ていおうりんたゆと申て善人なり」、高き(2高かけ(14高木)所に(14加「は」九重(12ルビ「クジュウ」の塔を、お建(2御立)てなされて(13お建てになり(14なさり)供養を積(2ち)ませ(14無此一句、道の辻には地藏菩薩(2ばさち)を建立(2こんれやう)なされ(10(13になり)、大川(2だいがだいが5「大川」重複)に(4(8(12(13(16「大きい(13な)川には」14「あまた川には」み(4(13お10大14無「み」舟をつなぎ(2ちなげ)、小(2ちさき4(16小さい5(8(13小さい12小さな14小なる)川には(10無「には」、お(2み大14無「お」橋を(10無「を」かけ(6(10き14)て(14無「て」、人の難儀をお救(2寿く6しく)いなされ(5「人の難儀を救せ給い」13「お救いになり」(14無此一句)、御坊(6宝)や御寺の御寄進(2ごけ寿ん)なぞ(5ど)は、数も(2も)限(2かげ)りも言ひ(2ゆへ6ゆい7(12言い)つ(2ち)くされぬ(5(13ず12「つくさぬ」10「数かぎりなし」(14「まずもかぎりあらばこそ」)。貧な

(10)「ふびんな」者には慈悲(5)「に」加「善根(2)ぜんこん」をお授け(6)さじき)な(5)「お授けな」を「つく」され(2)加「る」(13)「お授けになり」(14)「なして」、哀れなるかや(5)な(2)14無此一句(2)加「かかるしやう志よの御方にも、ずみやうばかれわ、能がれぬものよ」五十四才を一(2)ゑち)期となされ(2)る、「なされ」を(13)「なり」(14)「して」、終(8)ルビ「つい」に(2)あわり(5)加「は」(14)無「終に」無常(5)14加「の風」に相(5)14無「相」誘はれ(10)りて(5)10無「て」、御身(5)加「は」果かなき(2)14く(13)ぎ)、果て過(2)6(13)し)ぎ給ひ(2)たまひ(5)給ふ(7)給ひ(14)「ならせたり」、さす(6)し)が長者の身の程(「身の程」を(2)14こと(5)13事)なれば、一家(2)いつき、ルビ11「け」12「イツキ」14無「一家」眷(10)きん)属寄り集(2)あちま)りて(13)集まって、野辺(2)のび)の葬式送りを致し(2)しれば(4)すれば(5)「野辺の送り扱其時に」13「送りの時に」(14)「野辺の送りの其中は」、西の方より(5)1314無「西の方より」紫雲(8)しうん(14)くむが)たなびき(2)く、諸仏や(14)無「や」ボサツ(5)8(12)13菩薩(4)諸菩薩、数や(2)5(6)13も)数々(10)かじかじ(14)無「数や数々」御迎へ(2)「御向かひ」(5)「御迎へ」を「お送り」(6)7「お迎い」なされ(2)る(14)「なされ」を「し」(4)無此一句13「お迎えになり」、笙(5)簫(6)しやう)や(4)14無「や」簞(8)ルビ「ひつ」11瑟)レキ(8)れき(4)16筆築(5)齋築(6)七りき(12)リキ(13)ひちりき(2)「しよやひちれき」(14)加「や」管絃(2)観喜の(5)1314加「の」遊び、(4)加「数や数々お迎えなされ」目出度悟りを聞(2)へら(6)7(12)15(16)開)かせ給ふ(4)い、此一句変為(5)「目出度く証りを開き」13「めでたき悟りを開き」(14)「ひらく成」。自在安楽限りはないと(14)無此一句)、師匠(5)始終(14)無「師匠」如来は(14)加「ししゆを」語らせ給ふ(2)い(14)「給ふ」を「れは」。そこで目蓮仰せ(14)目蓮わ是)を聞いて、さても(5)13無「さても」嬉しや、やれ(2)6(り)14無「やれ」有難や(13)無「さても嬉しや、やれ有難や」(14)加「と」、父の身(10)め)の上御安気(2)あんけ)なされ(2)4る、「御安気なされ」を(5)「貴き事と」13「尊きことと」(14)無

此一句)、始終(②⑭無「始終」⑤殊勝)(⑭加「よろこび」涙に(②ね)さて(⑭無「さて」暮れにけり(②ねきり⑬「さて暮れにけり」を「果くれ給う」)(④此一句變為「深く喜び衣の袖で落つる涙をおしとめ給ひ」)。

——⑩『目蓮道行』は以上の初段のみ。

第二段

弟子の(⑬無「の」)目蓮父の身の上御安気(②ごあんけ)なされ(②る⑬「なされ」を「になり」)、深く(⑤⑭深き)喜び(⑥悦び)(⑭加「なみだを」衣の袖で(⑭に②無此一句④無冒頭二句)、落つる(⑥おちり)涙を(②加「衣の袖で」⑭無「落つる涙を」)押しとめ(⑥押しとみ②をすとみ⑬⑭押しとどめ)給ふ(②④たまい⑭無「給ふ」)。何と(②④どうぞ)御師匠(②主④大聖)釈迦牟尼如来(②加「様」⑭「何と」以下を「のう如来様」)、われ(⑬無「れ」)が一人(②しとれ)の母人さん(②⑬様)の(此一句變為④「われに一つの願がござる」)、(④加「母の冥途のサテその」)行方(②加「ひ」⑬行く末絵)知らせて下され(⑥被下)給へ(②「くださるませ」「下されませ」⑬給い、⑭「われが一人」以下を「母のゆきいもしらせてくださる」と(⑤⑧無「と」、(④加「拝み上げては礼拝なされ」、たのみ(⑤頼み)ますと(此一句改為②「をがみあきてわ」④「拝み上げては」⑬「願ひ願いと」、三拝(⑤⑥参拝)致し(⑧す⑤なされ②④なさる⑬になり)(⑭「たのみますと」を「ほときへをねがひまされば」)、そこで、大聖釈迦牟尼如来(⑬加「のおっしゃるようは」)、これや目蓮これや(⑧⑬無「や」)目蓮よ(②無重複「これや目蓮や」⑤⑬無重複「これや目蓮」)、母の冥途に(②めいどの⑥迷途の④⑦⑧⑬⑭冥途の)さてその事を、聞いて思ひ(⑬偲び)を致さう(④ん⑬いたためそう)よりは、聞かぬその気(②⑤方)が(②わ⑬は)そも(⑬それ)増しであろう(「増しであろう」を②「ますぢやぞや」④「増しぢやろうよ」⑤「増ぢやぞや」⑥「まして

あるを」⑧⑫「増しぢやろう」⑬「増すぞやと」。⑭「そこで大聖釈迦牟尼如来」以下を「母の行いを聞いておも
いをしより、きかんむかしわましぢやぞや」(加②「ゆわりまされば」④「言われますれば」、そこで⑬「お
せらるれば」②⑭無「そこで」目蓮(加②「様わなをもさ」④「さまはなおもなおな」⑬「尊者なおもこのこ
と」心にかかり②⑬る、母の闇路②やめじ⑥やみず)を⑬のさてそのことを御⑬無「御」知らせ給へ
「給へ」を②「ありと」⑬「給へと」④此一句変為「どうぞ大聖釈迦牟尼如来」、拝み上げては⑤拝み「まする
と」⑬「お願いになり」礼拝致し⑧す②⑤拝礼なさる⑫拝礼致す⑬無「拝礼致し」加「そこで如来は不便にみさ
れ」。②加「おがみをろしてそんきよなさる、そこで如来はふびんね見され」⑭「目蓮心にかかり」以下を「目
蓮是を聞くよりも、なにとぞ如来様しらせてこそはたび玉へと、はいれしてわふしおが見」、さらば②されば「行
方②⑥ゆくい」を知らせてやろう②やるぞ⑥やろふ⑬やるで⑭「さらば」以下を「さらばかたりてこそは
さすべし」。心沈⑤慎⑥しじめて②心たしかに「よくよく聞けよ②聞けや⑭聞たまい」。母の⑤無「母
の」此の世の名を尋ね④⑥⑧⑪⑬たづぬれば②尋ぬりば⑭「母の」以下を「おん身の母わ」、ハラナイ
⑤原内⑬波羅陀⑭原の「国で⑬にて、第一番②「原内國にて大一番」の⑭「第一番の」を「い國う北の
方」、ショウダイブジョ②しよだいぶ女⑤處大扇女ルビ「しよだいぶぢよ」⑥「しよだいぶぢよ」⑦「ショウ
イブジョ」⑬諸提婦女⑭小大しやう⑭処大扇女と云ふ⑭申て大②加「て、國ねまねなるたい」、加④⑧⑫「て、
國にまねなる大」⑬「て國にまされし大」悪人ぢや②で⑭なり。父の建て⑤立置く⑥をく⑭父のこん
立したまいし九重⑫ルビ「クジュウ」の塔や②⑤⑭も、舟⑦身④⑧⑫道や橋々地藏さん②⑬様迄も
⑭此一句変為「地藏も」、悪な⑤い心できり②きる⑤加「が」なく⑬切なき思ひ、たまに⑤「たま
に」を「國の」たまたま④たまのたまのエ歳④加「のエ」⑤年⑭「悪な心で」以下を「なんきな者にもな

ん付、大川つなぎし舟も、小なる川かけたる橋も、心の内にくぎをぬくゆうな、あさましき心なる」春彼岸(4
 「春の彼岸や」14「はるひがんの中」と)、秋の彼岸(2彼岸13加「の彼岸」)の中日なぞ(4ど)に(14「中日と」、
 真(2寿ん6信7⑪「信」を括弧に併記15しん)の行者(14すんぎひと)に相(14無「相」)誘はれて、御寺詣り
 を致せし時に(13時も2「時に」を「とても」4「致した時に」を「いたしたとても」5無上二句、14「お寺御坊へ
 まいるとも、願うべき」、後生(加12「に」14「後生は」)心は少も(2しこすも)なし(25加「に」(4此一句
 改為「おのが後生を説かれることもエ」(14「願わず」、日(5⑪非)なき(2日なけ)せっぱ(258⑫⑬⑰説
 法)に(2加「むに」)日(5⑪非7目13ひ)をいりそいで「いりそいで」を2「いりてげ」5「言なされ」13「入
 れそいて」17「言いならべ」(14「ひいなきせん法にひをいれて」(4無此一句)、(5加「認の行者に相さそはれて、
 御寺参りを致せし時も」難のなきのに数(⑪ルビ「かず」14なんぎな者には)難つけて(24無此一句、14「なん
 を付」、あのや坊主(14あの坊さま)の言はれ(2「説かれ」6「言はり」)る事も(14ことにで、このや(2ま13
 これや)御師匠(2をしやう45⑬和尚)の説かるる(2ゆわりる4⑬説かれる5語れる)事も(4を)(5無「こ
 のや御師匠」以下)、み(2め)んな嘘や(2ずや45⑥⑬ぢや)と悪(2あくごう4悪ごえ5悪口)計り、僧
 の着たれし(4「着たりし」258⑫⑬無「着たれし」)衣や御袈裟(2をきさ6きさ)を(4加「眺めて」)見ては
 (14無「このや」以下)、あんな奇麗な袈裟衣(25「あんな奇麗いな衣や袈裟」4⑬「あんな奇麗な衣やお袈裟」14
 「ただうちくしきけさやころもに見をちけて」を(13⑭無「を」)、こちの(5こちが13こちらの)目蓮学者(2④⑤
 ⑧⑫尊者)に着せ(13無「せ」)て、着せて(2④⑤⑧⑫⑬無「着せて」)しさいをふらして(2すさいぶらせて5し
 さいぶらせて)眺め(6み)て見たい(25⑬や)(14「こちの目蓮学者」以下を「あるがほしいや目蓮に、これが
 ほしや目蓮に」、欲しい欲しいが(2も)積(2ち)み重りて(2かさなりば4重なつてエ5「ほしやほしやを罪重

なれば」(14 此一句變為「ほしいがあつまるは、物にたとへるば」、沙々(5)「砂子すなご」(2)(6)(13)(15)「いさごいさご」(8)(11)(12)ルビ「いさごいさご」も(5)無「も」(13)が)より集れ(6)り)ば(2)(5)(13)「寄り集まりて」、千尋(2)ちいろ(15)千ひろ)なきだつ(2)ち、「なきたつ」を(5)「たちたつ」(13)「龍立」大盤(2)たいがん(7)(8)(11)(12)(13)磐石(12)ルビ「ダイバンチャク」よ(4)チャイ(5)「千尋たちたつ大岩石は」(14)「沙々もより集まれば」を「いさこのしやうじて、ちりむちむれば山と成」、糸を集め(2)あつみ(14)あちみ)て(4)りや)大(6)をう)綱(5)縄)出来る(14)「なわと成」。憎い(憎き(4)(5)悪い)腹立我慢や我心(13)がしん)が(2)(8)(12)(13)無「が」(4)「がせのイ」漢字ツケ「我心」、さまざまで「さまざまで」を(2)「ちむるつむれば」(4)「積り積って」(8)(12)「積りつもれば」(13)無「さまざまで」(此二句變為(5)「悪い腹立我慢や邪見、つもりつもりて」(6)「がまんやちゃけんが、つもりつもって」、つみばんしゃくや(2)「岩ばんちゃくずや」(4)「罪盤石ぢゃいイ」(5)「罪盤石よ」(8)「罪ばんちゃくや」(13)無「つみばんちゃくや」、かかるし(11)志)きん(しきん)を(2)「ぢゃけん」(4)(5)(13)「邪見」(6)「ぢゃきん」)の(13)な)人々にても、定命(2)ぢみよう(4)(5)寿命(6)ぢやうみやう(12)ルビ「サダメ」(13)「無常」ばかりは免れ難し(2)い(14)「憎い腹立ち」以下を「ただほしいほしい、おしいはらだち、がまんがしんずん有る人も」、終(2)ちい(8)(12)(13)ついに(14)「はつかおはるの元となり」三十二才の時に(加(2)をいちごとなされ(14)を「一」として、はげ(2)はけ(5)烈)し(4)加「き」(12)(13)加「い」無常に相誘はれて(2)わりて(14)「むぢやうの風にさそわるて」、闇(8)(12)ルビ「くら」き冥途へ(2)みひどい(4)冥途に(5)迷土に)墮ち(2)おつ)行き給ふ(2)(13)たるぞ(5)落ち行きたれば(14)「御身はかなきも成給へ」。(2)加「なれど長者のめのことゆいに」あとで(4)あとに(5)跡に、「あとで」を(13)「さすが長者の身の事なれば一家」(14)「さすが長者の事成わ」眷属(4)親族)より集りて(5)(13)寄り集まって(14)あちまりてのびをくるをいたしきる)、野辺(2)野び)の葬式(14)無「の葬式」送りをす(2)し(6)志)れば(14)「おくるその

中に」、父の野辺(②野び④時)とは天地の(⑭加「ま」)ち(②つ)がい、青き(②はれし④青空⑤晴し)天気も暫時(②さんず⑬ルビ「たちまち」)に曇り(②くもる)、天火(②てんひ⑬天日)稲妻はだはだ(②はたばた⑤⑬はたはた⑥ばたばた)神(⑤雷)ぢや、其のまん(無②④「ん」⑬「まん」)中より(⑤真中ルビ「マッタダナカ」にと⑬中に)鬼神(②きずん)が降(⑤下⑪を)り(②をれ)て(⑭「青き天気も暫時に」以下を「よき日も一てん世かいかきくもり、天にいなじまは、ふくかみなり、其中よりも火の車がまへおれて」、母を納め(②み)し棺桶破り(⑤棺蹴やぶり⑬棺けまぐりて)(⑭此一句変為「くわんを貳ちに、うそわけやぶり」、中(⑬母)の死骸(②しい⑤母の死体⑬死体)をひつ掴(②ちか)ま(⑬引き抜か)んと、致す(⑤加「る」⑥し)ところの(⑤⑬を)(②「いたし其時」、(⑬加「お弟子の阿難」)(⑭「中の死骸」以下を「ちちやくくびを、ちかまえんとする」)その日の(⑤無「の」)どうじ(②④⑤⑧⑫導師⑬鬼子)(⑭加「は」、阿難学者(②④⑥⑧⑫⑬⑭⑮尊者)は(②④⑤⑥⑬が)(⑭成ば)、仰天(②げよてん⑥ぎよてん⑪ルビ「げやうてん」)なされ(②る⑬り)(⑭「ちと斗りにをむひし」、袈裟(②⑭きさや)や衣を投げつけ(②④⑤⑬⑭かけ⑥き)給ひ(⑬給う⑭「給ひ」を「て」、袈裟(④加「や衣」)の功德で(④「で」を「によって」)死骸(⑤死体)を捨(②⑥し)てて(⑬「捨てて」を「残し」)(⑭「からだわ下へとおとせども」、四寸四方(⑫ルビ「ヨンスンシホウ」)の(④無「の」)魂ばかり(⑭さらわ)、業の焰(②ほのほ⑥炎)の車に乗せて(⑭「火の車に打ちのりて」、死出の山坂(⑬山路を)、涙で越せば(②こして⑤越て⑬越して)、さても泣き泣き(④「泣き泣き」を「早速」⑬此一句「ほども早速」)閻魔(⑥いんま⑪ルビ「ゑんま」)の前(②まい)に(⑬で④「ぢや」此一句変為②「ほども早速ゑんまのまいに」⑤「程も早速閻魔の前ぢや」)(⑭「死出の山坂、涙で越せば」以下を「八万地ごくへとゑそぐなり。地ごくとてもほかになし、立はらも身立、作りしつみも身ながら作り、われとのり行火の車」、閻魔(⑥いんま)大王(⑧⑫⑬加「よくみたま」⑬加「て」

大音声 (⑧⑪ルビ「じよう」) で (②④⑤「大音声で」を「能く見給て」⑬無「大音声で」) (⑭「いんま大王様御らんじて」、さて (④ヤレ⑤扱) も (②④無「も」) 恐ろし (④加「や」) この罪人 (②ざいにん) は、ほかに造りし (⑤勝れし) 大悪人ぢや (此一句變為②④⑧⑫⑬「なみやた (⑧⑫大) いてものではないと (④ぞエ」)。 (④加「つみえおつくりし大悪人ぢやイ」) (⑭「さても恐ろし」以下を「あらおそろしやざいにんや」業 (④⑧⑫⑬罪) も (②④⑧⑫⑬⑭の) 深さ (⑬重さ⑭深き) を御覽に試めし「御覽の試し」を②④⑤⑧⑫⑬「御覽の (⑬が) 為」⑭「見んたみ」に、業の秤 (②はかり⑭この斗) をとりよせ (⑬⑭出し) 給ひ (②へ⑭無「給ひ」、秤 (②はかれ⑭無「秤」) 分銅 (②ふんど⑤⑬鍾⑪ルビ「ふんど」) は千人つる (②ぢり④⑤つり⑧⑫づり⑬づる) の、岩を (⑤の⑬加「廻して」) 分銅 (②ふんど⑤鍾⑬鍾) に (②④⑬と⑤無「に」) あそばしければ (⑭して、②④「ければ」を「たまい」、吾れと吾が身 (②⑧⑫⑬無此一句、「吾れと吾が身」を④「わずか小さい」⑤「僅か小さき魂ばかり」⑬「わずか」⑭「わぢか人間のたましんに」)、 (④加「四寸四方のたましいばかり」、四寸四方 (⑬無「四方」) のみざら (④ふかま⑤御皿) の中に (②い⑬「四寸の目皿の中に」⑭「のみざらの中に」を「さらの内」)、 (②加「四寸四方のたましいのせて」) かかる有 (⑬罪) 様つくづく (②ちくぢく⑬よくよく) 見れば (②みりば⑤聞けば)、岩の分銅 (⑤鍾⑬鍾ど) は (⑬「は」を「が有」ルビ「う」) 中 (⑤字⑥ちよ) 天迄も (⑤⑬無「も」、さま (④サモ) とび (⑤様飛) 上る (⑬り②無此一句、⑭「かかる有様」以下を「大きな岩はちうてんへと上れ」)、 (⑧⑫加「吾と吾が身は」) 業 (④五分⑬四寸四方の彼) の (⑭無「業の」) 魂 (⑤⑬⑭加「は」) 大地に沈 (②すじ⑥しじ) む。 (②加「岩のふうどわ中天までもさまとびあがる」⑭「大地に沈む」を「大地にねる込成」)。そこで大王よく「そこで大王よく」を⑬「かくのありさま大王様が」⑭「大わう」御覽 (②無此一句⑪ルビ「らう」) じて (⑭ず⑬になりて)、あら (②やや) 恐 (⑪ルビ「をそ」) ろし (⑧⑫「あら怖うし」④⑤⑬⑭⑮加「や」) 此罪人は (⑭罪人ども)、並 (②

なめ)や大程(④⑤大抵②⑥たいて)の者ではないと(②ぞ)(⑭無此一句)、(⑭加「一度」)娑婆の相(④⑤⑬娑②⑥しがた⑪ルビ「すがた」)を、御覽に試め(⑥み)し(②たみ、「御覽の試し」を④⑤⑧⑫⑬「御覽の(⑬が)為」⑭「みせんがため」)に(④ぢゃい⑭加「と」)、嘘を(②⑤の④は)言はれ(②り)ぬ(⑬れん)(⑭無「嘘を言はれぬ」浄瑠璃鏡(②⑤浄波利鏡④浄玻璃鏡⑥ぢゃう張り鏡み⑭じゅはりのかがみを⑰情波利鏡)、是で分るとか(④分かるうか⑤「是で写るかと彼」⑬「これで訳かりと彼」)の(⑬無「の」)罪人の(④よ⑤を)、前に直してよく見給へ(⑥ひ)ば(⑭「是で分かると」以下「を取出しさん前におかれよく御らんじて候得ば、からだにわ」、九萬八足(⑰属②九萬八ツそく④九萬八千⑤四萬八属⑭九萬八そうの)鱗を立てて(②⑬かいし④かえし⑭「をろこをさかだて」、頭(⑧ルビ「かしら」)十と二本(④「頭には十と二本」を④「頭十二」⑬「頭業に十二」⑭「頭には拾貳本」)の角(⑭ちを⑬加「をば」)ふり上げて(⑬延ばし⑭無「て」、此一句變為②「ごうのこうびに十二の角やまたわ」⑤「業の頭二十二の角や、又は」、④加「火焰吹き出すその有様を」(⑭加「まなこには」)四角眼(⑥まなこ⑧⑪⑬ルビ「まなこ」)に八つ角(⑭「八角を」)立てて(此一句變為②「四角に八角まなこ」⑤「四角八角眼」、火焰(⑥火いん)吹き出す(②⑬し⑭「口ちにはくれないのしたをまきいたし」⑬加「舌巻き上る」)其(⑬こ)の有様を(④無此一句⑬無「を」、御覽なされて(②無「て」⑬「御覽なされて」を「大王様が御覽になりて」此悪人は(②このざいにんの⑧「此罪人は」⑬「この罪人の」、罪(②ちみ)の定め(②み)は八万地獄。さらば獄卒(②ごくそち)呼び(②よべ)よせんとて(④呼び寄せられて⑬無「とて」、くわん(⑤「呼」)の鼓(②つちみ⑥つちみ)を打ちたまわ(⑧⑫「打ちならさ」)れ(②り⑬「打ちならせ」)ば(⑤「打給へければ」)(⑭「其の有様を」以下を「サア、是より八萬越ごくつは見しるか、つづ見をうち玉へとつづみを打たば」、あほ(②あほう④阿房⑤阿防)を(②④⑤無「を」)羅刹(②⑮らせち、⑪「らせち」)や(⑬の)獄卒共が、九丈二尺(⑧⑫天)の鉄(⑬ルビ

「かな」棒と(②⑥⑦⑧⑪⑫⑬⑮を④無「と」持つて(②もちて)(⑭「あほを羅刹や」以下を「ごくそつともは」、山も崩るる(②「山のくぢれる」④⑤崩れる⑬「山の崩るる」⑭「山もくづるおと成」如くに来り(⑬る)、哀れ(②り)なるか(⑥無「か」や(④な)、やれ(②⑬さて⑤扱⑥あな)恐ろしや、三の御(②め)弟子の目蓮さんが(②⑤⑬様の)(④⑧⑫無此一句)、(④加「母人さまもエ」母のめぐり(④めぐら⑤ぐるり⑬めぐる)に(⑬を)よりあつまりて(②よりあつまりて④寄り集まって⑤寄り集りて⑬追い取まわし)(⑭無「如く来り」以下)、九丈二尺(⑧⑫天)のか(⑤彼)の(②⑭無「かの」鉄棒で(②「鉄棒をもちて」⑭「こちほうを持て、ねら見してはせ来り」)、(⑬無「九丈二尺のかの鉄棒で」)(②加「母をやさまの」左腕(②左りかいな⑥たいな④⑦⑧⑪⑬ルビ「かいな」を右へ(⑥い)と通(②とう④なをし)し、右の腕を左へ通し(②④⑤無此一句)(⑭「左たのかいなより右のかいなへ指をとし、」)、大王仰せの(⑭無「大王仰せの」八万地獄へ(④に⑤⑧⑫⑬無「へ」)、墮ち(②つ)た事には相違が(②「ちがいが」⑥違は⑬間違い)ないと、如来精(⑤委②⑥⑬くわ、⑧⑪⑫ルビ「くわ」しく御咄しあれ(②り)ば(⑬「御咄しあれば」を「お話になり」)、弟子の目蓮涙を流し(⑬此一句変為「そこで目蓮仰せを聞いて、あつき涙をほろほろ流し」、(⑭「墮ちた」以下を「ましさかさまに、おとさんとするなり。今此ようがまづすぐに木たりとも、あとへらぬぢごくなり。如来はしじやうを語せば、目蓮は」)さてもいたわし(②をいとし⑤「いとしの」⑬「いとし」⑭さてもおいとしひのは)母人さんや(⑬様よ⑭「はは様さまやと」、あと(跡)へ(②⑥い)かへ(②⑥い⑤⑬帰)らぬありさま(⑥有様)なりと(②なりど)、とかく(⑬深く)嘆かせ給ふなり(②此一句変為「とかくなんげをしたもらんと、いとしなみだにさてくれにきり」⑭「あとへかへらぬ」以下を「なくより外の事ぞなし」)。

——⑮『目蓮尊者』は第一段からここまで。

第三段

時に目蓮嘆き(⑥なきき)の涙(②④加「を」)、召した(②「めしなされし」⑬「着した」⑤加「る」)衣のみ
 (②⑬無「み」)袖で(⑬袖にて)ぬぐひ(②を)しとみたまい④⑧⑫⑬ぬぐい、(⑬加「直に」)釈迦の御(⑤身の)
 前に(⑬へ出て)、さしうつ(②ち)むいて(⑬無此一句)、どうぞ大聖(⑨大庄⑬御師匠)釈迦牟尼如来、我に一つ
 (②ち)のお(②④⑤⑦⑧⑫⑬無「お」)願ひ(②⑨「にがい」⑤「い」を「み」)が御座る。地獄巡り(②る)の
 (⑨ぬ)さの(⑤扱②⑥⑧⑨⑬⑬さて)其の為に(⑭「時に目蓮嘆きの涙」以下を「目蓮わせきくるなみだおしとど
 み、のう如来様、なにとぞ目蓮」、三日三晩(②④⑤⑥⑦⑨⑬⑬⑬夜)のお暇(⑥御回向)を願ひ(②ねがや⑤願へ
 ば④⑧⑫願う⑨ねかい)は(⑬加「そこで世尊の曰(ルビ「のたも」)うようは」(⑭「を願ひ」を「くだされませ
 と」)、これや目蓮これや(④⑧⑫こりや)目蓮よ(無重複②⑨⑬「これや目蓮や」⑤「これや目蓮よ」)(⑭「如来な
 におぼしめし目蓮」)、三日三晩(②④⑤⑥⑦⑨⑫⑬⑬⑬夜)や七七七日夜(②「なな七日」⑫ルビ「ナナヌカヨ」④⑤
 七日七夜(⑭無「や七七七日夜」⑧⑪ルビ「なななぬかよ」⑬「七七七」ルビ「なななななぬ」)日(⑥では⑥⑨無
 「は」)、巡(⑬廻)り(⑨られ)つくせぬ(⑨⑬ん)地獄ぢや(⑤や⑨「づごくざや」)程(②ほうど)に、よって
 (②よりて)汝(②なんず⑨なんづ)に(⑭「巡りつくせぬ」以下を「目蓮はてられの地ごくなり」)百日百夜に(⑤
 ⑬無「に」②④⑥⑦⑧⑨⑫⑬の)暇(⑧⑪ルビ「いとま」)をとらする程に(②「とらし」⑤「る程に」を「ぞ」⑬
 「取らせる」)、心丈夫に立(ルビ⑧「しつたつ」⑫「シュッタツ」)せよ(②⑬「無此一句」⑤⑨此句変為「巡りて
 こいよ」)、それについては難儀な(⑨の)道中(②加「を」)し(②す)のがん(⑦しよがん)為(②たみ)に、釈
 迦の宝の(無②⑥⑨⑬「釈迦の宝の」)(⑭「心丈夫に」以下を「みくらせと、如来よりくだされた」)くわん原(④

くわんばら⑤兼求⑬冠婆羅 蓑(⑨めの②⑧「くわんばらみの」)に、同(②をな)じ宝の(⑭無「同じ宝の」⑰同宝)くわん原(④くわんばら⑤兼求⑬冠ばら)笠に(②⑤⑨「に」を「と」⑧⑫「くわんばらみのに」⑭無「に」)
 (⑦此二句変為「釈迦の宝のくわんあつみのに、同じ宝のくわんあつみのに」)、剣(⑥つるぎ⑧⑪⑫ルビ「つるぎ」)
 (⑭加「の」)峠(⑨とうぎ)をしのがん為(②⑭たみ)に、ギバ(②ぎば④⑤⑫⑰善婆⑨⑭きば⑬木ば)の靴(②⑭くち⑤屈)をば(⑬⑭無「ば」)とらす(⑨たらし)る程(②ゆい)に(⑭「をばとらする程に」を「くだされたる」)、心たし(⑥心慥)か(⑬「心たっしゃ」)に出立(⑨しゅつたし)致せ。そこで(②「をうせられりば」)目蓮(②加「様わ」)おし(⑤⑬押)戴いて(⑨おしいたきて⑤⑨⑬加「拝を致して」)(⑭「心たしかに」以下を「目蓮取ておしいたき」)、悦(②⑤⑬喜)ひ給ひ(②此一句変為「ふかく喜びおすいただいて、をんれをいたし」)(⑭「はい禮してはふしをがみ」)、直ぐに(②無「直ぐに」⑨しぐに⑬ただちに)そのまま学問どころ(⑤⑭学文所へ⑬「学問所で」⑨「どころ」を「しゅで」②此一句変為「学もん場へはいりなさり、つねつね」)、御覧なされて(②る⑤⑨⑬し⑭とるこんで先ち)法華(②⑨ほき⑥法き⑭法京)経を(⑭「の文を」)始(②はず)め(⑭「手にとらせ」)、又は浄土の三部(⑨さんば②加「の」)経や(⑭「しやう道屋引さん法きやう」)、女人(⑤無「人」)たず(②⑥し)か(⑤助ける)るきちぶん(②きちぶん⑤結紛④⑧⑫⑬吉文⑨きつぶん⑭きこなを)経や(⑭京より⑬無此一句)、地藏経(②加「あまたを経」)をば(②無「ば」)とり出で給ひ(②④⑤取出し給ひ⑬取り出し給う)、折のないのに折り目を(加④⑤「ば」⑬「折り目を」を「おりをぞ」)つけて(②⑨「をりをばつきて」)(⑭「をば」以下を「おりなおりに折を付」)、笈(②をいずる⑥をい⑦⑧おい⑪⑬ルビ「おい」)の中へ(⑨ない⑭中い)と、したたみ(②すたため⑤認め⑨しだめ)込んで(⑭「たた見こめ」)、旅の装束(②しよぞく)経(⑥京)帷巾(⑤帷子⑥平⑦⑧⑫⑬かたびら⑨かたべら⑪ルビ「かたびら」)に(⑭此一句変為「からだのしやうそく、かざりたてれわ、はだ

には緑のかたびらをみす)、墨(②すめ⑥しみ⑦黒)の衣に(⑨や)墨(②⑨すめ⑥しみ⑦黒⑬墨ルビ「くろ」⑭加「の」)袈裟(⑥ぎさ⑨きさ)かけて(⑤掛けて②⑥⑨かきて⑭無「かけて」、綾(②あや⑤除難⑬絞り)の脚絆(②けはん⑦脚絆⑧⑬きやはん⑨きやは)に、きやぶ(②けよび④きょうひ⑤去火⑥きやうぶ⑨きやべ⑬清美⑭あや)の足袋(⑨たべ)に(②⑤や⑬ぢゃ⑭無「に」、こ(④⑥⑧⑪⑫⑬⑭ご)うじ(②しごうの④すかわら⑤すごうの⑨ざしがら⑬こんぞ⑭すこの)草鞋(②⑨⑬わらづ)の紐(⑨へも)をば(⑨「をば」を「ひき」締(②す)めて(⑭「わらじくつをしみ」、紫檀(⑭しやうたんの)矢(⑤墨)立(⑨しやなんやて)を御腰(②みこし⑥⑪身腰⑨めこし⑭無「御」⑧ルビ「みこし」に差い(④⑥⑭差し⑧⑫⑬さい⑨さす⑬搥しルビ「さし」て、(⑬加「杖に六字を書きほりこんで」、御手に(⑭無「御手に」たちま(②たじま④⑤瑪瑙⑬⑭たづま)の数珠(②ずぢ⑤珠数を⑥⑨じじ⑧⑪⑫珠数⑬珠数ルビ「じづ」(⑭加「を」つまわれて(②ちまくりて④⑤⑭つまぐりて⑨つまぐれて⑬まわれて)、道中姿(⑥⑨しがた)の(④⑤に)(④⑧⑫⑬⑭加「負」笈(⑥おいじる⑦おいづる④⑧⑪⑬ルビ「おいづる」)召され(⑨めさり②無此一句)(⑭「道中姿」以下を「おゑをかちたる」、杖(②⑥⑨つい)に(⑭「つい法うにわ、なむの」六字を書き彫り(②掘る)込んで(⑭「ろくじをかきをきなさる」)、(②加「道中しがたのをいずるめされ」、急ぎ給ひし御姿(②をしがた⑤⑨無「御」⑥⑨おしがた)見(⑨め)れ(②⑨り)ば(⑬無「杖に六字を」以下)、今の世界で申さう(②申する⑨もすん)ならば(⑤申すなれば)、二十余輩(②⑨二十四はい⑤⑧⑫⑬二十四輩⑥二十四拜)の(⑨無「の」)姿(②⑥⑨しがた)の如し(②④⑤⑥⑨⑬く)。地獄どこぞ(②地獄どこぢやう⑤地獄の事ぞ⑬地獄何国ルビ「いずこ」よ)と御(⑨無「御」)思案(⑨加「を」)なされ(⑨り②思案をなさる⑬無「御思案なされ」、南(⑨めなめ)を(②⑨無「を」)指して(②加「ぞを」④さいては⑨加「ぞ」)急がれ給ひ(②なさる④給う⑬お急ぎ給う)(⑭「急ぎ給ひし」以下を「たとへていうならば、中よはゐのすかたとなせ、ぢごくを

さして、⁽⁶⁾急ぎ給へばはや⁽⁶⁾早⁽¹⁴⁾「いそかれゆけば」程もなく⁽⁵⁾間程となや、⁽²⁾娑婆⁽²⁾すやばと⁽¹⁴⁾冥途⁽¹⁴⁾迷途⁽¹⁴⁾のされ⁽²⁾④⑤⑨⑬⑭無「され」⑦⑧⑫⑯さて⁽¹⁴⁾其の境⁽¹⁴⁾そのあゑに②⑨加「めが」^(加)④「目ぢゃ」⑤「なる」⑬「山めは」⑭、常に聞き入る⁽⁴⁾おる②常にきこいし⑤身が常に聞く⑨つねつねきこいし⑬常に聞ルビ「きこえ」し⑭無此一句、六道の辻⁽²⁾辻ず⁽²⁾や⁽⁴⁾⑨ぢゃ⑬で、まぎれまぎれ⁽⁹⁾まぎりまぎり⁽⁹⁾て⁽²⁾④⑧⑨⑫⑯し⁽¹⁴⁾「ろくどのつづと申て」六筋⁽²⁾⑭むすず、ルビ⑧⑫「きん」⑧むじ⑪むすじ⁽¹⁴⁾の道⁽⁹⁾めつ⁽²⁾や⁽²⁾⑨で④を⑤ぢゃ⑭「道や」を「道ありないし」⁽¹³⁾無「まぎれまぎれて」以下、そこで「そこで」を②「しいをされし」④⑤「末をさとりし」⑨「すいをさとりし」⑬「未ルビ」さき⁽¹³⁾を悟りし⁽¹³⁾目蓮^(加)②⑬「様」④⑤⑨「さん」は⁽⁴⁾⑨⑬も⁽⁴⁾つと⁽⁴⁾⑤⑧⑬は⁽⁴⁾と⑨「はと」心⁽⁹⁾加「い」を⁽⁵⁾に⁽⁹⁾御⁽⁹⁾無「御」まどい⁽⁴⁾え⁽⁴⁾なされ⁽¹⁴⁾「なされ」を②「なさる」⑤「成り」⑨「なさり」⁽¹⁴⁾無「そこで」以下、これで⁽⁴⁾⑤⑨「是は」ならぬと⁽¹³⁾加「氣を取り直し、急ぎ」負笈⁽²⁾をひぢり⑤笈づる⑥おいぢり⑨おいじるを⑫ルビ「オイヅル」⑭おる⁽¹³⁾加「早速」⑭加「を」お⁽²⁾⑪⑭を⁽⁵⁾ろ⁽⁵⁾下⁽¹⁴⁾し、地藏⁽⁹⁾ぢぞ⁽²⁾堂⁽²⁾④⑤⑥⑧⑨⑫⑭⑯經⁽¹⁴⁾をば⁽⁹⁾⑭無「ば」と⁽²⁾④⑤⑥⑬取⁽¹⁴⁾り出し給ひ⁽¹⁴⁾無「給ひ」、涙もる共⁽¹³⁾「涙ながらに」御⁽¹²⁾ルビ「オン」読み⁽²⁾どくずよ⑨およめ⁽⁶⁾あれば⁽⁶⁾ありば⑬なりて⁽¹⁴⁾「せつながうちによませたり」、奇瑞⁽²⁾⑥きじい⑨しきしい不思議や御僧方⁽²⁾がた⁽¹¹⁾が、しし⁽¹¹⁾志⁽¹¹⁾ろ⁽¹¹⁾ししろ⁽²⁾を②⑤殊勝⑨しゆしや⑬衆生⁽⁹⁾姿⁽⁹⁾をしがた⁽²⁾で六人きん⁽⁵⁾⑬現⁽¹²⁾じ⁽²⁾「きんじ」を「けんず」⑨「きんじ」⁽¹⁴⁾「奇瑞」以下を「あらふしぎなるや、をそろくにんあらわれて」、そこで目蓮⁽⁹⁾もくりん⁽¹³⁾か⁽¹³⁾彼⑤「目蓮か」を「彼」に⁽¹⁴⁾の御僧を、拜み上げ⁽²⁾⑨おがめあぎ⁽⁵⁾ては参⁽⁵⁾⑬三⑨さん⁽²⁾拜なされ⁽²⁾る⑨り、我⁽⁹⁾わり⁽⁹⁾は天竺⁽⁹⁾てんづく⁽¹⁴⁾「そこで」以下を「のう御そうさまそれがしわ」釈迦牟尼如来、三の御弟子⁽²⁾みでし⑭「三人の出し」⑬無「御」の目蓮なるが⁽¹⁴⁾「目

蓮なり)、一人(⑨へとる)居給ふ(⑬⑭「居給ふ」を「持ちたる」)母人(②母をや⑨ははべと)さん(⑬様)が、罪(②ちみ⑥ちめ)が重く(⑨「つめをもさに」)て八万地獄(⑬加「に」)、墮ち(⑨つ)て苛(②くろし⑤⑥苦④⑧⑫ルビ「くる」し⑬「落ちて苦し」)み(⑨め)給ふ(②なさる)と聞いて、母を尋ね(②⑨に)てまい(⑤参りて御座る(⑬此一句変為「尋ね尋ねてこれまで来り」)。どうぞ、御僧(⑨おんそ)御慈悲(⑥ぜひ⑨ずへ)をもつて、道を教へ(②⑥おしい)て下され(⑥被下⑨り)給ひ(⑬給え)、願います(⑨まします)と(⑬「願ひ上げては」涙を流し(②「なみだもろともをねがいなさる」⑤⑨⑬「涙をこぼし」、そこで六人御僧方(⑨をんそさん)が(②わ)、そ(⑨こ)れはたっ(⑦たう)とい(⑤貴や⑨とうとや②「これかとうとや」⑬「これは尊者や」、さて有難や(⑭「母人さん」以下を「ははさまはあくな人そきて、おちたるが八萬ぢごくへだざいをなされ、をかむせもなしときき、これぢごくのしうきやういたしたくなる、御そうは小れをきくよりむ」。昔々の大(②⑬その⑨またその)昔より、今が今まで(⑤とて)(⑭「もかしからいまにいたるまで」)此の六道へ、僧の来らせ給ふ(⑬「僧の来らりす給い」という(⑤言)は、ためしなき(②たぐいしてなき⑤ためし少なき⑬ためしも少なし⑨ためししくなき)珍らし(②みじらし⑥めじらし)事ぢや(②⑤⑬事よ)(⑭「此の六道へ」以下を「たみしすくなきめずらしき」)(⑬加「実に奇特のおころざしや」。親を尋ね(②に)て来る子もな(⑬加「い」し(⑤く)。(②⑤⑥⑨⑬加「子を尋ね(②に)てくる親もなし」)(⑭「親様たすにす小ともなし、こをたつにれ親むなし。ようこそたづねにてまいらせたる」。さても(⑤無「さても」し(⑪志)やうし(②師匠⑤殊勝⑨しゅぢや)の御志(②な心ざしや)(②加「をしいまふさめ御聞きありや、さてもこれよる地獄の道わ」、げ(⑥ぎ)にも是より(②無「げにも是より」)難所(②なじよ⑥なぢやう⑨ぢや)で御座る。此の間(⑤無「間」)末(②⑥⑦⑨しい⑪ルビ「志い」⑬未^マルビ「つぎ」)には(②「には」を「ゆけば」)三途(②さんず⑥三地)の磧(②だいが⑤大河かわら⑥川ら④⑧

⑫⑬ルビ「かわら」⑨大川⑬川ぢゃ、そこ(②⑤⑬それ⑨その)をす(②⑥し)ぎ(②ぐ⑤過ぎ)れ(②⑨り)ば
 (⑬「それすぎれば」、しやうじ(②しよす④しよじ④葬頭ルビ「そうず」⑤清水⑦⑧しようじ⑬生死)の川原(⑤
 「河原」以下同じ⑨川平)、ゆるり巡りて(⑬廻って)御帰(⑨る②をかやれ⑤返し)あれ(②⑥あり)と(⑭「さ
 ても」以下を「しよなんかききるなし、こるよりすへをづるかかと申て大かわなり。うちすきは清水川の老母御前と
 ゆうところあり、ゆるりと見ぐらせ給へよ」と、目まじ(⑦目まで⑨めま)せぬ間に消入(②⑥⑦⑨きい④⑧⑫⑬帰
 入ルビ「きい」⑪ルビ「きい」ら(⑤消失)せ給ふ(②たまい)(⑭「目まじ」以下を「御そうわかきむかたちもあ
 らわこそ、をしのこさるてただひとる。うきやなんげわ川もなし。なぎかなしみばかりなり。せきくるなみだをしと
 ど見すへをはるかにいそがしたる」、(②加「そこで目蓮おしのこされて、なみだながらに御礼をいたし、もとのご
 とくにおいずるかずて、なめたながらにいそがりまする。ゆきばほどなく」⑤加「そこで目蓮押残されて、涙ながら
 に笈ずるめされ」(⑨加「そこでもくれんをしのこさるて、なめたながらおいそがりたま、いそぎいそぎばさんづ
 の川ら、川のはさが四万」、⑨『目蓮尊者』はこまでで終わり)(⑬「目まじせぬ」以下を「言うて御僧消らせ給
 う、あとに目蓮押残されて、涙ながらに負笈(ルビ「おいづる」おって、つぎの地獄とお急ぎ給い)」。急ぎ給へば
 (⑭「いそぎゆきばほどなくはや」②無「急ぎ給へば」三途(⑥三地)の川原(②「川原」を「だいが」(⑭加「に
 ちかせたる。此川ふかさが四萬よしゆあり」、川の(⑭無「川の」幅(②④⑥⑧⑪⑫⑬加「さ」⑬「川の広さ」)が
 (⑭「も」四万(⑧⑫ルビ「がん」と由旬(②ゆじん⑥余ぢゃん⑭よしゆうあり④⑧ルビ「ゆじゆん」(②加「川
 のふかさも四万とゆじん」。水(②川)の流れが(②⑤⑬も)同じく(②ぐ)由旬(②ゆじん⑥余ぢゃうん)(⑬
 「同じく由旬」を「四万と由須」、(②加「ちごうあわせて八万ゆじん」⑤加「都合揃って八万由旬」⑬加「都合八万
 由須の川よ」⑭「水の流れが」以下を「ちご八萬よじゆの大川の事なるは」、川の勢い(⑭「い」を「は」⑫勢ルビ

「セ」が、②水のせわ⑬⑭無「い」又三つ刃(⑪⑬ルビ「ば」)の矢先(②「みちばのきりぢや、うせいのはやさわ、たといわなないぞ」⑤「三つ羽のようぢや」⑬「矢先」を「先ぢや」(⑬加「瀬の速さはたといにないぞ」⑭「又三つ刃の矢先」を「みちはの矢をゐることとなり」、はるか(⑦わずか)三途(⑥三地)の川上見ても、せめて(⑬加「小さき渡し舟と」小さき小橋もな(⑥加「い」し(②加「す」(⑬「なし」を「なきあや」、そ(②⑥⑬)これ(②は⑤是ぢや)ならぬと川下見ても、渡し舟とて(⑤舟迄)一艘(②いちそ)も見え(②⑥い)じ(②⑤⑬)ず(⑭「はるか」以下を「かわかみをはるにみに、はしむなし。川しむ見ても舟もなし」。哀れいと(⑬加「お」しの(⑤い)吾が(②⑬無「吾が」母(⑬加「上」)様は(②母びとさんわ⑤「母人さんと」(⑭「さてもいとすやはば様や」、なんと(⑤⑭無「なんと」此の川(⑤加「をば」、どう遊ばした(②どうしたまた⑤どうしたもうた⑭どふしてこいゆと)。(②加「あといかいらぬあるさまなりど、とかくなんげをしたもうらんと、」剣(②ちるげ)呑み込む思(②をも)ひをなして(⑤「思ひをなして」を「母人さんと」、涙乍らに(⑥無「に」(⑭「剣を」以下を「なくよりほかの事ぞなく」負笈(②⑥おいじる④笈擢⑤笈ずる)お(②⑪を)ろし(⑭「おいをかしこにをろしをき」、中の法華(②はき⑥法き)経(②加「を」(⑭「はき京のもんを」)取り出し給ひ(⑥へ)、み(⑥三)声(⑥こい)(⑬「み声」を「三度」)はるかに(⑦たかだか)(②みこいをんじよこゑ高だかと)読誦(②どくじよう⑥加「を」⑧⑬ルビ「どくしょう」⑬お読み)なされ(②る)(⑭「取り出し給ひ」以下を「せんながあへによませたる。橋にもならせ給へにき舟にもなり給へ」)、一の巻す(②⑬よ)み二の巻(②加「き」)出して、紐を解かんと遊ばしたれば(⑭「二つのまきの紐をとき給へは」)、さても(②きじい)不思議や向こうの岸を(②に)(⑭「あらふしぎや、大じやがはせあがるて」、眺め(⑥み)て見れば(⑭その丈⑤遙か御覧じ遊ばしたれば②無「眺めてみれば」(⑬無「さても」以下)、十杖(②④⑤⑥⑦⑧⑪⑫⑬丈)ばかりの旗ひろ(④二十尋ルビ「ハタヒロ」⑬「はたひら」

⑬「旗広」大蛇(⑭「の旗ひろ」以下を「に見へたり」)。水の上に(⑤⑬へ)と顔ふり(②かほふる⑤顔振り)上げて(②る)、其間(⑤無「間」加「の」)大蛇の姿(⑥しがた)を見れ(②り)ば、九万八速(④⑬足⑤属⑧ルビ「そく」)鱗をかへし、顔(⑥頭)には(②④⑤無「顔には」)十と二本の角(②ちの)ふり上げて(⑬頭十二角をば起こし)、四角眼(⑧⑫ルビ「かくまなこ」)には(⑤⑧⑪⑫⑬⑭無「は」)八ツ(⑤無「ツ」)角立てて(此一句變為(②④「まなこ(④眼)日月鏡のごとく」、火焰(②くわいん)吹き出し、紅(⑫⑭「紅」を「紅蓮」ルビ「グレン」)の(②④⑤⑬無「紅の」)舌(②すた⑫加「を」)巻き上げて、川のこちらの目蓮さん(②⑬様)を、今に(②④まさに⑤最早⑥やをや⑬すでに)呑まんと、睨(②⑬「ねら」)んで来たれ(②④⑬る⑤白眼で来る)(⑭「水の」以下を「九萬八千前のをろこをさかだて、小うびにわ拾一本のちのをふり上、眼にわ四角なまなにわ八角を立、くちにわくれないのしたをまきだし、出るいきくわはんふけ目蓮をにら見共」)。心殊勝(②④「なれどらん」⑤⑬清淨ルビ「しずか」⑥志聖)の目蓮さん(②④⑤⑬様)は、動き給はる(⑦⑧⑪⑫⑭「る」を「ぬ」、動き給はる」を②「ただのしくすもをそれぬきしけ」④「只の少しも恐れぬ気色」⑬「おそれ給わん」)(⑭「心殊勝」以下を「ねらんで、そはせきたる正じきな目蓮の事なれわ、すくしむどうずるきしやうくむなし」)悦び顔で(⑤動じ給ふや又喜び、そこで④無「悦び顔で」、大蛇の事ぞ(⑪そ、「の事ぞ」を②④「御身に」⑤「何卒」⑧⑫⑭「これこれ」⑬「の御身に」)しやろあるならば(②「しよあるならば」④⑤「性あるならば」⑧⑫「しやうあるならば」⑬⑭「生あるならば」、我(⑤おれの)(②④⑦⑧⑫⑬加「が」)言ふ事静か(しじか)に聞けよ(⑭「悦び顔で」以下を「大じやいきあるならわ、物を云程にしちかと聞給へよと」)。我は(②わりわ⑭それがしわ)天竺(②④⑤大聖)(⑭無「天竺」)釈迦牟尼如来、三の(④⑤⑦⑧⑫加「御」)弟子(②みでし)の目蓮なるが(⑭目蓮なり)、一人居給ふ(②「たつたしとれの」④⑤「たつた一人の」⑭「一人もちたり」)母人さん(④⑬ま)が(⑭はは親様わ)、重き罪にて

(5) 無「罪にて」(14) 無「重き罪にて」(8)(12)(16)「罪がおもて」(13)「罪が重りて」、八万地獄が住み(5)住居(2)(6)しみ) 家(2)(5)か)と(4)「八万地獄、長の住家とわれ」(13)「八万地獄に落ちて苦しみ給うと」聞いて、尋ね(2)無「尋ね」尋ねて(5)無「尋ねて」これ(2)こ)まで来たる(2)(4)(5)が(14)「住み家と」以下を「すみか成。是までたづにて候らへ共」、どうぞ(14)「なにとぞ大ぢゃのおじひに」加②「あなたのをじひをもつて」④「そなたの御慈悲をもつて」此の川をせいて(4)無「此の川をせいて」②「川をせいて」を「だいがを」⑤「をせいて」を「御慈悲の上で、越し(13)え)て下されお願い申す。慈悲で」、「せいて」を⑧(12)(16)「のせて」⑭「こゑてくだされわ」渡して給は(13)下さ)るなら(5)れ、「渡して給はるなら」を②「こしてくださるなら」④「のせて渡してくださるなら」ば、そちが(2)(4)(5)の)御身を法華(2)ほき⑥法き)経の中へ(2)(6)い)、祝ひ(2)ゑわい④齊ルビ「イワイ」(13)説え)こめるぞ(2)(4)(5)「こめれば」現在未来(2)(6)みらい)と(2)(4)(13)無「と」、(加②④「ながく善果をゑたもうぞやと」⑤「深く善果を得給ふ程に」(13)「深く善根いたもう程に」仰せらるれば(2)をうせられりば、「と仰せらるれば」を「願ひ申すと拝し給へば」(13)「願ひ願うとのたまいたれば」、いかな大蛇もさしうつむいて(此一句変為②「かのはたひろの」④「かの二十尋の」(14)「渡して」以下を「法花經の文の中に神明といわいこみれわけんざい未来の為なるぞ、我む一度正佛するほどに大しやう大小なし」、九万八速(2)そく④足⑤属⑥連⑭束)数ある鱗(14)「のをろこわ」、風に草木(2)くさ木)の(8)(16)無「の」なびく(6)なべき)が(2)無「が」(14)「風に木のはのちる」如く、ほろりほろり(ぼろりぼろり)と十二の角も、落ちたところでの旗広(2)(5)(12)はたひろ(13)はた広(4)二十尋)が、(加②「こうびうなだれそんきやういたし」④「頭うなだれ躊躇いたし」⑤「頂うなだれ敬致す」(13)「頭うなだれ尊敬いたし」。御乗りなされ「御乗りなされ」を②「のちてくれよ」⑤「早く大河を易々と渡す」⑥被成(13)「早々大河をお渡し申す」と言はん(4)申さん)ばかりの(4)無「の」景色(2)きしき⑤⑥(13)気色)であれば

「あれば」を②「ござる」⑤「あつた」⑬「れば」④無「景色であれば」⑭「ほろりほろり」以下を「拾貳本の角もほろりともげて、かうびうなだれ乗りよと、ゆわん斗りのきしよくなり」、そこで目蓮喜び給ひ、②加「しぐに」大蛇御免とかのま②④⑤無此一句⑬無「かのま」大蛇の頭②⑥こうびに乗って「大蛇の頭」を④「打ち乗りなさる」⑬「腰打掛けて」、四万由旬②ゆうじん⑥よぢやうん)のかの大川②だいが④⑤大河)を②④⑬加「ば」、目⑥み)まじ④瞬ルビ「めまじ」せぬ②「めまずせん」⑬「目まじせん」間に安々②やしやし)越え②⑥い)て⑭「そこで目蓮」を「目蓮これを舟と心得て頭に打乗り安々とこされたり」、さても②「さても」を②④⑬「大蛇」御苦勞②ごくろ)と⑤加「御」礼②れ)なされれ②るり④⑬るれ)ば、大蛇たちまち②たつまつ)、しやうつきを②志やうけと④⑤⑥⑬出家と⑦⑪「を」を「と」⑧⑫「正氣にと」⑬「正氣に」転じ②④てんず)⑭「さても」以下を「大蛇たちまち御そうとへんじ」、やあ⑤やんや御、加⑬「ヤアヤ御」⑬「や」弟子の目蓮学者②④⑤⑦⑧⑫⑬尊者⑬様よ)、④加「汝」我を④加「ば」大蛇と見そつて⑥みそちて⑬「大蛇とみそつて」を「めそこなつて」居たか「やあ弟子の目蓮尊者、我を大蛇と見そつて居たか」を②「なんずわれをばみそれしかいな」⑤「吾を見つて居給うかいな」、「大蛇とみそつて居たか」を「見それしかいな」⑬「ヤアヤア御弟子の目蓮様よ、我を目そこなつて居給うかいや」⑭「目蓮みそめていてから、それがしは御身たみのためには」、兄の御弟子の阿難ぢや⑥者)程に⑭なり、「阿難ぢや」を②「あなでござる」④「阿難でござる」、如来聖者②如来しやうぢやう④⑤⑬精舎)にましまし⑬「ましまし」を「あります」ながら、②加②④⑤「御覽遊ばし汝が道中、扱も不便」②④加「や」⑬「御覽になりて、汝が道中さても不便ぢや」、かの②⑤⑬無「かの」②④⑤⑥⑬我)目蓮が②わ④⑤は⑬には)三途⑥三地の④⑬加「の」川原②だいが④大河⑬川)で、難儀②④⑤⑬無「難儀」⑥難氣)苦勞を致す⑥し)によって⑥によちて②④⑤「苦勞を致すによって」を

「苦勞をするぞ」⑬「苦勞をしとる」、阿難何卒大蛇となつて(②⑬なりて、こいよ(⑧⑫⑯重複「こいよ」)の礼言故に(此一句變為②「あなんなにとぞだいぢやとなりて(④なつて、あの大川をこひて(④越えて)こひ(④来い)とのれいげん(④令言ゆへに⑥れいげんゆいに)(⑤⑬此二句變為「阿難何卒大蛇となりて、越せ(⑬し)て来いと令言故に」(⑭「如来聖者」以下を「如来は御寺にいらせられれど、こごのうへにて御覽なり。さてふびんや目蓮は三づの川で放まつたり、大蛇と成てい舟をへんじ、をしてこいとのれぎんなり」、⑯無此一句)、かくと(⑤是の⑬斯の)大蛇に身を変じ(②ひんず⑥ひんぎ⑦変し⑧⑯ルビ「かわ」し⑫変しルビ「カワ」し⑬大蛇と身を化ルビ「ばけ」たぞ(⑤たり)。是で地獄のしやう業(②⑤⑥⑬修行も叶う(②かのぞ⑥かのを)(④此一句變為「聞いて目蓮涙を流し」。さては(④されば⑤さらば)是より御別れ申し(④⑤申す)(②⑬無此一句)、心静(②しじ)かに御巡りあれ(②り)と(言うて)、阿難学者(②④⑤⑥⑦⑧⑫⑯尊者⑬無「学者」は(⑬が②「阿難尊者は」を「みまずせんまに」消え失せ(⑥きいらせ)にけり(②たまい④給ふ⑤たれば⑥にきり⑬給うあとで)。そこで(②④あとに⑬無「そこで」目蓮(加②④「をしのかされて心ぞこから」悦び給ひ(⑬やれなつかしや)、兄の御(⑬無「御」弟子の阿難と知らず、兄の頭べ(④頭⑧⑫顔)に(②こうびに⑤兄の頭上に扱て⑦顔に)打ち乗ったとは「乗ったとは」を⑤「乗りて」⑬「乗ったるは」、無礼一つは(②ぶりいしとつわ⑤の④無「一つは」⑬加「と」まつ平(④真平⑧まっぴら)御免下され(②下さる⑥被下)ませと(⑤⑬「真平御免」、あとに残り(②れ)て三拝(⑥参拜)なされ(②④る)(⑭「かくと大蛇に身を変じ」以下を「さてわ地ごくのしうきやうむ此ときそ、ゆるりとみぐらせ給へよと、あなんそんなしやは御寺へかいけり。目蓮わおしのこされたるてただ壹人、兄弟子らすじて頭に打ちのりたり。みやうがの僧は如来様さんはいしてはよろこびたり」、是については(④これにつけても)只母人は(④母上様は②此一句變為「こりにちけてもたた母様の身の上を、ごあんずなさる」、さても(②無「も」此の川

(②加「で」④「さても此の川」を「この大河で難儀なされしことと」どう遊ばした。げ(⑥ぎ)にもいとしの(⑫「き」) 母人さんや(②無「どう遊ばした、げにもいとしの母人さんや」⑫「の」) 嘆き(②なんげを⑤難儀⑥なき) なされた其の事のみを(②「其の事のみを」を「ことと」)。(④無此二句、加②「を」もいだしてわ、なみだのたにぢゅうなりど、目蓮をいずりかずて、つぎいつぎいと道中をなさる、母の身の上ごあんずありて、なみだながらにともに経由るもいをなして、いそげいそいで、さて行きたま、いそぎたま、はやほどもなくしよすがわらい、はやちかくなる」④「思い出しては涙の種ぢや、なれど目蓮笈擡かずて、次へ次へと道中なさる、母の身の上御案ぢやりて、涙ながらにともに消え入る、思ひをなして、急ぎ急いでさて行き給ひ、急ぎ給えばはや程もなく、葬頭(生死)河原へはや近くなる」⑤「思ひ入りては涙を流し、供に消え入り計りなり」(⑬「あとに残り」以下を「直に目蓮一礼のべて、もとの路ほどに、負笈(ルビ「おいづる」) おうて、次の地獄へお急ぎ給う」(⑭「是については」以下を「さてむ、さてもいとすいわはさまや、なくより外の事ぞなき。うかむちらさむ今はや我身ひとつにとどまりたり」)。

——⑨『目蓮尊者』は三段目前半まで。⑫『千代音歌礼節』は第一段からここまで。

第四段

押し(⑥をし) 残されて(③⑭加「只」) 一人目蓮涙を流し(⑭無「目蓮涙を流し」、末の地獄へ(③「目蓮」以下「暗にて」) 急がれ給ひ(③いそぎたまへ⑭いそくきる⑤「目蓮涙を流し、末の地獄へ急がれ給ひ」を「泣々急ぎ給ふなり」に)(②④⑬無此二句)、急ぎ給へ(わ)ば(加②④⑤⑬「早程なく(⑬り)」、③「ほどなく」、生死川原の様(③⑧⑬無「様」、⑬様ルビ「ヨウ」)、「生死河原の様」を②「しよすがわらとはやなるければ」④「葬頭河原と

はやなりければ」⑩「清水川原のさま」、老母(⑧⑩⑬⑯ルビ「をば」)御前(⑰者、此一句變為②「しよずがわらのさまうばごぜん」④「葬頭河原のさま姥御前」⑤「清水河原の老母様」(⑭「急ぎ給へば」以下を「法水川の老川の老母御前に付き給ふ」、老母の手いそを(②うばがていそを③老母も帝僧を④「姥が体相を」⑤「御前老母が躰そう」⑬「うだ(生母ルビ「うば」)のていそうさて」眺め(②み⑬む)て見(⑥め⑬無「て見」)れば、丈(③たき⑤長⑬ルビ「たけ」)は(②たきわ③無「は」⑰長さ)十(③⑥拾)丈計り(⑥斗)に(③無「に」)見ゆる(②めゆる⑤「に見ゆる」を「見る」(⑭「老母の手いそを」以下を「老母がていそうは其たき十丈斗りにみへたり」)。頭(②④かしらに③⑥加「に」⑪「べに」)は十と二本(⑤頭二十二の⑬頭十二)の角をば出だし(②④はやし⑤おやし⑥致し⑬「出だし」を「立て、眼を百千鏡の如く」③此一句變為「頭に拾式本角を起し」、色の赤き(⑬さ)は朱紅(⑥しゅべん⑧⑪ルビ「しゅべに」)がらぢや(②③④⑤無此一句⑬「ぢや」を「か」)。眼(②④⑤無「眼」③加「は」⑦⑧⑪ルビ「まなこ」)日月鏡(③百千の鏡②④⑤「眼百千鏡」)の如く、(加②「かをのかきわしゅびねがらしや、かめきいわあかくたはるがねのごとなり」③「色の赤きはびんの如く、かみのいろは只はるかねの如く」④「顔のあかさは朱紅がらぢや、髪の毛あかくただ針金の如く」⑤「色赤きは朱紅柄が、髪の毛は只針金の如く」「まなこいからし声あららせて」⑤「眼怒らせ申する様にや」⑬「髪の毛はただ針がねの如し」、手には九丈の鉄(③てち)棒を持って(②④もちて) (加③「まなこをいからせ申するやうわ」④「まなこいからし声あららせて」⑤「眼怒らせ申する様にや」、をばの御前が申して云く(此一句變為②「まなこいからしこゑあららせて」⑬「眼怒らし申する様は」(⑭「頭は十丈」以下を「十二角をふりおこし、まなこわ百みのかに朱を指たりごとくなり。かみのき尺のてつばをつけき老母御前申様は」、そこ(④れ)へ来(②④きた)る(③り)の(⑭物②③④⑬無「の」)は(⑯無「は」)何者なるや(②④⑤⑬ぞ、(②④加「ここをどこぞとをうもうてきたや」、ここ(⑭處)は肌膚をはぎ

(14無「はぎ」とるとこ(3剝とり處) ぢや(14ろ、35無「ぢや」(2此一句變為2「はだきはげ取るしよじのか
 わら」4「肌着はぎとる葬頭の河原」13「とこぢや」を「ところ」)、肌着なき人身の皮はぐ(5ぎ)ぞ(3無此一
 句)、はぐもはぐか(23ぞ5だ) や三遍(24べん3びん) はぐぞ(13と3加「や」、をば(2うば3513老母4
 姥) が云はれ(45怒り26いかれ13怒ら) し(5無「し」、その声(6こやい) 聞け(5か) ば、(3加「百」千
 の雷(23かみなる13加「なり」一度に(24413無「二度」よせ(5千の雷寄り) たる(3なるが13が) 如く(3
 加「なれど」、(13加「天にひびきて、大地もさける」、肝も心もくだけの計(6斗)リ(235無此一句13「くだ
 ける計り」を「崩るる如く」(14「身の皮はぐ」以下を「ならば、身のかはを三びんはぐなり。はたけとりと云こい
 は物にたといてもすなれば、山むくずるうとぐなり」、なれど(5ぞ) 羅漢の目蓮様(313尊) は、只の少し(2
 しこす) も動ぜぬ景色(2きしけ3きしき45613気色)、(加2「うばに向いてをつしやよにわ」4「姥に向かつて
 仰しやるよには」35「老母に向かい(13う)て御しやる様は」(14「なれど」以下を「目蓮ししやうの御そんしな
 れば、少も動じきしよくなき」、御前御身(3御身5御前御前)に(3わ)生(2しよ45性)あるなら(35れ)
 ば、我れ(5己) が云(478加「う」事静(6しじ)かに聞けよ(14「御前御身」以下を「老母御前生あるもの
 なら物を云ほどにすちかと聞給へたる」。(加3「どうぞ御安内御頼申」5「どうぞ案内御願い申す」)。我は天竺
 (3われ大小5吾大聖) 釈迦牟尼如来(加3「様の」、三の(3番) 御(313無「御」) 弟子(3です) の目蓮なるが
 (14此二句變為「かたじきなくもそれがしは、大しやう釈迦尊の御弟子目蓮なり。物を申さん迎、御そんじ有わ」、一
 人持ち(23つ) たる母人(34親) 様(35さん) が(1314は)、重き罪(2ごう5業13腰)にて(3「つめがお
 もくて」) 八万地獄へ(3413無「へ」6い) 落ちて(3加「御座ると」) 苦しみ(2をつてくろすめ) 給ふと聞い
 (2き)て(5「給ふと聞いて」を「給うが故に」(14「重き罪」以下を「八萬地ごくが住みかなり」)、せめて(14

無「せめて」一度(②ひとたべ)逢はんと思つて(②をもて③④思ひ④おもいたち)、地獄修行にまゐり(②まいつ
 ③まへる④参つ⑤参り)て御座ると(②③④⑤無「と」)、申上げれば(④「ぢごくのしうきやういたしたく、次のぢ
 ごくをおしえてたびと」)、をばの御前が申して言く、それは珍しさて有難や(④「おみづらしや」)以上三句變為②
 「どうぞあなたのをぜひをもつて、ちぎの地獄をおしいてたべと、なみだながらにまうされけりば、うばわうなじけ
 さてうちわらい」③「次の地獄をおしひてたびと、なめだながらね申るようわ、老母がうなじき言笑ひ」④「どうぞ
 あなたの御慈悲をもって、次の地獄を教えてたべと、涙乍に申しければ、姥はうなずき、さて打ち笑ひ」⑤「次の地
 獄を教へ給へと、涙ながらに給されければ、老母うなづき扱そら笑ひ」(⑬「せめて一度」以下變為「尋ね尋ねてこ
 こまで来たが、御前御慈悲で地獄の道を、どうぞ教えて下され給う、そこで御前の申さる様は」)、むかし昔の大(②
 ゑにしむかしのその④去にし昔のその)昔より今が今まで(③「もかしもかしより今に至る迄」⑤「古き昔しや今日
 迄も」⑬「昔し昔しの今日までも」⑭「むかしから今にいたるまで」此所へ「此所へ」を②「かくる地獄へ御僧な
 どが、わたりたまふわ、みじらしことぢや」③⑤「かかり(⑤る)地獄へ御僧(⑤加「様」が、渡り給は珍しい事
 ぢや」④「かかる地獄へ御僧などが、わたり給ふは珍しことぢや」⑭「ぢごくへ御僧はわたり給ふ事なし。」、親を
 尋ね(②「親にあいと」③⑤「親に逢うと」④「親に会いとう」)て来る子もないが「ないが」を②「なしす」③④
 ⑭「なし」⑤「やけりや」⑬「ないし」、子をば(②④⑤⑬無「ば」)尋ねて(②尋にて⑤「尋ねる」)来る(④無
 「来る」)親もなし(⑭無此一句)。なんぼ尊(⑥たつと)き(⑬「さても奇特の」御僧にても(⑬「にても」を「様
 や」、母に遭ふこと安々からぬ。(此二句變為②「かほどとうとき御僧ならば、をしまふさんお聞きありと」③
 「かほどなたかきおしそなれど、おすへ申さんと」④加「かほど尊き御僧ならば、教え申さん御聞きあれと」⑤「か
 ほど貴き御僧ならば、教へ申さん来給へと」⑬「さても奇特の御僧様や、教え申さんサア来給えと」(⑭「子をば」

以下を「かほどたちとき御僧ならば老ぼおしいてもらわんとて、さとちてまいらせそらいども」、あちら向いては嘘つき「嘘つき」を②④⑬「からから」③「うそをば吹き出し」⑤「嘘吹出す」笑ひ⑭「そらわらい⑤無「笑ひ」、こちら向いてはカラカラ「カラカラ」を②④「嘘き」⑬「うそ吹き出し」笑ひ③⑤無此一句、⑬無「笑ひ」⑭「こちらむみてはそらうわさ」、そこで目蓮これでならぬと⑭「目蓮そんならわと」②③④⑤⑬無「これでならぬと」、負笈②おいちる④「笈摺」⑥おいじる⑧ルビ「おいづる」おろし②をろし⑤笈ずる下⑭「をゐをかすこにおろいて」、あまた⑤多数③加「の」御経⑧ルビ「おきよう」を④⑬無「を」取り出し給ひ③無「給ひ」⑤ふ⑭「御経あまた取りだし」、一②ゑち②に読みしが②④⑬は、③「ゆみば」⑤「読出す」浄土の三部⑤浄土三部経③加「たもう」⑭「先一番にしゅうど道引三法経」、二番般若経②はんにやに③大ばんすやく④「経」を「に」⑭「一番に大はんにや経」⑤無「経」、妙④南無⑥みよ法蓮華②なみよほうれんげ)経、⑭「法花経の文を取出し」数②かじの経文せち長が内に「せち長が内に」を③「讀佛もこえ高々よむたまわれは」④「刹那がうちに、御声たかだかよみ給はれば」⑤「刹が中に御声たかだか読給へれば」⑭「あまた経文せちこませたる」、⑬「二番般若経」以下を「女人助かる経品経や、数多御経を読み上げあれば」、②加「みこゑたかだかよみたまわりば」、今の②④無「今の」御③⑤無「今の御」経②④加「の殊勝」の功德⑤加「の殊勝」によって④よりて⑭「おきやうの功德のありがたや」、いかなをば「をば」を⑤「媿」③⑬「老母」②⑥加「み」④⑦⑪⑬⑯加「め」も合掌②ざんげを④懺悔を致し、②加「仏みでしの目蓮様よ、うばがただいまくわごんのことを、平にをゆるしくださりませよ、いまの御経のくどくによつて」、④⑤「佛御弟子の目蓮様よ、姥が⑤媿」只今過言のことは⑤「ことは」を「一儀」、平に御赦し下されませよ、今の御経の功德によつて」⑬加「仏御弟子の目蓮様よ、今の御経の功德に依つて」⑭「いかなをば」以下を「程なく老母御前目蓮の前

にかしこまる」)、をばの(②④⑤吾が⑬老母の) 苦患(⑪ルビ「げん」) もしばらく(⑤漸く) のがれ(②ぬぎる④ぬける⑬ぬがせ)、(加⑬「老母が只今偏屈一儀、平にお許し下され給う」) 何をお礼にお返し申そ(此一句変為②④「なにをこおん(④御恩) にをくらふ(④おくろう) やらと」⑤「何と御恩を送るやろう」、⑦「何を御礼にお返し申立」⑬「何と御恩をおくろしやらと」(⑭「をばの苦患」) 以下を「のう御僧様、さいせんからの經文のくどくありがたや、老母のくげんもしばらくぬがれ申なり。有かたや、なんと御をんをかやそやら、なんを御禮にうへらふやら」、思いつきたる(②をもひつきしは④思ひつきしは⑤思付は⑬思ひふしは⑭思ひ付たる事むなし) この帷巾(⑪ルビ「かたびら」と(⑤白衣を⑥帷平と)、ひろんぢやう(②ひらんしゆ④毘蘭樹⑤衣領樹⑬平ん樹)の枝しき(②ゑだをしをりと④枝をしおりと⑤枝すらり⑬「しき」を「折りしほめ」まげて、白き(②④白の)(③「合掌致し」以下變為「只へまぐわんごんの一義平におよろして下ませようと、今のたもくどきにゆつてしばらく恩を送るやろうと思ひ付すが」肌着を一枚出して(②③一枚をろし⑤⑬一枚し下し)(⑭「この帷巾」以下を「ありとたちまつ前のひらんしよの上にかきあがり、はだけ壹枚取をろし」、さても其の時(②④ややこれこれ③これやこれや⑤やんや是々⑬ヤアヤアヤこれこれ) 目蓮(加②③④⑤⑬「様」⑧「さん」よ(③無「よ」、これがあ(③そ) なた(⑤僧)の母親さん(②④⑥様⑬母人様)の(⑤が、召して御座った(②④ござりし) 肌着ぢや程に(③無此一句)(⑭「さても」以下を「のふ御僧さま、是あなたのははさまの肌着にて候也」、是も(②こりを③④⑤これを) 御礼(②④あなた)にお返し申すぞ(②おかしいゑたす④お返しいたす、⑥「すぞ」を「し、さあさから地獄の道を教へ申しぞ」、(無③⑤⑬「ぞ」)(加②④「さあさこれから地獄の道を教へまふさぬ」⑤「さあさはから地獄の道を教へ申すぞ(⑬申さん)」(③「サア是や地獄道をすひ申そと」) 御ん(②③④⑤⑦⑧⑬無「ん」⑬無「御ん」) 聞あれよ(②④や、③「御聞あれと」⑬「聞き給い」、道(⑤路)の辛さ(②ちらき③つらきこと⑤き)は限りは(⑤が)な

いぞ(②③)かけるわなくぞ(⑭「是も御礼」以下を「是は御れにいたすますならば、末の地ごく母さまへ、うきやなんぎはけわもなし」、剣(②③⑭)ちるき⑥つるぎ⑬加「の」峠は(②とうぎが④⑬峠が⑤峠も③⑭無「は」)そも(③加「そも」⑭無「そも」)百拾丁(②④「百十町」以下同じ、⑬「約百十丁」、火降(⑤ふ)り(②④火ふる)峠も(②とうぎが④⑬峠が③⑭無「も」)又百拾丁、ばんぢやく(④⑤盤石⑬石岩)峠も(②とうぎも⑤⑭峠が③無「も」)又(②④⑤そも③⑭無「又」)百拾丁、こ(②④⑥⑦⑧⑪⑭く)らがり(⑤闇き③冥闇⑬「くらやみ」)峠(②とうぎが④⑤⑭峠が⑬峠も)又(②③④⑤⑭無「又」)百拾丁、四つ(③⑭無「四つ」)合はして(②③④合せて、無⑤⑬「四つ合はして」(加⑬「都合」)四百四十丁(②④⑬加「の」)、難渋(②なんじよ③なんぎ④⑤難所⑬難儀)な(②④の)峠(加②「うきよちらけわ、かぎれはないぞ」、③「つらきことわ限りなひそ」④⑬「憂きよ(⑬「浮世」)つらきは限りはないぞ」、⑤「うきやつらきは限りが無いと」⑭「うきやなんじう限りなし」、ゆるり(③ゆるると⑬ゆっくり)巡りて(④巡って⑬廻って⑭「ゆるりと見ぐり給へ」)御帰り(②おかいり⑤返し)あれ(②⑥り)と(②④加「ゆうて」)。をば(⑤媿③⑬老母)は(③が)それより別れて行けば(③「別れて行けば」を「われが」此一句変為②「うばめわけうせたるぞ」④「姥めは消え失せたるぞ」、独り(⑤⑥⑬一人)目蓮涙を流し(③加「て」此一句変為②「ひとり目蓮をしのこされて、なみだながらに、おいずるかじて」④「ひとり目蓮おしのこされて、涙乍らに笈摺担(ルビ「かず」)て、⑬加「元のごとくに負笈ルビ「おいづる」おうて」(⑭「御帰り」以下を「老母さらばさらばと行きわかれ、をしのこされて只壹人り」、末の(②しいの③しへの④次位ルビ「しい」の⑥すいの⑬末ルビ「さき」の)地獄へ急がれ給ふ(「急がれ給ふ」を②いそがれまする③④急がれます⑤急がせまする⑬地獄へとお急ぎ給う⑭急がれけり)。ほども早速(②④⑬「いそげたまいば早ほどもなく、向かいたまふが」⑤程もなくなく⑪早来⑬無「向へ」)剣の峠で御座る(②④⑤⑬無「で御座る」③無「ほども」以下、⑭「で御座る」を

「にちかせたり」。(2)5加「此さ」、(2)413「このま」峠の様子を言へ(2)ゆい13見れ)ば、雨の如くに剣(2)ちる
 げ)が降つ(2)3(4)り)て、足の蹈(2)3(4)足にふむ)のも(4)もの、手にさわ(3)みにみる)るのも(4)もの、
 皆(2)4みんな)剣(2)つるげ)の峠でござる(13)「ござる」を「あるが」(14)「峠の様子を」以下を「つるぎ峠の
 なんじやうは、それからふるむつるぎやが、つながり物も刀じうが、ふまゆる物もつるぎじうが、からだもあきの
 ちくしふとなり、此なりしうを」(16)無「峠の様子を言えば」以下)。よつて(2)4そこで)峠を凌(5)しの)が
 為(2)3たみ)に、釈迦(3)加「牟尼如来」に賜(給)はる(2)4たまわる3たもうた)くわん(4)桑5兼6関8
 くわら)原(5)求)笠に(3)13無「くわん原笠に」、同じ宝の(無3)13「同じ宝の」5「宝の」くわん原(4)桑原
 5兼求13冠ばら)蓑を(加4)13「お」5「ば」召(2)おみ6み)し(加2)4「なされ」13「になり」て、キバ(3)
 けば4)晋婆5)老母13木ば)の靴(2)くち4)5沓)に(3)ね)て難所(13)難儀)を凌ぎ(2)しのげ)(加2)「向ひたま
 ふが火ふるとうげ」4「向い給ふが火降り峠」13「向へ給うは火降り峠」(14)「よつて峠を凌がん為に如来より
 ぐだされたくわん原みの、くわん原笠、きばのくつのをうしめて、なんなく峠こされたり」、火降り(13)「このま」
 峠の(3)無「の」さて(2)5無「さて」そのつらさ(此一句変為2「火ふるとうげの様子をゆうわば」4「火降る
 峠の様子を言わば」13加「娑婆でたといて申そうならば」、千の松明(2)たいまち5)月に(2)いつどに5)無
 「一度に」よせ(13)り)て、灯(8)ルビ「とも」13降)す(2)とむし3)とぼし6)13加「が」如くに(5)13無
 「に」(13)加「あたり、ほとりは」火は(2)4)5が3)無「は」降り(2)る)まする(13)止まぬ)。又は下から(2)よ
 り)八万由旬(2)ゆうじん6)余じんの3)加「の」、火焰(6)くわいん3)加「が」燃え(5)もえ6)い)立つ(2)もひ
 たち3)焼立13)もえ立ち)、(13)加「その」恐ろ(11)ルビ「をそろ」し事よ(3)無「よ」13「事よ」を「さ」。なれど
 (2)らかんの4)羅漢の)目蓮(加2)4「様は釈迦にたまわる」か(5)彼)の装束(2)しよぞく)で、火降り(2)4

る) 峠 (②とうぎ) を (⑬も)、御越しなさる (此一句變為②「しぶよくこひて」③④⑤⑬「首尾よく越て」(⑭「火降り峠の」以下を「火ふりとうぎのなんじうわ、そらからふりむのはほのふなり。下からもゆる事八萬よしゆうの此所、くわん原みのにくわん原笠、きばのくつおふしめて、なんなんとうきこされたり」)。向ひ給ふが(③わ⑬は) ばんしゃく (③般着④⑤盤石⑬石岩) 峠。この間峠の様子を云え(②ゆい) ば (③⑤⑬無此一句)、口に(②④ゆうに⑬口で) 言はれぬ (加③おそろしき④⑤「難所な」⑥「なんぎな」②⑪⑬「難儀な」事ぢや (⑬「難儀な峠」。一寸(②④ちよいと) たとへ (⑤諭し) て申した (④⑬申する) ならば (②まふするならば③⑤申さうなれば、(加②④「四十里四方の大ばんぢやくが」雨や霰のさて (③無「さて」降る如く、ばんしゃくや (⑧無「や」降れど (③あらねの偕降りごとく②④⑤⑬無此一句)、なれど目蓮かの装束で (③なんなく⑤無「目蓮かの装束で」、御越しなさる (⑤れ③御越成り) (此一句變為②「なれどらかんの目蓮様は此のまとうぎもなんなくこされ」④「なれど羅漢の目蓮様はこのま峠も難なく越され」⑬「なれど目蓮仮装束で、石岩峠も首尾よく越され」)。(加②「向ひたもうがくらがとうぎ」④「向ひ給ふが暗がり峠」(⑭「向かひたまふが」以下を「番んぢやく峠にちかせたり。くわん原みのにくわん原笠、きばのくつのおふしめて、やすやす峠こされたり」)。さても御 (⑬無「御」) いとし (③無「御いとし」) 暗 (⑤闇) がり峠 (此一句變為②④「さてもおいとし目蓮さまわ」⑬「さてもいとしや目蓮尊者」、向ひなされて (⑤ば⑬「向ひ給いて」(②④「向ひなされて」を「さてわ仏のちからをか (④借) ると」、観經 (⑧かんぎよう) の御文 (③經文の⑤觀經文の⑬加「を」)、光明遍照 (②ひんずよ⑤遍成) 十方 (⑦十万) 世界、念仏衆生攝取不捨と (③⑤無此一句)、四句の法 (②④⑤⑥⑬御) 文を (⑤無「を」) (③「四句の」三辺 (②さんべん④⑬三べん⑤遍) 唱へ (⑥い③⑬無「唱へ」、唱へ (⑥い) 給へ (②⑥い③となひれ) ば、早やあいもなく (②④⑤無此一句、③⑬「さて」、(②④⑤加「扱」不思議なるかや (②④無「かや」⑤⑬無「なる」、月が (⑬の) 両体

(②よたい) 御出まし (⑤無「まし」) なされ (②③④り)、黄 (③⑥小⑬無「黄」) 金 (②こがに⑧⑪「黄金」ルビ
 「こがね」) (④加「の」) 山 (⑤金剛山) にて (③④無「て」) 朝日 (⑤無「日」) の如く、光明輝き (②かくやく④赫
 奕ルビ「かくやく」) (⑤⑬輝く) 御 (②④おん) 越しなざる (②④り③⑤れ⑬「お越しになり」)。四つ (④⑤加「の」
 峠を (⑤無「を」) 首尾好く (②しぶよく⑥しべく) 越え (②④こし③御越し成り⑥越い) て (③無「て」) (⑭
 「さても御いとし」以下を「くらがりとうぎを小明びんしやう十方世かい念衆生、せつしうふしや此文三へんとなへ
 てとをらせたる。まづはひかりと云文家ふ日月二たい出でてしゆ尾よく峠をこしたまう」、先づは目蓮悦び給ひ (③
 無「給ひ」、末 (②つげ③④⑤次⑬末) の地獄に (②い④へ⑬と) 急がれ (⑤せ) 給ふ (②ましる④まする③「いそ
 ぎたまい」⑬「御急ぎになり」)。急ぎ (⑤急がせ) 給へ (②い) ば、はや (⑤間⑥⑦⑪早) 程もなく、(②⑥⑧⑪⑬
 加「女人むまじの地獄につ (②ち) かせ」③「女人産まずの地獄に」④⑬「女人生ますの地獄に着かせ (⑬着くや)」
 ⑭「女人不産の地獄へ着かせ」、(⑭「先づは」以下を「目蓮末への地こくいそくけり。ほどなくによ人三ちにつ
 ごくへちかせたり」) 女人むまじ (④生ます⑤⑬不産⑭によ人三) の地獄と云うは、只の一人も (④の) 子もたず
 (②⑥じ、「もたず」を⑬「産ず」) 女 (③「子持の」、信がなきには (②④なきねば⑤⑥⑬なければ③「信もなし」
 ⑭信力なげねば) 行きます程に (②おつゆきまし④落ち行きます⑬落ちます程に) (⑭「只の一人も子をもたず」
 以下を「一人むち子をたとひば竹をろいしても子さかぬごとくなり。池ほちて水いでぬごとくなり」、むまじ獄卒女
 に向ひ (此一旬變為②③「うまじ地獄にをつるとゆうと、あかき (③加「あかき」) ごくそち女に向ひ」④⑬⑭「う
 まず地獄におつるといふと、赤き獄卒女に向かい」⑤「産ず地獄へ落と言ふと、亦獄卒女に向い」、細き (②ほそ
 け) 灯心 (②とうしみ⑤真④⑪⑬⑬⑬⑬) 二た筋 (⑥しじ) わた (④⑥渡) し (⑭「むまじ」以下を「ごくそつどもか
 女人さんす女にあぎまきをふたすあい渡し)、矢 (④竹) の根 (②やのに③無「矢の根」) 峠の (③無「の」) 岩底

(3) 瀧 掘りて (4) 掘らし (6) 17 はって、三竹 (2) (3) しちく (4) 17 紫竹 (8) 11 ルビ「みちく」 (13) 七竹 かん竹 (2) つく (3) な
 く (8) 11 ルビ「ちく」 (13) 寒竹 (4) 加「竹」 (5) 紫竹竹寒 根を (4) 無「を」 掘らす (4) 掘れと (3) 6 ほらし) れど
 (3) るぞや、 (2) (5) 13 17 「掘らす (2) し) るぞ」 (4) 無「れど」、小さき (2) ちさい (4) 小さい) 事なら休み (2) 13 やさす
 (4) やさし) もやらず (2) (4) 13 あれど (5) なほが (6) ならじ (17) あろが、馬につ (2) ち (5) 付) ければ (13) 「馬に着きたら」、
 (3) 加「なにをいふても」 七馬行 (2) (5) (6) 13 16 片) 馬 (2) (5) 17 駄) (3) (4) 「七馬行馬」を「七駄片馬」、それを掘ら
 ねば (6) にば (13) 「それを掘ると」 獄卒共 (3) 無「共」が、蟻 (2) あれ) のたかり (2) れ) し如くに責める (3) 無
 「責める」。これを (2) わ (4) (5) は) 掘らん (13) 掘ると) と思つて見て (2) おもてめても (3) みれば (4) 13 16 加「も」、そ
 こ (4) (5) 底) のに (3) (4) (5) 13 根) は (13) がわく、はくれきん「はくれきん」を (2) (3) 「ただりけん」 (4) 「ただ利剣」
 (5) 「剣」 (8) 「はんれきん」 (13) 「火けん」、 (16) 「その庭は、れきん」の如く、右の灯芯 (2) とうしみ (5) 真 (3) 加「で」
 風にてきいて (2) きゆる (3) きれる (4) 消ゆる (5) 切つて (6) きえて (7) 漢字ツケ「消」て (8) 13 16 消えて、くほ (2) すよが (3)
 くふうむ (4) 仕方 (5) 13 工夫 (8) くわの (16) 鍬の) なき故、両手で掘れば、十シ (3) (4) (5) (8) 16 無「シ」の (6) 13 を) 指先
 (3) 指より) 血しろ (5) 血汐 (2) (6) 7 しほ (4) (8) 13 16 潮) と (2) (4) に) なりて (4) 染まり (3) 13 無「て」、ふかく (4) 辛い)
 責め (3) 13 加「に」 苦に (3) 無「苦に」 会 (6) 逢) はね (2) に) ばならぬ (13) 加「と」、兎角後生が大事なるぞ
 (2) (3) (4) (5) 13 大事 (2) だいず) ちゃ (3) や) 程に、(加 (2) (4) (5) 13 「いかな尊者も」 (3) 「尊者も」、見ぶる (3) みぶる
 (6) ろ) い (8) 加「し」 給い (2) (4) みぶるいなさる (5) 身振いたし (13) 「給い」を「給う」、しばし詞 (6) (7) (8) 言葉) も
 なかり (6) れ) しぞ (5) 言もなかりしぞ) (此一句変為 (2) (4) 「しばしなみだにくれさせたまひ、目蓮様わ (4) 無此一
 句)、どうぞ母にとあいたいものと心ほそぼそつぎの地獄へおいそぐ (4) ぎ) なさる。いそげたまひば (4) 給えば)
 はやほどもなく、向かへ (4) い) たまふが、ちの池地獄。(14) 「矢の根」以下を「矢の根かうげの岩ぞこのしこ人

かんちくを七駄かた馬ほれよれとせみりなり。あまるせみるがよらふさに、一度はほらんとすればかきんとなり、はや力となり橋、あらしにふかれてなんにもなし。ほらんとすれば十本の指あきのちしうとなりにけり」。

— ③『目蓮獄地巡り段』は此の四段目のみで五段目は梗概を述べるに止まる。⑭「鷹栖本」の校異はここまで。

第五段

それに続(⑥ちじ)いて(②「これにつぎひてを」④「これに続いて」)申して(⑤思って⑬思うて)見れば、世には(⑧も⑬とても)邪慳(②ぢゃけん⑤邪見⑥ぢゃきん⑪「けん」な(⑬は)女ぢゃ程に、それは如何にと申します(⑥しるに⑬「申しまする」を「かんじてみれば」②④無此一句⑤加「に」)。地獄数々(②かじかじ)ある其中に、女(⑤「女」を「増して」)のがれぬ(⑤逃れん⑬拔れぬ)血の池地獄、此の間地獄の(⑧無此一句、加②④「様子をゆわ(④いえ)」ば、かまの(⑬「この間」以下変為「地獄」)ひろさが四万とゆうじゆうん(④⑬由旬)、かまのふかさも四万とゆうじゆうん(④由旬)⑤「この間幅さが四万と由旬、深き事又四万と由旬」、加⑥「幅さと云は数万余じん深き事が同じく余じゆうん」⑪「幅さと云は、数万の由旬、深き事が同じく由旬」⑬「この末ルビ「ま」地獄の深いこと又由旬」(⑬無「此の間地獄の」以下)、此間(②さ⑬末)地獄の(⑦無重複「此間地獄の」)向ふ(②無「ふ」)の岸に、殊勝(②しようど④先途ルビ「しようど」⑤清浄 莊嚴(②しよごん⑥「志聖々ごん」)浄土を飾り(⑤浄土のかたり)、数多(②④あまた)獄卒より集りて、こちの岸より(②④から)向ふ(②ひ④い)の岸へ(②⑥い)、糸にまさり(②れ④「交り」⑬勝ルビ「すぐ」れ)し橋をばかけ(⑥き)て(⑧⑬無「数多獄卒より集まりて」より三句)、さても(⑬は)獄卒(「さても獄卒」を②「うざい重ざい」④⑤「有罪無罪」)罪人共に、行け(②ゆき)よ走れよ(⑥行きよ走りよ)向ふに見ゆる(「向ふに見ゆる」を②「むこうのきしにめゆるが」④⑬

「向こうの岸に見ゆるが(13無「が」)、あれが阿弥陀の浄土ぢや程に(4無「ぢや程に」、越せよ越せよと責め来る故に(此一句變為②「ゆきよゆきよとせめるがゆゑに」④13「行けよ行けよとせめるが故に」、あん(②④⑤13無「ん」)まり責める(②く④苦)が、物憂き(②④⑤⑥⑧13ものうさ)辛さに(②ちらさ②④⑤13無「に」、心細々渡らる(④渡ろ)とす(②⑥し)れば(⑤「ど」、(②加「此の」橋は(加②「真ん中ひんで」④「真中で」⑤「其の時」)ぶつり(②ぶつりと⑥ぶちりと⑧13ぶつり⑤無「ぶつり」まん中程で(②④無「まん中程で」②④加「きれる」、切れて(②けれて⑤切つて)落(②を)つ(⑬ち)ればそのまま地獄、なれど女しよ(②しゅう④⑤⑥⑧13⑬衆⑦漢字ツケ「衆」喜び給ひ(②④⑤なされ)、娑婆(②しやば)に居る(②をる⑤居た)時や(②④⑤13無「や」、仏(⑤17得)果(②とくくわ)(⑬「仏果」を「徳語」と云ふて、櫛やこうがい頭(②ちむり「其の時」④つむり⑤櫛や笄つも⑥ちもり⑦⑧1113ルビ「つむり」)に指して、佛飾り(②る)を致した縁ぢや(②ゑんや④13縁や⑤回や)。又は口には三十二枚の(⑬無「の」)白き「白き」を②「しらはがござる、この」④無「き」齒をば(④無「ば」)染むると云うて、米と金(②かねと④鉄漿ルビ「かね」と⑥こがね11ルビ「こがね」⑬加「と」)を(⑥と)酒にて浸(②わか(④沸かし)し「浸し」を⑤1317「出して」、黒く染め(②み)たる(⑤17齒黒致した)功德によって(②よりて⑥よちて)女喜び(④17喜べ⑤喜へ)首から上は(②④が)、浮み浮んで苦(②くろ)しみ受けん(⑬17ぬ)とあるが(②④⑬無「とあるが」⑤此一句變為「浄□うがんで苦に請し」、かかる(⑤是の⑬斯の)様子を目蓮学者(②④⑥⑧⑬尊者⑬様が、御覧なされ(②り)て涙を流し、さても不慙(②ふべん④⑬不憚⑤⑥不便)や罪人共と(⑤や)、足もどちどち(⑤ちこち⑧⑬どうどう)負笈(②をひぢる④笈摺⑤笈づる⑥御いじる⑬笈つる)お(②⑬を)ろし、女人橋より(②「女人たしかる」④⑤⑥⑬「女人助かる」)吉(⑤17結⑬決)文(②けちぶん⑬ルビ「きちぶん」)経を、(②④加「取り出したまい」)み声殊勝に(②「みこゑをんぢやうこいだか高

と」④「御声音声高々と」⑬「三声精精」御(②おん)誦(⑬読)みなさる(②④⑬れ)、紫檀矢(⑤墨)立のみ
 (④⑬無「み」筆を(⑬無「を」②④⑬加「取り」出して、口に南無佛(⑤無「南無佛」南無阿弥陀佛と(⑬無
 「と」②④加「三度とない(④え)て一枚」⑬「唱え給うて三べん」書いて、直(②し)ぐさま(⑬「真に其儘」
 血の池地獄へ(⑤⑬無「へ」⑥い)、たんだ(⑤⑬⑬たつた)一枚投げ込み給ひ(⑤給ふ)(此一句変為②「な(④
 投)げこまりたら、し(④す)ぐに湯玉が一丈へい(④減り)、(②加「二枚かいてさなぎ(④二枚書いて投げ)こま
 れたら」⑤加「真に地獄が一丈へりて、二枚書きては又投込み給へ」⑬「すぐに血の池一丈へった、二枚書いてはま
 たなげ給ひ」(⑬無「給ひ」加「直に地獄が一丈へった。二枚書いては又投げ給う」、そこで(②④またも)血の池
 二丈と干(ルビ「ひ」れば(②加「二丈とへいり」、④「二丈と減り」⑤「二丈にへりた」⑥「貳文とへれば」⑬⑬
 「二丈とへった」、さても(⑤無「も」うれしと又筆とりて、今は三(⑤二)枚(⑤加「と」投げ(②なき)込み
 給ひ(⑤ふ②⑥い⑬「給ひ」を「たれば」、都合(②ちごう)三六(⑧⑬⑬ルビ「さぶろく」十八願で、とうと
 (②⑤⑥加「う」④「到頭」⑬とくと)地獄が(②わ④は)そのまま(⑤⑬其儘)あ(④褪)せた(⑤て)。有罪ち
 やう「ちやう」を②「む」⑥「重」さい(④⑤⑬⑬重罪)(②④加「の」罪人共が(②④⑤は)、皆あ(②めんな
 ④⑤⑧⑬⑬みんな⑪な)成(②浄)佛遂げたと(②④で)あるぞ(⑬が)。そこで目蓮(②④⑬「なれど尊者の」母
 人さん(④母親様②⑬母人様)は(②わ)、なんとしたまふ(此一句変為⑤「何としたも」⑬「なんとしまししょう」、
 ②④無此一句)。やれお(⑤御②④無「お」いとしや(⑬と⑤無「や」②④加「と」(②④無此一句)。罪が深う
 (④く)て行方が知れぬ(「行方が知れぬ」を②「しがたわみいじ」④「姿は見えず」②④⑬⑤無此一句)。そこで目
 蓮(「そこで目蓮」を②⑤⑬「もとのごとくに」負笈(②おいぢる④笈摺⑥おいじる⑬笈づる)負うて(⑤荷て)、
 末(②④⑤次⑬未ルビ「さき」)の地獄へお急ぎ(②げ)なさる(⑤「れ」⑬「急がせ給う」)。急ぎ給ひて(②「い

そぎたまいば、はやほどなく山のようなる、くろがね門にぶちかりたまひ、そこで目蓮」④「急ぎ給えばはや程もなく、山のようなるくろがね門にぶつかり給ひ、そこで目蓮」御眺め②おながみ⑥みあれ②りば、これが八万地獄の門と聞いて、つくづく②ちくちく⑤暫く⑥ちくちく⑤克⑧よく見給へ②よくめたまはば⑥御覽じ在れ⑬「能々ルビ「よくよく」ながめてみれ」ば、門はしつかい④⑬悉皆⑤「しつかい」を「斜」に熱鉄②ねつてち②ばかり、山を見るよな②④山のようなる⑤山を見る様⑦七重⑧ルビ「ななよ」⑪ルビ「ななえ」の門ぢや。一重⑪ルビ「ひとよ」一重に扉②⑬戸びら②が有って⑬在りて、門の外には六つの鬼②をね⑥おん⑧魂⑬が、⑬加「眼怒らし申する様は、九丈二尺の鉄棒持つて」眼②④⑥まなこ⑤目日月鏡の如く、④加付②たる其の有様は、たとへ②⑥い⑬えがた②④⑥⑨⑬⑬「な」き⑤譬方なき、おそろ④⑤恐しごとよ⑬ぢや。そこで②なりどもらかんの④なれど羅漢の⑬なれど目蓮④加②「様をそれたまわじ」④「さまは恐れ給わず」かの④無「かの」門岸②げし⑥ぎし②に②い④⑤⑬へ、御寄りなされば門番共⑤鬼が、⑬加「とがめて曰く」そこへ⑥い⑬夫へ来るが②わ④⑤⑬は何者なるや。ここは⑬茲は、加②「どこぢやとをもふてきたや、ここわ」④「どこぢやと思ふて来たや、ここは」八万地獄の門ぢや②ずや。云何④⑤⑥⑬いか⑧如何⑬な罪にて汝⑤僧が②わ④⑤⑬は来た⑤⑬るや。早く白状⑪白情ルビ「はくじょう」致せと云え②②云へと④言えど⑬言うて、⑬加「舌もたいて怒りし声が、天にひびきて大地も裂ける」されば「されば」を②「ただのしこすもおそりぬきしけ、われわ」④「只の少しも恐れぬ気色、われは」⑬「そこで目蓮御志やり様は、我は」天竺釈迦牟尼如来、三の御②④み⑬無「御」弟子の目蓮なるが、聞いてのたまひ②④⑤給はれ我②⑤身が母さん②④様②此一句変為「一人居給う母人様」は、此の間⑬未八万地獄が住

(⑥し) み家(⑤すみか⑬住家) (此一句變為②「つみがをもくて八万地獄をしてくろすみなさんとけいて」④「罪が重くて八万地獄落ちて苦しみなさんと聞いて」、(加②④「どうぞひとたびあいたいものと尋ね尋ねてここまできたぞ」⑤加「どうぞ一度逢いたい計り、是へ尋参りし程に」)(⑬加「と聞いて、尋ね尋ねてここまで来たが」、どうぞ此の間(②④⑤⑦⑧⑬門、⑬「此の間」を「門」開(②へら)いて給ひ(②④たまふ⑤給へと⑬たもうと)。たのむたのむ(②④⑥頼む頼む)と、のたまひた(④け⑥き)れば、(加②「門番のをにどもまうふするよにわ、久むかしのさてむかしより」④「番の鬼共申するよには、久し昔のさて昔より」⑤「門の鬼共申する様に、久し昔の其の昔より、⑦⑧⑪⑬「番の鬼共申するよ(⑧加「う」)には、久し昔よ今日までも」⑬「番の鬼共申する様は、昔々の往昔ルビ「おうぢやく」よりは」)、今が今まで此処へ(②⑥い⑤へは)、人(②④⑤僧)の来たらせ(⑬来たりし)給ふと云う(④⑦言ふ)は、ためしもなき(②④⑤⑬ためし少なき⑬ためし少なし)珍し事ぢや(②めぢらしことずや)。(②加「いかなたふとき(④尊き)御僧にても」)、門はなかなか(⑤仲々)かなはぬ(⑤⑥⑬叶はん)程に(②④かなわんぞやと)、(加②「ゆわれまれば目蓮様わ、かなふことでわあるまいけりど」④「いわれますれば目蓮様は、かなうことではあるまいけれど」、是非に是非にとのたまいた(④け)れば、さらば御僧お聞(②④⑧開)きなされ(⑬「そこで門番申す様は」)、門はそなたにお渡し(⑤お任せ)申すと(⑤⑧⑬⑬無「と」)云うて(②④加「六人」門番ただ打ち笑ひ「門番ただ打ち笑ひ」を②「門番どもわあつらむひてわ、からからわらい、さあさあきられ、さあさきられと、こつちむひてわ、からからわらい」④「門番どもは、あちらむいてはからからわらい、さあさ開けられさア開けられと、こちら向いてはからから笑ひ」、そこで目蓮(加②「心の中で喜びたまひ」④「心の中で喜び給ひ」)御思案(②ごしやん)なされ(②④る)(⑬「御思案なされ」を「よろこび給う」、これは如来の御慈(②⑥ぜ)悲(②ひ⑤無「悲」)によって(②⑬よよりて⑥よちて)、(②④加「御」)經の功德を頼ま(⑬み)にやならぬ。さ

らばそを(⑥⑬う) ちゃんと、身腰の矢立の(⑬無「の」) 筆(⑤御腰の墨汁) を(⑬⑯無「を」) 取り出して(⑤無「て」)(此二句変為②④「そこで目蓮阿弥陀経をばこゑだかだか(④声高々) とどくぢやう(④読誦) なさる」、南無阿弥陀仏(⑬加「南無阿弥陀仏」) と(②④三度) 唱へ給ひて(②とないて④「唱えて⑤称て」、三辺(⑤三偏⑥びん⑬べん⑯三遍) 書いて(②④無此一句)、北に向うて釈迦牟尼如来、早く「早く」を②④「いまの」⑥⑪⑬「今ぞ」御(②④み⑧ルビ「み」) のり(④⑬法) を御たのみ申「御たのみ申」を②「おさずきありと」④「お授けあれと」⑤此一句変為「今ぞ通力御願申す」⑧加「す」⑬「御廻向あれと」。拜み上げては拜礼致し(②④なさる⑤なされ⑬無此一句)、東向う(②④⑬い⑤き) ては、しゃくせんだいの⑤釈梅檀と⑬釈仙だんの(②無「しゃくせんだんの」、十二大願(⑬「大願」を「観主の」御葉(加④⑬「師」) 如来(②「十二観音をやくし如来」、早く御(⑥身) のり(②「はやくほうりき」④「早く法力」⑤「早く法力」⑬「御のり」を「御法」を(②④無「を」) お授け(⑥さじき) 給ひ(④給え、願い申す(⑤願い願い⑬願いますと) と参(④⑤⑬三) 拜なされ(②④る)、南向う(②④⑬い⑥き) ては観音様に(⑤⑬よ)、(加②「どうぞみのれをごゑこありと、おにがいなさる」④「どうぞみ法をこ回向あれと、お願いなされ」西に向う(②④い) て声しみじみ(②ずめ) と、本師法王(⑥ほんじ法ば) 無量寿(⑤樹) 如来。今ぞ御のり(④⑤法) を御回向(②ゑかう⑥いこう) あれと、涙ながらに礼拝致し(②はいれをなさる④⑤拝礼なさる、⑬無此一句)、天に向うて(④向かいて) 日月二体(②にたい⑤に鉢)、今は(②ゑまわ) 早く(⑯う②④⑬加「も」⑧無「く」) 此門(②④⑬無「此門」) 開かせ給ひ(④給え⑤此一句変為「今ぞ早くもお開き給へ」、威(⑬慧) 力定(⑬浄) 力(②「ゑりきぢやうりき」⑥「いれきしやうりき」⑬ルビ「いりよくじやうりき」) 本願力(②方便りきと④方便力⑤此一句変為「専力乗力方便力」) と、唱へ給ひて黒金(②くろがわ⑪⑯ルビ「かね」) 扉(④「黒金」を「鉄扉」ルビくろ「がね」⑥戸平)。一寸片手で押し給は(②ゑ⑤へ) れば、鉄のくわんのき

(②くわんぬけ④⑤門⑧⑬かんぬき⑪櫃)ぐわ(④あ)らり(⑤くわらり⑬からり)と抜けて、扉(②とべら⑥戸平
 ⑤加「を」両方(②④⑬加「へ」一度に開き(②④⑤く)、そこで目蓮喜び給ひ、門を難なくお通り(②おとる)
 なさる(②⑤⑬れ)。末(②④しい④次位)の地獄へ趣(④赴)き(⑬「へ趣き」を「と急がせ」給ひ(②たまふ④給
 う)、とても地獄が数々として「数々と」を②「かじをうごさる」④「数多うごさる」⑤「数多き事で」、紺屋(⑥こ
 おや)地獄に(⑥「に」なし)金者(②かずやの④⑬鍛冶屋の⑤鍛冶屋⑬金物)地獄、百姓(②ひやくしやう⑤百
 性)地獄を(②と)お巡(②まわ)りあって(④⑬ありて)、あみ(②⑤あめ⑬雨)もさみざみ(④⑥さめさめ⑬さ
 めざめ)らくるい(④⑤⑬⑬落涙)なさる(⑤⑬れ)(⑬加「向い給うが八万地獄」。此の間地獄の番す(②⑥し)
 る者(②をに⑤⑬鬼)を(⑬の)、名をば八面(②はつめん)大王と申(②し④⑧⑬⑬加「す」。大王怒(②いか⑪
 ルビ「いか」ってとがめ(④⑤咎め⑥み)て云はく。それへ(②そこい④そこへ⑥それい)来た(⑤夫へ来⑬無
 「た」るは何者(②④⑤⑥人)なるぞ(②④⑤⑬や)、(加②④「こわ(④は)どこぞとをうまふ(④思う)てきた
 や」⑬「茲は八万地獄であるが、如何な罪にて汝が来るや」、知るも知らぬ(②④⑥⑬加「も」八万地獄。今にお
 のれ(④⑤⑬己)をまつ逆様(⑤真逆⑧ルビ「さかさま」に、突(②⑥ち)いて(⑤搗て)突(④⑤つ⑥ち)き
 (②「突き」を②「つく」⑬「つつ」④無「き」込む覚悟(⑧を)せよと、下(②した⑬舌)をたたいたいて(②④
 ⑤⑥⑧下を叩いて)怒(⑪ルビ「いか」り(②⑥れ)し声が(②わ④⑤は)、天に響きて地にしみ渡る(②④⑤「大
 地もさける」⑬「千の雷寄せたる如く」。肝(②きも)も心も崩(⑥くじ)れ(②くずる)る計(⑥斗)り(⑬「崩
 れる計り」を「くだけの如く」。そこで(②④なれどらかんの⑬なれど)目蓮(②「わただのしこすもをそれぬけし
 け」④「様は、只の少しも恐れぬけしき」おっしゃ(⑥おちしや)るよ(⑤様⑧⑬加「う」には(無⑤「は」⑬
 「に」「おっしゃるよには」を②④「大王に向かい」、大王しばら(④⑤暫)く静(②しづ⑥しじ)まりたま(④⑦

給)へ(②⑧たまい)。我は(②われわ)天竺釈迦牟尼如来(②无尼佛の)、三の御(⑬無「御」)弟子の目蓮なるが、
 一人居給ふ母人(②「と」⑧無「人」)さんが、此間(②此のま④このま⑤此さ)地獄へ(②④⑧⑬⑯が⑤の)住む
 か(②しみか④⑯住み家⑤⑧すみ家⑬住家)と聞いて、尋ね尋ねてこれまで来る(②④⑤⑬来たが)。どうぞ大王、
 おぜひ(⑥⑧⑬御慈悲⑦漢字ツケ「慈悲」)で御座る(②おぜひをもちて④お慈悲をもちて⑤御慈悲を以て⑬「で
 御座る」を「の上で」、母に逢はせて(②⑬して)下さる(⑥下被)な(⑦あ)ら(⑤れ)ば、幾世幾世(②いくせ
 いくせ⑦⑧⑬ルビ「せ」)も喜びます(②⑥し)る。頼む頼むと(⑬両手をあわせ)のたまいけ(⑥き)れば(②
 ④⑤⑬「の給へたれば」、大王答へて申すよ(⑧申するよう)には(②④⑤「大王答へて申す(⑬さ)る様は」、さ
 てもさても(②④さてもさてもさて)珍(②めじら)し事よ。とうの(②④⑥⑧⑬⑯加「昔の」大(②④往)昔より
 (⑤「昔々往古よりも」⑬「とうの昔の今日までに」、加②④加「も」、かくの如くの(②かくのをそろし④かくの怖
 ろし⑤各も恐ろし)八万地獄へ(⑥い②④⑤⑬無「へ」、親を尋ねて来る子もないが(⑬「ないが」を「なし」、此
 一句変為②「をやを親とてたづねもせぬぞ」④「親を親とて尋ねもせぬぞ」⑤「親を親とて尋ねもせぬば」、⑬加
 「親を親とて尋ねて来んぞ」、子を尋ねて来る親もない(⑥し、此一句変為②⑤「子を子迎逢にもこぬぞ」④「子を
 子として会いにも来ぬぞ」⑬「子を尋ねて逢にも来ない」。さても気の毒(②きどくの④奇特の⑤奇特の⑬尊き)御
 僧さんや(②④⑬御僧様よ)。なんぼ貴(②④あなた⑤僧⑬加「方」)の(⑬「貴い」)身の上に(⑬と)ても、母に
 逢ふ(②あを)こと(②⑤「こと」を「とは」④「母に会おうとは」⑥合事)安々(②やしやし④⑬易々)からぬ
 (⑤ならん⑬からず)。そこで(⑤依って⑬聞いて)目蓮涙を流し、叶ふ事ではある(②ろ)まいけれ(②り)ど、ど
 うぞ(「どうぞ」を②「大王あなたのをぜひのういで、へとめ」④「大王あなたのお慈悲の上で、ひと目」逢はせ
 (⑬し)て下され(⑥被下)ませ(②④「たまい」、②④加「ぜひにぜひにとなめだをながし」⑤「逢して給はれか

し」⑬「逢わして下され給え、頼む」と(②④無「と」)、両手合はせ(⑤し)て(⑬無「て」)頼まれけ(⑤拝さ)(⑥き)れば(此一句変為②「はいれいなさる」④「礼拝なさる」)(加②④「かかる様子を大王がながみ(④め)」(⑬無此一句)、とても(②④とかく)邪慳(②ぢやうけん⑤邪見⑥ぢゃきん)な大王なれど、さら(④⑤れ)ばあな(②④⑤母⑬そなた⑥貴)に(②④加「さ」)逢わせてやる(②④⑤⑬逢わしてやろう)と(⑬無「と」)、九丈二尺の金棒を持って(②かな棒を以て④金棒を以て⑤鉄棒を以て、湯玉とび(⑥ぶ)立ち(④⑬とびたつ⑤飛立つ)地獄の中を、ぐるりぐるり(⑤くるりくるり)と三びん(②さんべん④⑬三べん⑤遍)まわし、是や善哉これ善哉と(⑤無「と」、三度(⑧座)唱へ(⑥い)て金(⑤鉄)棒の先に、(②④加「あわれいとしの母親様の」左(②加「り」)の腕(②④⑤⑦⑧無「の」②⑥かいな⑬⑬ルビ「かいな」)を右(⑤左)へとさして(⑬「さして」を「通す」、さあさ目蓮是目蓮よ「目蓮よ」を②「めたまへよ」④⑥「見給よ」⑬無此一句)。是が御弟子(②おんみ④⑤御身⑬あなた)の母人さんぢや。(⑬「母人さんぢや」を「母親様と」、加②「ゆうわりまされば」④「言われますれば」、いかな(④に)貴き(②たつとけ)目蓮さん(②④⑤目蓮様)も(⑬「出して見せれば目蓮尊者」、歎(⑥なき)き涙に御もせ(②⑬おんむせ④おん咽せ⑤御向かせ⑥おもせ⑧⑬御むせ)なさる(⑬給う)。さてもいとしの母人さんや(⑬「さんや」を「様や」。やれ(⑤やあれ)笑止の我母さんや(⑥⑬無「や」)(此一句変為②「さぞやくろしきことでわある」④「さぞや苦しきことではあろう」と(④無「と」、召(⑥み)した衣の、み袖で(②④⑤を)もって(⑬無「やれ笑止」以下)、落つる(②④おちる⑥をちり)涙をおしほり(②なみだをしほらせ④⑤涙をしほらせ)給ひ(⑬「おしほり給ひ」を「袖にてぬぐい」、母の姿(②⑥しがた)をよく見給へば(⑬「よく見たへば」を「見給いたれば」、こ(⑧と)い(④⑥肥え⑬透ルビ「こ」い)てみよ(②ゆ④無「よ」)(⑬□けて見え)るは、骨々(⑬骨節)ばかり(⑤此一句変為「肥て見るは骨ばかり」)。はつ(⑬り⑬張つ)たもの(⑥者)とて、おん

(13骨) 筋 (6しじ) (11ルビ「しじ」) 計り (2此一句變為「ほうばねばかり」) (5無此一句)。光り (2しかる13ひかる) つよく (2④⑤き) は (13「もの」とて) 両目 (2りよがん13⑬兩眼) 計り。亦も衣で涙ををさへ (2をさい
 ⑧おさえ13「またも涙を衣でぬぐい」、大王何卒我母様 (2④母人⑤吾母人さん13我が母上) を (2④の)、娑婆の
 姿 (2しがた) にお直しなされ。浮き世姿 (2うきよしがた⑦11ルビ「しがた」) は三十二相 (2④加「で」④割註
 「婦人の一切の美相」)。とし (2④⑤年⑬歳、13無「三十二相とし」) は三十二才で御座る。願ひ願ふて (2④⑤願う
 願うと⑬願ひ願うて) の給ひたれば (2加「母人様をかまの中へとなげこみたまひ」、大王 (2④⑥⑧⑬尊者) に
 申して云はく「申して云はく」を②「のたまふようわ」④「のたまうようには」 (13「願ひ願ふて」以下を「さあ
 さ逢われよと申し上げれば、とても邪慳な大王故に」、さらば此かま (4⑤⑬釜) そなたに渡し (4わたす)、す
 (6し) ぐ (4⑤直) (2「すぐ」を「ずき」) に逢ふたがよろしう御座る。さあさ逢はれ (2り) よ、さあ (2無
 「あ」⑤加「さ」) 逢はれ (2り) よと、天に響きし (5響かせ) からから笑ひ (5ふ) (此一句變為②「あちらみう
 てわくしむけわらい、こちらむいてわからからわらい、またふけいだし」④「あちら向いてはくすくす笑い、こちら
 向いてはからから笑い、また吹き出だす」、よって (2④⑬そこで) 目蓮心のうち (2内⑤中) に、さても嬉しと喜
 び給ひ (13無「心のうちに」以下)、笈 (2おいぢり④笈摺⑥おい⑦11ルビ「おい」⑬加「づる」) をかそこ (2⑤か
 しこ④彼処) に早速 (2さしそく) (13無「をかそこに」以下) をろし (5下し④⑧おろし)、釈迦の金言 (6金銀)
 「釈迦の金言」を②「釈迦のをしいの女人たしかる」④「釈迦の教えの女人助かる」⑬「女人助かる」吉 (5⑬結
 ⑬決) 文 (13品②「けちぼん」) 経を (加②④「取り出したまい」、み声 (13妙②「みこゑ」⑤「微妙」) 音声 (2を
 んぢやう) 声高々に (2④と⑬声張り上げて)、御誦 (2およみ⑥⑬読) みなされ (加②④⑬「て」) ましましたれば
 (5御読なされて在したれば)、いかな (4加「る」) 湯玉もたちまち (2つ) 消え (2い) て、(加②「四万ゆじん

のふかさのかまが」④「四万由旬の深さの金が」、僅か二丈の深み(⑤深さ)となった(②④になれば⑤となりて)。
 (加②④「目蓮様わ喜びたまひ」) 亦も矢立(⑤墨汁)の筆持ち給ひ(⑤へ⑬「持ち給ひ」を「取り出して」(此一句
 変為②④「腰のやたてを取り出したまい、ふでとりいだし」)、(④御) 經の御文を御書き(②け) なされ(④「御書
 きなされ」を「書き認めて」、かの間(⑤金の⑬すぐに) 地獄へ(②「かの間地獄へ」を「かまのちいと」④無此一
 句) 投げ(⑥なぎ) 込み給ひ(④給いや⑤⑬給ふ、直ぐに(⑬そこで) 地獄が一丈引いた(⑤へりて④「一丈引い
 た」を「褪せたるほどに」)(②此一句變為「さてもうれしや又二丈ひいた、さてわうれしと、またふでとりて、御
 經の御文をかけたためて、なげこむたまや、しぐに地獄があせたるほどに」)。有(②う⑦⑬ルビ「う」) ざい重罪
 罪人共が、鑊(②かま④⑤⑥⑬⑬釜、①ルビ「かま」) のふち(④縁⑤淵) へと皆は(④這) い上る。なれど学者(②④⑥⑧⑬⑬尊
 者) の母人(②④さん⑤加「さん」) 計り、罪が深(②をも④重) く(⑬重う) て下へ(②したい) と沈(②せず)
 む。そこで目蓮大音声(⑬ルビ「だいおんじょう」) で、母の大ふぢやう(②だいぶぢやう⑤大扇女⑬大不女ルビ
 「だいぶじょう」⑬ダイブジョ⑬大扇女)(加④「母」⑥⑪「又」⑬「母の」) 大ふぢやう(②④だいぶぢやう⑤大扇
 女⑬大扇女ルビ「だいぶじょう」⑬ダイブジョ⑬大扇女) と、声を限りに呼び給は(⑤へ⑬え) れ(②り) ば、鑊
 (②かま④⑤⑥⑬⑬釜、①ルビ「かま」) の底より(⑬にて) 母人さんが、哀れな姿に(②あわれかしかに④哀れ微か
 に⑤衾れ静に、⑬無「母人さんが」以下) 声細々と、われ(②り) を呼ばれ(⑤る) る(②④し⑬「呼びりし」) 殊
 勝な(②すしやうの④⑤殊勝の) 声は、娑婆め(②④⑤⑬⑬無「め」に残せ(②れ) し目蓮かいな(⑬「と」)。さ
 てもなつかし(②④⑤加「やれなつかし」⑬此一句重複) と、湯玉の(②④⑤⑬⑬無「の」) 底にて(⑤底より) おっ
 しゃりけ(⑬た⑤仰しかった②⑥おつしやるき) れば、そこで目蓮喜び給ひ(⑤へ)、御手に持ち(②④つ) たる御
 經で招き(②④く⑬無「招き」、招き給へば母人(②きみ④上) さん(②④⑬様) が(⑬は)、カマ(②かま④⑥⑬

(16金) のふち (4縁5淵) へ (6い) と御あがりなされ (2④る)、よって (2④⑬そこで⑥よちて) 目蓮母人さん
 (2④⑬様) の、御手 (6おて) をしつかと手に取り給ひ (5へ) (2④無此一句)、カマ (5⑥⑬⑬金) の中より
 (2④「カマの中より」を「うでをつかんで」引き上げなされる (13「なさる」を「給い」)。(5加「扱もいとしの母
 人さんや」)。さてもなつかし目蓮かい (5「い」を「や」と (13無此一句)、涙ほろほろ (7もうもう⑬ぼろぼろ)
 対面なされ、母はやれやれ恥ず (6はじ) かし事ぢや (5や⑬よ) (此三句変為②④「なみだ (4涙) ながらに母上
 様のまへ (4前) にと両手をついて、さぞやなんげ (4難儀) をあそ (4遊) ばしたると、をう (4仰) せられり
 (4るれ) ば、母人様わ (4は)、こりや目蓮や、かかるところい (4へ) をし (4落ち) たとゆうわ (4いうは)、
 申わき (4申し訳) なくはじ (4恥ず) かしござる」。釈迦牟尼 (5⑬無「牟尼」⑬加「の」) 仏にも言ひ (2ゆい)
 わけたため (2ただじ④たたず⑤「たため」を「もなし」)。一家 (2いちき⑬ルビ「いつけ」) 眷属 (2しんるい④
 親類⑥いちききんぞく) なほなほ (5⑥猶々) 笑止 (4すまず)、なれど (5⑬加「目蓮よく (13う) 来給へ (13う)
 た。されば」 (此一句変為②④「かかるところい (4へ)、なんず (4汝) やうをしのげ (4よう凌ぎ)、われを尋に
 (4ね) てけ (4来) てくれたる、しすよ (4殊勝) の心、母にとりてわ (4は)、あるかと (4有難う) ござる、な
 れど」、母さん (2目蓮) よく聞き給へ (5無「よく聞き給へ」⑧い)。(2④加「されば母さん」) (13無「なんず」
 以下) 此の目蓮はあなた (5「あなた」を「僧」) ひとりに遭ひ度い (13「度い」を「たき」②④ひとりにあいたさ
 ⑤一人に逢たい⑧ひとりに遇いたい) 計り、難所 (2なんじよう④難行⑥難ぢやう⑬難儀) しのんで (2しぬぎて④
 凌いで⑤しのび) 尋ねて来たぞ (13「参りて御座る」)。どう (13「何」) ぞ母 (5加「人」) さん (2「母びと」④
 「母人」) 地獄の責めを (2く④苦)、し (2す) ばし語りて (13「語って」) お聞かせあれ (2り) と (5「と」を
 「よ」、よって (2をうせられりば④仰せらるれば⑥よちて) 母さん (2母びと様わ④母人様は) 仰っしやるよには

(⑤⑥様は⑩無「は」)、(加②④「こりや目蓮や」)(⑬「よって母さん」以下を「泪ながらに母にとすがる、これや目蓮」)地獄の責め(②み)苦(⑬と)は、なかなか(④⑤中々)もって、口や言葉に(②④⑬で)はなし(⑥話し)は(⑤無「は」)ならぬ。聞かば(②聞きば④⑬聞けば⑤聞て)地(②ち④⑤⑥⑦⑧⑬⑯血)を吐く(②はく④⑤吐き)一命(②いつみ⑥一名)終り(②④⑤⑯る)。口に云はれん(②④⑤言うに言はれん⑬口で言われん)苦しき事よ(②くろしけことぢや④苦しいことぢや)。(加②「をうせられりば」④「仰せらるれば」)そこで目蓮御経(⑤⑬無「御」⑥御しやう)を「を」を②④⑤⑬「取り」出して(②④無「て」、舌(②いち④⑤⑧⑬⑯一)に法華(②ほうけ⑥ほき)経、二に三部経(②をう、汗を流して(加②「こゑだかだかと」④「声高々と」)読誦(②どくしやう⑥読書)なさる(②④⑤あれば⑬「読誦なさる」を「読み上げあれば、偈も不思議や」)。(加②④⑬「御」)経の功德(加②「わどいらいもの」④「はど偉いもの」)で(⑬無「で」、一つ(②一ツち)の鑊(②かま④⑤⑥釜)が(⑬「一つの鑊が」を「釜は」)、三三(④加「が」、ルビ⑧⑬「さざん」⑪「ささん」)九つ(②④ツと)割れはなれば(②わりはなれば④割れ離るれば⑤割別るれば⑯割れ離れば)、九品(②くぼん⑥九をん⑧ルビ「くぼん」)浄土へ(②④と⑥い)いちいち(⑤一一)響き(②⑤響く④開く)(⑬「九つ割れはなれば」以下を「九つに割れ」、蓋はたちまち(②たつまつ④⑤忽ち)八つに割れ(②り)て、八重(②はし④蓮⑪ルビ「やえ」)の蓮華(⑤八葉蓮⑥八重の蓮ぎ)と転じて開く。かの間数多い(⑤彼ま多数⑯数多の、「かの間数多い」を②「うざい重ざい、かじのをうきな」④「有罪重罪数々の大きな」⑬「釜の中なる」)罪人共も(②④⑤⑬が)、いきに(②いさみ④勇み)しじ(④進⑧⑯「沈」)んで(⑬此一句変為「浮かび上がってよろこぶ」)細々(④ほぞほぞ)笑ひ、一人一人がはしのは(②はすは④⑥⑧⑬⑯連の葉)かむり(⑤無上二句)、鑊(④⑤⑥釜)のめぐり(⑥まわり)を、おっ取り(⑦おくり)廻はし(⑤無此一句、⑬「廻はし」を「巻いて」、両手たた(⑤⑥叩)いて、左り(⑧無「り」②⑤⑧⑬⑯加

「の」方(①⑪ルビ「かた」へ(②⑥い)、ぐるりぐるり(⑬加「と」三辺(⑤⑬遍⑬べん)まわり(②④る)、これが此世の踊り(②④⑬加「の」初め。責め(⑥せみ⑪無「め」ルビ「せめ」に負うたる(⑥り⑬逢うたる)罪人共が(⑤無此一句)、踊り上つ(④り)て喜びけ(②⑥き)れば、西の方(⑬ルビ「かた」より(⑬加「たなびく」紫(⑤⑬の)雲が(⑬⑬無「が」、きれい(⑤寄麗)(⑬加「な」はなやか棚引なされ(②なさり⑤たるぞ)、中に弘誓(②⑥ぐぜい⑬仏誓)の舟ひらひら(②④びかびか⑤ひかびか)と、諸佛菩薩(②ぶさつ)や(②④⑤⑬が)笙(②しよ⑤簫)箏レキ(②しちりき④箏築⑤齊築⑥七力⑧⑬⑬笙簫築ルビ「しょうひつれき」で、あまた(②④数の⑤多数の)罪人み(⑬みな)船に乗せて(⑬無「て」⑤御身に乗って⑦乗わせて)、(加②「ぎんにみてたいさとれをへらく」④「現にめでたい悟りを開く」⑤⑬「現に目度く証(⑬語り)を開く(⑬き)」、御むか(⑧⑬迎)いなさり(⑬り、此一句變為②④⑤⑬「そこで尊者の母びとさんが(⑬母親様は)」かく(⑤斯)の様子(②やうし)を、学者(⑥⑧⑬尊者)の母が(②④⑤⑬無「学者の母が」御眺め(⑥おながみ)ありて(⑤「御脈在って」、やあや目蓮(②④⑤加「あの餓鬼共は、何のよみに(⑤で)浮んだやらと、是は目蓮」合点がゆかぬ。そちの(⑬が)為には、此母こそは(②④⑤⑬加「よしみ在ぞやあの餓鬼共と」(⑥⑧⑬⑬加「よしみあるぞやあのがき共が、何のよしみぞ(⑧⑬⑬で)う(⑬浮)かんだやらと」、言ひも果たさぬ(②いくもはたさん⑤言も果又)其のまま直ぐ(②しぐ⑤真)に(⑬「直ぐに」を「地獄」、震動雷電(②しぜんとうらい天⑥「雷電」を「雷雷」たちまち(④加「に」曇り「曇り」を②④「くもはりわたる」、天に(②てんび④⑤天火⑬天氣)稲妻(②いなじま)はたはた(④霹靂ルビ「はたはた」⑬ばたばた)神(②はなはだかめ⑤雷⑥ばたばたがみ)ちゃ。さても笑止やあら気の毒や。もとの地獄にまた落ち(⑧落さ)たまひ(⑥⑬給い)(此一句變為②④「もとのごとくの八万地獄」⑤⑬「元の如くに八万地獄」。さても(⑬無「さても」あさまし、邪慳ぢや(⑤邪見で)ないか(此一句變為②「ずやきんなこと

ちゃ」④「邪慳なことぢや」⑬「邪慳いや程に」。われと乗りゆくさて火の車。浮かむ瀬も(②せの④瀬の⑤世の) なき母人さんと(⑬や)、そこで目蓮力を落し、とても邪慳は(②じんじわ⑤神通の⑥ぢゃきんは⑬神通は) かなわぬものと(⑬「ものと」を「程に」)、(加②「足もどちどちおいぢりかじけ」④「足もどちどち笈摺かつぎ」、直ぐに精舎へ(⑥い) 帰らせ給ひ(⑤ふ)、(⑬加「御」 釈迦(⑬加「如来」) のみ許に(⑤身元へ⑥日本⑬御前へ⑬御許に)(⑦無「直ぐに」以下)、直ぐ(⑥しぐ) 様(⑬無「直ぐ様」) 出て(④出でて)、涙(②なめだ) 流して嘆(②な) なぎ) かせ給ひ、い(②ゑ) かに御師匠(②師主⑥しやうじよ) 釈迦牟尼如来、いかに(②でかひ④でかい⑤無「いかに」加「の」 御慈悲の(④を⑤無「の」) おかげ(⑥ぎ) により(⑤⑬つ⑥ち) て、地獄巡りを(②わ④⑬は) 致したけ(⑥き) れど、日頃(加②⑤「邪見な」④⑬「邪慳な」 我母いかに(②④⑤⑬「いかに」を「故に」) かよう(⑬無重複) の邪慳(⑤邪見) により(②⑤⑬つ) て(⑥ぢゃきんによちて)、又も地獄へ(⑥⑬に) 沈(②せず⑥しじ) んで御座るり(④⑤⑬無「り」⑦⑬⑬無「る」)。どうぞ貴方(②あなた⑤仏⑥貴) の方(⑥法) 便力(②りけ) で、母を浮め(⑬⑬⑬べ) て下され(⑤下さい⑥被下) ませと(⑬給い)、涙乍にす(⑥し) が(⑬「すが」を「語」) らせ給ひ(②⑤⑬う)。そこで大聖釈迦牟尼如来、さら(⑬れ) ば施餓鬼(②をきよ) の(④無「の」) 供養を致し(②④す⑬せ)、施餓鬼(⑬赤い④加「御」 飯(②せがき御飯⑥せがきはん⑦⑧⑬⑬ルビ「はん」) をば(④無「ば」) 三石六斗、外に白旗百本建てて、(加②「くろにむらさき」④「黒に紫」⑤⑥加「黒き」 青き(②④無「青き」⑥⑧⑬⑬加「に」⑬「又も青旗立てる」、又あさ黄(⑥あさぎ) に(⑤「又あさ黄に」を「赤」 旗も(②「又き色やあか色や」④「又黄色や赤や」、四色数々四百の旗や(⑤幡ぢや)(②④「五色数々五百の旗ずや(④ぢや」)(⑬「又あさ黄に」以下を「又も赤旗百本立てる。都合旗数四百の旗に」)、またも(②わ④⑬は) 精舎(②すやうずや) の大木毎(⑥事) に、灯(⑦⑬ルビ「とも」) し明り(⑥灯) が(②とむす光は④ともす明かりは⑤燈す

光は⑬燈火光る 高灯籠 ②高どうろ⑪籠ルビ「ろ」 ぢや。ほかにあまた ⑤外に数多 の飾りをなされ ②④⑥
 り ⑬無此一句、御釈迦如来を始め ⑤「を始め」を「の祈り」と致し ②す、数多御弟子が ②⑤⑬も 八万
 余人、よ ⑤⑥寄 せて集め ⑥み て声張り上げ ②こいはりあぎ て、施餓鬼御経をおつと ⑤御勤 め ⑬
 「読み上げ」なさる。さても不思議 ②ふすぎ や御経の功德 ⑤加「で」、現 ⑧⑬⑯ルビ「うつつ」に現れ
 ②げんにあらわり ⑤顕れ現はれ 昼 ②へる の ②④⑤⑬無「の」 九つに、母が ②④⑤⑬は 浮んで幽霊 ②
 ゆうり ⑥ゆうれ となり ⑤⑬なつ て、釈迦のみ許 ②めもと ⑤御所 ⑥身本 ⑬身元 ⑯御許 へ ②い 来たらせ
 ②「あらわり」④「あらわれ」 給ひ ⑤⑬「給ひ」を「られて」、歎喜涙で ②④「そこで目蓮」 喜びたまひ。
 ②「母親子二人うりすなみだを、すばらせたまい」④「母と親子二人、嬉し涙をしばらせ給ひ」、そこで目蓮両
 手を合はせ、御釈迦様をば参拝致し ②④三拝なさる ⑤⑬三拝なされ ⑦⑧三拝致し、共に落涙遊ばしけ ⑥き⑬た
 れば ②「遊ばすたりば」④「遊ばしたれば」、釈迦も羅漢も皆々 ②めなめな ⑤皆諸 共「皆々共」を⑬「皆
 共々」⑯「皆みな共々」に、口に云はれぬ ②いふにいわりん ④⑤⑬言うに言はれん 喜び ②ぶ ごとぢや。よ
 っ て ②④そこで ⑥よちて 目蓮如来 ②④⑤⑬「如来」を「佛」に向ひ、母の仏果 ②佛くわ ⑥仏課 をお頼み
 ②④⑤⑬御願い あれ ②⑥り ば ⑬なさる、そこで如来のたまふよには ⑤の給う様に⑬言う様は、②加②
 「佛くわばだいは叶わん程に」④⑤⑬「佛果菩薩は叶はん程に」、②加②よりて母をば⑤⑬依って⑥よちて⑦⑧⑪⑬
 よつて 天上 ②加②④界へ⑥い⑧⑬⑯へ 出世 ④出生 をさせ ⑥し る「させる」を②④「さす」⑤「致す」
 ②加②「と、をうせなりれば」④「と仰せらるれば」、かくて ②④⑤そこで 目蓮 ②④様の 申さること ②④
 申さるよに⑤⑬おつしやる様 は、②④⑤⑬加「天上界とは有り難けれど」⑥此一句変為「かくて目蓮おちしや
 るよには、天上界とは有難きれど、天上界と申すこは」、②④加「天上界には」 日 ⑤天 に ⑤加「五裏と」

三熱の苦のあるところ (②「三日の苦しきありば」④「三熱の苦しきあれば」⑤「三熱あるは」⑬「日に三熱」以下を「天に二すいと三熱あらば」、苦なき所の (②④⑤⑥へ⑬無「所の」母人さんを (⑬無「を」、御出あるよ (⑬様) に (②お出しあるように⑤御出有様⑥御出あるよう) 御頼み (④⑤御願い) あれば (⑬なさる②「をにがいしると、をうせなれりば」)、 (②加「釈迦牟尼如来」さらば (②「さりば日の本」⑤「さらば」を「そこで悪人済度の為に、東日の本」、⑬加「是より東に当り、先は日本」、大和 (⑧⑪⑬⑬ルビ「やまと」) の (②⑬加「国の」⑤加「國」、壺 (②つば⑥ちば) 坂寺の (⑤無此一句)、弥陀 (②めだ) の協立 (②わき立ち⑤わき立つ⑥だち⑧⑬ルビ「わきだて」) 観音 (②くわおん) 様と、封じ (②ふうず) 込め (⑥ふんじこみ) るぞ喜びあれ (②⑥り) と (⑬よ)、よって (②をうせなれりや。聞て④聞いて⑤そこで⑥よちて) 目蓮満足なさる (⑤⑥れ⑬「なさる」) を「致せ」。(加②「云うてつけせんをはしなれど、先わこりにてふでとみをわり」④「云うて尽きせんお話しなれど、先はこれにて筆とめまする」⑤⑬「言っ (⑬う) て尽きせん御咄なれど、先は略して筆留めまする (⑬無「る」」⑥「云ってちくせんお話しなれど、ましわ略して筆とみまします」⑦⑧⑬「言ふてつきせぬ御談 (ルビ「おはなし」⑪ルビ「はなし」) なれど、まずは略して筆止めまする」)。

五 詞章異同の発生理由

以上の校異から、内容的な附加・縮略、修辞といった語り物自体のもつ発展・展開の過程で生ずる現象が、如実に看取できるが、そのことを検討する以前に、この作業から判った字句の異同の特徴を以下列挙したい。これらの多くが「金沢系本」には見られないのは、「金沢系本」が恐らく文人の手を経ているからであろう。

1 礪波地方の方言音をもとにそのまま字を当てたもの。

これらの諸本を照査するなかで、母音の交差に気付く。「e」「u」音が「i」音になり、同時に「i」音が「e」「u」音で表記されることが往々ある。たとえば、「帰れば」は「帰りば」、「船」は「ふに」、逆に「けり」が「けれ」や「ける」とあったり、「給ひ」は「給へ」「給ふ」とどちらも書いている。要するに、これらの中間母音を表記するのに、標準語音韻を基準とするカナ表記の「あいうえお」は適合しないため、こうした書写の混乱がおこっていると思われる。それが複合すると「一人」を「へとる」と記す。それも草書体の変体仮名で書かれるので、解読が甚だ厄介になる。さらに、漢字を当てても「金言」を「金銀」と書く例がある。

2

書写に際して、元の漢字の崩字を誤写したもの。

例：「尊者」を「学者」。

3

意味が分からず、書写者が自分の判断で勝手に書いたもの。

例：「笈」と「負う」、さらに「笈づる」を知らずに、混同している。行脚僧が背中に背負う「笈」が「負い」と発音が同じなので、「負い」と書写し、さらに負う時に着る袖なしの「笈摺」が「笈」だと誤解してか、背負う文書箱を「笈摺」と完全に誤解している。これは、金沢系本には全くないものである。「笈摺を負う」と再三出ている。「箆簞」は庶民がほとんど目にしなかったので「七力」などと音を写している。

4

意味を取り違えて、書写者の知っている意味に合わせて漢字を当てたもの。

例：「三拝」を「参拝」。「舌」を「下」、また「八尋」の意味が全く意味がわからず「旗広」としているなど。字の誤解

5

例：「娑婆」を「婆婆」と読み違えて、しかも「婆婆」としたから申しめて、「娑婆め」と読んだ可能性がある。

6 錯簡

とくに資料②に見られるように、詞章の句が前後している。此の場合、どの句がどこに移動したかを明記すればよいのだが、この校異における表記の都合上、A句がB句の後に来ているとは記さず、(無「A」句)として、B句のあとに(加「A」句)とした。すべての移動句はすぐ後に位置するので、このように記した。

7 両方の意味に取れる音韻近似語。

「気の毒」を「奇特」とし、前後の意味は双方通じる。

8 余分な送り仮名

本来、漢字にその読みが含まれているのに、それは漢字の読み方を示す意味もあったと思われるが、それが次の文字に繋がると思ったら、じつは、余分な送り仮名であることがある。例…ざい人↓ざい人ん 鏡↓鏡み
左↓左り 辻↓辻ず、ゆ(言) わば↓ゆうわば、ゆじゅん(由句) ↓ゆうじん ちゃけん(邪慳) ↓ちゃうけん
脱字(「い」「う」音の省略)

標準的書写ならば、本来あるべき、「はいれい(拝礼)」を「はいれ」、「よう(様)」を「よ」、「しよぞく(装束)」を「しよぞく」、「りようがん(両眼)」を「りよがん」、

10 格助詞の「は」

②では、格助詞の「は」をほとんど「わ」にしている。

11 仏教に対する認識不足

「大聖釈迦牟尼如来」の「大聖」を「大小」「大庄」。「浄玻璃の鏡」を知らないなので、「浄瑠璃の鏡」とする。『法華経』を『法き経』、『血盆経』を『結本経』、『決文経』、『古文経』、『吉文経』、『結紛経』などと誤写している。

12 方言音の不統一

同じ写本の同じ語彙が、時に標準音であったり、方言音で表記されるなどの不統一が見られる。これは、上述のような方言音を標準語の音節文字で表記する難しさに起因すると思われる。要するに南礪系本の書写は、毎年お盆に歌い継がれて来た口伝の音声記録であるという著しい特徴を有しているからなのである。

六 金沢本の諸本とその特徴

本稿では、「金沢本」という仮称を使用するが、これは確固たる確証があつてのことではない。かりにこの呼称を用いていると考えていただきたい。

国会図書館所蔵の金沢本は、目曙しただけでも、以下の五本がある。これらは皆版本である。また、おそらくそれを書したであろう近年の地方諸史に掲載されている詞章も、このような版本を元にしたと思われる。いずれにせよ、金沢本が南礪本と著しく異なる点は、版本が存在するように、一応の「定本」にしようという意識が働いているようで、文字の異同が非常に少ない。ただ、⑤の西村本のみは変体仮名とはいえ、フリガナ入りの漢字多用という他書とは大いに相違する特徴があり、かつ挿絵入りであることも他書には見られないものである。

① 近 八郎右衛門本『目蓮尊者地獄めぐり』

奥付に「明治十九年二月廿二日出版御届 同年三月 刻成 定價五錢 編輯兼出版人 石川縣平民 近 八郎
右衛門 金澤區横安江町百九番地 發賣所 同支店 同區上堤町廿八番地」 十六丁 和装 附「海土道行」

② 大橋 甚吾本『目蓮尊者御一代記』

奥付に「明治十九年四月廿七日出版御届 同 五月廿五日 刻成 富山縣平民 編輯及出版人 大橋甚吾 越中國上新川郡 富山西町十五番地」 十八丁

③ 塩谷 与右衛門本『目蓮尊者地獄巡り』

奥付に「明治十九年八月三十日御届 同年九月 刻成 編輯兼出版人 塩谷与右衛門 越中国射水郡高岡定塚町一番地 定價五錢」

④ 浅野 宇佐松本

表紙に「以奈可草紙」「目蓮尊者地獄廻り」第十三号「文苑堂新はん」と書かれ、目蓮尊者、閻魔王 鬼一匹の絵図が描かれている。第一頁に浄玻璃の鏡に映る像に喫驚する亡者が描かれている。文頭に「目蓮尊者地獄めぐり 宇留藤太夫直傳」とある。奥付に「明治十九年四月廿三日御届 同廿二年五月十五日出版 編輯兼出版人 石川縣平民 浅野宇佐末 金沢市石浦町十九番地」とある。二六丁

⑤ 西村 宗實本『目蓮尊者地獄巡り』フリガナ、絵図付き 本文十九丁に続き二十丁右には「目連ガ母地獄ノ

苦ヲ免ガル」の絵図、左には「海土道行」とある。これは、後述の「浄土道行」と全くの同文であるので、内容からして「浄土道行」が妥当と思われる。また、作者などの名は記されていない。

⑥ 京都大学国文学所蔵頼原文庫本（無刊記） 上記岩本博士著書に掲載されている。表紙には「目蓮尊者地獄巡

り 附り浄土道行蓮台 宇留藤作 直傳」とあり、冒頭には「目蓮尊者地獄めぐり 宇留藤太夫直傳」とする。

⑦ 金沢市立図書館所蔵本 石破洋氏によれば、①と同文であるが、明治三十年九月廿日出版と奥書があるという。⁽⁶⁾

⑧ 早稲田大学演劇博物館所蔵本 ①と同文。十七丁右で本文が終わり、次の十七丁左に改めて題して「浄土道行宇留志藤作」とある。

⑨ 鳥越村ジョウカベ踊『目連尊者地獄めぐり』（五段）

『民謡と音頭』所収（『鳥越村史編資料』第二輯 鳥越村文化財保護委員会 年代不記）

⑩ 白峰村じょうかべ『目連尊者地獄めぐり』（五段）

a 『白峰村史』所収資料。注『白峰村史』下巻（白峰村史編集委員会 一九五九）

b 『石川県の民謡』「じょうかべ」所収資料 石川郡白峰村桑島（北陸放送 一九六七年）。末注に「石川郡鳥越村上野、同河内村直海谷、金沢市夕日寺町、同森本・八田、鳳至郡能都町地方など県下各地で唄われている」とある。なお、能都地方では今日唄われていないようであるが、『能都町史』第五章第五節「口頭伝承」（能都町史編集専門委員会 一九八〇年）の「盆踊唄」に『鳳至郡誌』を引いて、主に唄われていた唄の九番目に『目連尊者地獄めぐり』が挙がっている。

⑪ ジョンガラ『目連尊者』

『金沢の口頭伝承』（3）「口説・段物」所収。⁽⁵⁾

① 中新川郡上市町で採取された『目連尊者地獄めぐり』

これは、黒坂富治編『富山県の民謡』所収（北日本新聞社 一九七九年）

② 上新川郡大山町で採取された「さっさ」

これは、『富山県民謡緊急報告』所収（富山県教育委員会 一九八五年）

以上の中で、金沢本として以下の詞章作成でとくに参考とした資料は、上記⑤の国会図書館蔵西村宗貫編輯『目連尊者地獄巡り』（明治廿五年八月廿八日版）である。ただ、誤写は免れないから明らかに誤写のものは、他の諸本と照査して訂正を入れた。また、西村本は漢字が多く、ルビも振られているものの、やはりカナ書きも少なくない。とくにカナ書きで不鮮明なものに関しては、岩本裕博士の活字化されたものも参考とした。だが、博士の活字化にも間々誤植があり、それは採らなかつた。金沢本は南礪本と違い版本が多く出ていて、文字の出入りが比較的少ない。それでも、その漢字音に誤りがないわけではない。あるいは、本来の漢字が誤っていたから、仮名で書写するときにそのまま発音を写したのかも知れない。例えば、「由旬」をほとんどが「よ志ゆん」（「志」に濁点）とあり、西村本は「餘旬」と書いている。もちろん、前後の意味からこれは明らかに「由旬」の誤りである。西村本の変体仮名は、か（可）を（織）す（寿、須）に（尔^マ）た（多）ま（満）の（能）は（者、ハ）り（里）ね（年）み（ミ）れ（連）ほ（不）つ（津）る（留）といった比較的オーソドックスなものである。使用漢字にはすべてフリガナが同じく変体仮名でつけられているので、原則的には西村本の漢字を用いた。既述したごとく、金沢本はほぼ一致しているが、一部他書と大いに異なる箇所があるので、そこだけ参考に（ ）内に記した。

一方、南礪本の方は定本がなく、いわば諸書不統一である。これらは、実用から各時代を通して盆踊りの際に歌うために忘れぬようにとにかく書写したのと、概して省略、時代に合わせた語彙と借字による平易化、それに口で歌っている方言音を直接に書写した詞章台本になっているものなど様々である。そこで小論では、上記に挙げた諸本の中から妥当と思われる詞章を採用して定本を定めるよりも、この南礪本諸書のふくんでいる多様性を重視して、出来るだけ豊富な表現や内容を盛り込み、研究の資料として提供するように心懸けた。そのために、全く標準音韻によって書写しているので本来の味わいは薄れているし音調もよくないことをご承知願いたい。なお、句読点は南礪系本に本来

ないので筆者が仮りに付け、金沢系本は妥当性を欠く部分もあるが、基本的に西村本によった。また、金沢系本の（ ）内の文言は前掲①⑥⑧に拠る。

七 南礪系本（参考）と金沢系本の各段詞章対照

初段

（南礪系本）

抑々勧請申奉る。歳の七月、日は十五日。千部施餓鬼のさてその由来。よくもつらつら尋ねてみれば、忝くも釈迦牟尼如来。われ等衆生を済度のために、この世八千余度^{たび}の来迎。後の五百のその大願は、みんな衆生の御為めで御座る。常に御苦勞遊ばし給ひ、有性非性の導きなさる。これはさておき、ここに大聖釈迦牟尼如来、御弟子ばかりは八万余人。さてその中を五百人、おすぎり出して、五百羅漢とお名付けなされ、それをさてまた五十人を、おすぎり出して、五十羅漢とお名付けなさる。五十人中十六選び、これが即ち十六羅漢。二八羅漢のさてその中を、たった七人御おすぎりなされ、これを七仏羅漢と申す。阿難尊者が兄弟子尊者、二番御弟子は富楼那尊者、三の御弟子が目蓮尊者。さては東西憚りながら、この間、目蓮尊者の由来、さてもつらつら尋ねてみれば、僅か御歳五才の春に、別れ給ふが父上様ぢゃ。又も重ねて七つの歳に、哀れるなかや母君様が、お果てなされて涙の種ぢゃ。さては暫く元へと戻る。調べて見るに、その間目蓮五歳の年に、お釈迦如来の御弟子となりて、昼はひねもす夜はよもすがら、二十三歳その年までに、習い覚えしその経卷は、そもやそも七千余卷。さてある時に、目蓮さんが、釈迦の精舎のお庭へいでて、四方の景色を御覧なされて、ましましたれば、いづくともなく白鳥来たり、梅の梢にさて巢をかけて、かけ

て十二の卵を生めば、雄鳥たち行き雌鳥来り、雌鳥たち行けや、雄鳥が来り、代り代りに温めます。そこで目蓮ご覧になりて、さても心に感じて見れば、親となりしもその子となるも、深い因縁其の訳け筋は、さてもつらつら思うて見れば、子を悲しまぬものぞなき。われは御慈悲の父母様ちちははの、御恩おくりし覚えもなきよ。それを五才で父上はなれ、又も七つで母上はなれ、はなれ別れた其の両親ふたおやの、死んで冥途はどう遊ばした。愚痴な我身で一寸も知らぬ。さてもこれより難儀を致し、茲に父母ちちははふた親共に、過ぎし行方を尋ねてみよと、音に名高き大経読ませ、昼は法華経のお文を繰らせ、夜は裸で立ち経を読せ、昼夜分かつ見給ひたれど、更に未来の行方が知れぬ。これは如来の御存知なると、直ぐに御釈迦の御許へいでて、さても礼拝、尊敬そんじょう致し、「どうぞ御師匠釈迦牟尼如来、われが父母冥途の行方、知らせ給へ」とお願いなされ、拝み上げては涙を流し、拝み上げては礼拝致す。そこで如来は不惑にめされ、「これや目蓮これ目蓮よ、心沈めてよくよく聞けよ、父の行方を知らせてやろう。存身とくを尋ねて見れば、ハライナイ国の第一番の、チョウレン大夫と申されて、国に稀なる大善人で、高き所に九重くじゅうの塔を、お建てなされて供養を積ませ、道の辻には地藏菩薩を建立なされ、大きい川にはみ舟をつなぎ、小さき川にはみ橋をかけて、人の難儀をお救いなされ、御坊や御寺の御寄進などは、数も限りも言ひつくされぬ。貧な者には慈悲善根をお授けなされ、哀れるなかや、五十四才を一期となされ、終には無常に相誘はれて、御身果がなく、果て過ぎ給う。さすが長者の身の程なれば、一家眷属寄り集りて、野辺の葬式送りを致し、西の方より紫雲たなびく。諸仏や菩薩、数や数々御迎へなされ、笙や箏管絃遊び、目出度悟りを聞かせ給ふ。自在安楽、限りはない」と、師匠如来は語らせ給ふ。そこで目蓮仰せを聞いて、さても嬉ややれ有難や、父の身の上御安気なされ、始終涙にさて暮れにけり。

初段

(金沢系本)

抑、日本大和國（やまとのくに）。壺坂寺の如意輪觀音の。御傳記を。くわしくたづね奉るに。昔々五天竺檀特山ともふするに。出世なさしめ玉ふ。御佛一体おはします。御名を。教主。釈迦牟尼如來と申奉る。多くの御弟子を。もち玉ふ。凡八万人ともきこへたり。八万の其内を。五百人か（よ）りいだし。五百羅漢と申也。五百羅漢の其内を。十六人よりいだし。十六羅漢と申也。十六羅漢の其内をすぐりすぐりて七人を。七佛羅漢と申也。七佛羅漢の其名をば。きむら王。わしやむら王。阿難尊者に摩迦葉布留那。舍利弗。目連は一の御弟子とよべたり。ここにあわれをとどめしは。目連尊者にとどめたり。尊者或日の事なるが。釈迦牟尼如來に。打向ひ。「つれ友達を見ますれば、父もあれば。母もあり。我も御弟子とよべながら。父もなければ、母もなし。何國（いづくに）にこそはしますぞ。しらせ玉われ如來様」とたつて願わせ候へば。釈尊答て曰く「汝が父と申するは。娑婆にありし其時は東天竺の主にて。名をば。用飯大王（ようはん）と申て。威勢（みかど）の帝でありし故。神や佛に御供養あり。高き處に堂をたて。貧なる者には食を與へ寒き者には。着物をきせ。なんぼか。救はせ玉ひたる。慈悲第一の大王も。娑婆のならひの事なれば。四十九歳を一期として。遂にむなしくなり玉ふ。娑婆を離れて。末の世は。是より西方極樂の。弥陀の淨土がすみか也。國土の菓子山海の珍味。百味のおんじき。あたはりて。はすの蓮華に乗玉ふ。是が汝の父なり」と。語らせ玉へば。目連は。「父のすみかはありがたし。母上様はなんとなる。知らせ玉はれ、如來様」と。達（たつ）て願はせ候へば。釈尊答て玉はく。「汝が母の行末を。聞ん昔がましぞかし。去ながら。ゆめばしかたらん。聞玉へ。汝が母と申するは。名をばしよたい夫人（ふにん）と。申て用飯大王の。一の後で候へ共。父の心と。引かへて。慳貪邪見の慰に。あねみそ襦（じゆ）みが絶やらず父の御供養なされたる。堂塔伽藍に。火を付て。夫を其日の栄花（えいけ）とし大海の船をわり。小川の橋を切落し。夫を其日の。ゑいようとし。貧なる物をおとしめて。善人（ぜんひと）を見時は。あねみそ襦（じゆ）みが絶へやらず善僧（ぜんそう）の袈裟や衣を見る時は。あれがほしや。目連に着せませう。ほしいほしいの。罪科は手にはとらねど。心の崖（いさぎ）（ぬすみ）塵が積りて山となる砂長（いさぎ）じて岩となる。」蓬（むすぶ）

の雪が川となる。かかる悪にはくらせ共。五十二歳が一期となり。生死しやうじ離れて。末の世は一百三十六地獄。めぐりて今ははや。八万地獄の釜底に時を争い責めらるる。是が汝の母なる」と。語らせ玉へば、目連は。「父のすみかは有難し。母のすみかを。聞時は。此身はあるにあらばこそ何卒。如来の御誓ちかい(慈悲)に。地獄めぐりをさせ玉へ。母に対面いたすなり。如何なる如来の方便にて。うかませ玉ふ事もある。七日のひまを給われ」と。達て願はせ候へば。釈尊是を聞き召し。「信心孝行の志。のぞみの如くいたすべし。去ながら。中々七日のひまにては。地獄めぐりはなりがたし。七日に八日を相添て。上十五日のひまをゑさすべし。地獄めぐりをいたされよ」と。仰出させ候へば。目連尊者の事なれば。「こは有難き次第なる。さらば地獄へ急がん」と。学問所へと入り玉ふ。地獄巡りの装束には。肌には白き帷子で。かうの衣にかうの袈裟。笈には数多の御經おんきやうを。したためて。肩に懸。恋しき御寺を立出て。地獄をさして。急がるる。志こそ哀れなり。

第二段

(南彌系本)

弟子の目蓮父の身の上御安気なされ、深く喜び衣の袖で、落つる涙を押しとめ給う。「何と御師匠釈迦牟尼如来、われが一人の母人さんの行方知らせて下され給え」、拝み上げては礼拝なされ、「たのみまする」と三拝致し、そこで大聖釈迦牟尼如来、「これや目蓮これ目蓮よ、母の冥途の、さてその事を、聞いて思ひを致さうよりは、聞かぬその気が、そもまじぢやぞや」。そこで目蓮心にかかり、「母の闇路を御知らせ給え」、拝み上げては礼拝致す。「さらば行方を知らせてやろう。心沈めてよくよく聞けよ。母の此の世の名を尋ねれば、ハラナイ国で第一番の、ショウダイブジョと云ふ、国にまれなる大悪人ぢや。父の建て置く九重くじゅうの塔や、舟や橋々地藏さんまでも、悪な心で切りなく思ひ、たまにたまたま年春彼岸、秋の彼岸の中日などに、信の行者に相誘はれて、御寺詣りを致せし時に、後生心は少もな

しに、非なき説法に非をいりそいで、難のなきのに数難つけて、あのや坊主の言はれる事も、このや御師匠の説かる事も、みんな嘘やと悪業ばかり、僧の着たれし衣や袈裟を眺めて見ては、あんな綺麗な衣や袈裟を、こちの目蓮尊者に着せて、しさいぶらせて眺めて見たい。欲しい欲しいが積み重りて、いさごいさごもより集れば、千尋なきだつ大盤石よ、糸を集めて大綱出来る。悪い腹立我慢や邪慳、つもりつもりて罪盤石よ、かかる邪慳の人々にても、定命みょうばかりは免れ難し、ついに三十二才をいちごとなされ、はげしき無常に相誘はれて、闇き冥途へ墮ち行き給う。あとで眷属より集りて、野辺の葬式送りをすれば、父の野辺とは天地のちがい。青き天氣も暫時に曇り、天火稲妻はだはだ神ぢや、其のまん中より鬼神が降りて、母を納めし棺ひつ蹴やぶり、中の死骸をひつ掴まんと、致すところを、その日の導師、阿難尊者が仰天なされ、袈裟や衣を投げつけ給い、袈裟の功德で死骸を捨てて、四寸四方魂ばかり、業の焰の車に乗せて、死出の山坂、涙で越せば、さても泣き泣き閻魔の前に。閻魔大王よくみたまいて、「さても恐ろしこの罪人は、ほかに勝れし大悪人ぢや」。業の深さを御覧の為に、業の秤をとりよせ給い、秤分銅はかりふんどは千人づりの、岩を分銅にあそばしければ、わずか小さき魂ばかり、四寸四方の御皿の中に、かかる有様つくづく見れば、岩の分銅は中天迄も、さまとび上り、業の魂大地に沈む。そこで大王よく御覧じて、「あら恐ろし此罪人は、並やたいての者ではない」と、娑婆の姿を御覧の為に、嘘を言はれぬ浄玻璃鏡。是で分るとかの罪人の、前に直してよく見給えば、九萬八足鱗を立てて、かしら十二の角ふり上げて、四角眼に八つ角立てて、火焰吹き出す其の有様を、御覧なされて此悪人は罪の定めは八万地獄。さらば獄卒呼びよせんとて、呼の鼓を打ちたまわれば、阿防、羅刹や獄卒共が、九丈二尺の鉄棒を持って、山も崩るる如くに来り、哀れるるかや、やれ恐ろしや三の御弟子の目蓮さんの母のめぐりによりあつまりて、右のかいなを左へとうし、九丈二尺のかの鉄棒で左かいなを右へと通し、大王仰せの八万地獄。墮ちた事には相違がない」と、如來くわしく御咄しあれば、弟子の目蓮涙を流し、「さてもいたわし母人さんや、とかく難

儀をしたもらん」と、いとし涙にさてくれにけり。

第二段

(金沢系本)

斯^{かく}て其後。地獄地獄は多けれど。一百三十六地獄。どれにおろかはなけれ共。とりわけ人道。修羅道餓鬼畜生道紺屋地獄に。鍛冶地獄。無間地獄。三ねつちの池。とたてぢごく等也。とたて地獄のくるしみは。天にはごうほうの網をはり。地にはらんぐいの劔をうち。四方四面と申するに。黒鉄^{くろがね}の扉^{ちよう}を丁と打。其中程へ罪人を追込で、四つの扉を。うつ時はこだまもひびく如く也。又罪深き罪人は血の池地獄へ送る也。血の池地獄のせつなさは(加「ふかさ」)四方餘旬^{ママ}也。巾も四方余旬^{ママ}(加「八万よじゆん」)の其池に。糸より細き橋を懸。数多の罪人を召寄せて。「此橋渡り。向ふの岸につくならば。成仏をとぐべし」と。責行ふ餘り責るがせつなさに。渡らんとすれば橋は細し。身は重し真中よりはふつと切。體は惡道へ沈む也。たけとひとしき黒髪は。只浮草の如く也。時に鬼共申よふ。此水吞ほせ。かへほせと責行ふ。余り責るがせつなさに。吞んとすれば水は火焰と燃上る。かえんとすれば水は岩と変じたり。又罪深き罪人は。釘の地獄へ送る也。くぎのぢごくの苦しきは。先人間壺人に。四十九本の釘を打。うたれし所はどことぞ。首に三本目に二本。両のかい^{こう}に六の釘。胸と腹とに十四本腰より足に至る迄廿四本の釘を打。扱首三本の其科は、同じ佛法の世に出て。天堂様を戴て。やみやみと暮らした其科也。両眼二本の其科は大^{だい}の眼に角^{まなこ}を立。親を白眼^にんだ其科也。両の腕^{かひ}に六の釘。人の寶に手を懸て盗いたせし其科也。胸と腹との十四本。纔^{わづか}胸三寸の其下に。あきれる我慢我情の心を発^{おこ}した其科也。腰よりしたの廿四本は同じ佛法の世にい出て。近き御寺へも。一座の参詣もせぬ其科也。此釘一本もぬけるよしみはなけれ共。四十九日と申するに。一家眷属集て如来に香華を供養して。歎き悲しみ歎べば。四十九本の其釘は。皆々のがれて虚空より弥陀^{ぶつ}の弘誓^{げんげ}の舟が天降り。舟のへさきには釈迦如来。中は三途

の弥陀如来。南無の六字の帆を挙て。光明放て罪人を照し候へばみなみな浮かみ上りて。極楽へ送玉ふ也。有難かりける次第なり。

第三段

(南礪系本)

時に目蓮嘆きの涙、召した衣のみ袖でぬぐひ、釈迦の御前にさしうつむいて、「どうぞ大聖釈迦牟尼如来、我に一つの願いが御座る。地獄巡りのさて其の為に、三日三晩のお暇を願ふ」、そこで世尊の曰うようは「これや目蓮、こりや目蓮よ、三日三晩や七七日夜で、巡りつくせぬ地獄ぢや程に、よって汝に百日百夜、暇をとらす。心丈夫に出立せよ、それについては難儀な道中、しのがん為に、釈迦の宝のくわん原叢に、同じ宝のくわん原笠と、つるぎ峠をしのがん為に、耆婆^{きば}の靴をばとらす程に、心たしかに出立致せ」。そこで目蓮押戴いて、直ぐにそのまま学問どころ、御覧なされて法華經始め、又は浄土の三部の經や、女人助ける吉文經、地藏經をば取出し給い、折のないのに折り目をつけて、笈の中へと認め込んで、旅の装束經帷巾に、墨の衣に墨袈裟かけて、綾の脚絆にきやぶの足袋。すごうの草鞋の紐をば締めて、紫檀矢立を御腰に差して、御手にたちま(瑪瑙)の数珠つまわれて、道中姿の笈づる召され、杖に六字を書き彫り込んで、急ぎ給いし御姿見れば、今の世界で申さうならば、二十余輩の姿の如し。地獄どこぞと御思案なされ、南を指して急がれ給ふ。急ぎ給えば、はや程もなく、娑婆と冥途のさて其の境、常に聞き入る六道の辻や、まぎれまぎれし六筋の道ぢや。そこで目蓮はっと心を御まどいなされ、これならぬと笈づるおろし、地藏經をば取り出し給い、涙もろ共御読みあれば、奇瑞不思議や御僧方が、殊勝姿で六人現んず。そこで目蓮かの御僧を、拌み上げては三拝なされ、「我は天竺釈迦牟尼如来、三の御弟子の目蓮なるが、一人居給う母人さんが、罪が重くて八万地獄。堕ちて苛み給うと聞いて、母を尋ねて参りて御座る。どうぞ、御僧御慈悲をもって、道を教へて下され給

へ。願いまする」と涙をこぼし、そこで六人御僧方が「それは貴や、さて有難や。昔々のその昔より、今が今とて此の六道へ、僧の来らせ給うというは、ためし少なき、珍らし事ぢや。親を尋ねて来る子もないし。子を尋ねてくる親もなし。さても殊勝の御志、教え申さん御聞きありや、さてもこれより地獄の道は、げにも是より難所で御座る。此の間、末には三途の磧かわら、そこを過ぎれば、清水しやうじの川原。ゆるり巡りて御帰られ」と、目まじせぬ間に消入らせ給う。そこで目蓮押し残されて、涙ながらに御礼をいたし、もとのごとくに笈ふしずるかずて、涙ながらにいそがれます。ゆかばほどなく、三途の川原。川の幅さが四万と由旬ゆじゆん、川の深さも四万と由旬、水の流れも同じく由旬、都合揃そろて八万由旬、川の勢せが又三つ刃の矢先、はるか三途の川上見ても、せめて小さき小橋もないし、それではならぬと川下見ても、渡し舟とて一艘も見えじ。哀れいとしの吾が母様は、なんと此の川、どう遊あそばした。劔つるぎ呑み込む思ひをなして、涙乍らに笈ふしずるおろし、中の法華経取り出し給い、み声はるかに読誦どくじゆなされ、一の巻すみ二の巻出して、紐を解かんと遊あそばしたれば、さても不思議や向こうの岸に、十丈ばかりの二十尋大蛇はたひろ。水の上にと顔ふり上げて、其間大蛇の姿を見れば、九万八足鱗をかへし、十と二本の角ふり上げて、四角眼に八ッ角立てて、火焰吹き出し舌巻き上げて、川のこちらの目蓮さんを、今に吞まんと睨にらんで来たる。心殊勝の目蓮さんは、ただの少しも恐れぬ気色。「大蛇御身に性あるならば、我が言ふ事静かに聞けよ。我は大聖釈迦牟尼如来、三の御弟子の目蓮なるが、一人居給う母人さんが、重き罪にて八万地獄、長の住み家と我聞いて、尋ね尋ねてこれまで来たる。どうぞ此の川御慈悲の上で、乗せて渡して給はるならば、そちが御身を法華経の中へ祝ひこめれば、現在未来、深く善果を得給う程に、願ひ申す」と押し給えば、いかな大蛇もさしうつついて、かの二十尋の九万八足、数ある鱗、風に草木なびくが如く、ほろりほろりと十二の角も、落ちたところでの二十尋が、頭うなだれ尊敬そんけいいたし、「早く大河をお渡し申す」、言はんばかりの気色であれば、そこで目蓮喜び給い、「大蛇御免」と打ち乗ります。四万由旬のかの大川を、目まじせぬ間に安々越

えて、「さても御苦勞」と礼なされれば、大蛇たちまち出家と転じ、「やあ御弟子の目蓮尊者。我を大蛇と見そって居たか。兄の御弟子の阿難ぢや程に、如来精舎にましましてながら、御覽遊ばし汝が道中、扱も不慙や目蓮が、三途川原で難儀を致す、阿難何卒大蛇となつて、あの大川を越えて来い、との令言ゆへに、かくと大蛇に身を変じたぞ。是で地獄の修行も叶う。さらば是より御別れ申し、心静かに御巡りあれ」と、阿難尊者は消え失せにけり。そこで目蓮悦び給い、兄の御弟子の阿難と知らず、兄の頭べに打ち乗ったとは、まつ平御免下されませと、あとに残りて三拝なされ、是につけても母上さまは、さても此の川どう遊ばした。げにもいとしの母人さんや、嘆きなされた其の事のみを、思い出しては涙の種ぢや、なれど目蓮笈摺かずて、次へ次へと道中なさる。急ぎ給えばはや程もなく、葬頭（生死）河原へはや近くなる。

第三段

（金沢系本）

斯て其後。目蓮尊者の事なれば。いそがせ玉へば今は早。娑婆と冥土のさかへなる。三途の大河死出の山。是も地獄の苦しみあり。目蓮尊者今は早。三途の川に着玉ふ。何と渡らんよふなくて。しばしあきておはします。遙川上を御らんあれば。其長廿丈ばかり成。^{なま}大蛇一筋浮み出。^{いで}九万八すいの鱗を立。十二の角を振立。紅の舌を巻。尊者の前に流れくる。尊者此体御覧じて。笈の中より御經を取出し。法華經一部八卷。廿八品こまやかに読誦し玉ひて大蛇に投懸玉ひたる。不思議や此大蛇弘誓の舟と転じ変れば。尊者此体見るよりも。南無阿弥陀佛と打乗て櫓權船人^{せんど}はなけれ共。向ひの岸につき玉ふ。尊者舟より上らせ玉ひ。跡を三度礼拝し。末の地獄と急がる。いそがせ玉へば。こはいかに。娑婆でもかくれし死出の山。何と登らんよふもなく。しばしあきておはします。死出の山路の苦しさは。岩ふり峠が百十丁。此峠の有様は。大盤石^{はるかう}が遙中よりふりかかる。娑婆で譬て申なら。秋風に木の葉を散す如く也。

心も言葉も及ばれず。目連尊者の事なれば。笈の中より佛經を取出し。「一者福德梵天。二者帝釈。三者魔法。四者天人五者ふんしん」と。御説なされて候へば。こは有難や散降^{ちりふり}如くの盤石も。遙中より止りて。尊者は難なく越玉ふ。末の地獄といそがるる。急がせ玉へばこはいかに火降峠が百十丁。心も言葉も及ばれず。笈の中より御經を取出しはうと般若。大般若薬師の御經十二巻唱玉へば、忝なや火降峠の難も越。末の地獄と急がるる。いそがせ玉へばこはいかに。劔の峠が百十丁。劔の峠の有様は。天も地も弓手^{ゆんで}も馬手^{めて}も劔でかためた峠にて也。心も言葉も及はれず。目連尊者の事なれば。笈の中より御經を取出し。天台經七十巻。般若經六十巻。不動のじゅもんを細々唱へ玉へば。忝なや。劔の峠の難を越。末の地獄といそがるる。急がせ玉へばこはいかに暗闇峠が百十丁。心も言葉も及はれず。目連尊者の事なれば。笈の中より御經取出し。光明遍照十方世界念佛衆生撰取不捨と御説なされ候へば。くはうは光^{ひかる}といふ字也。妙(筆者註:「明」の誤植)は月日の二体也。大日尊天。いこくのひかりを。鮮やかに。娑婆にも隠れし死出の山。四百四十丁の。大難の苦^{くるしみ}も御經の功德の有難や。尊者難無越玉ふ。末の地獄と急がるる。いそがせ玉へばこはいかに。しやうずがの婆と申在。地獄へ落る其者の。白帷子を剥取て。地獄へ送る役目也。扱其末は見る目嗅ぐ鼻とて。地獄へ落る其者の。科の次第を書(筆者註:「嗅ぎ」の誤植)分て。地獄へ送る役目也。目連尊者今は早。しやうずがばばにつき玉う。ばばは尊者に申よふ。「衣を脱て。此木に掛。地獄へゆけ」と申ける。尊者此由聞し召。「我は地獄へ落はせず。天竺檀特山の。釈迦如来の御弟子に。目連尊者と申者なるが。娑婆で罪を深くして。八万地獄へ落入たる。母の苦み助ん為。釈迦牟尼佛の方便にて。娑婆の有様の其なりにて。是迄尋来し」と語玉へば。しやうずがばば。「扱々孝心の御僧や。通らせ玉へ」と申ける。尊者は歎び。礼を述。末の地獄と急がるる。いそがせ玉へばこはいかに。見る眼嗅鼻申よふ。「孝心也目連よ。早々行て母上を助玉へ」と申ける。目連尊者の事なれば。「こは有難き仰せかな」と。見るめ嗅鼻に礼を述。末の地獄へ急がるる。誠に危き事共也。

第四段

(南礪系本)

押し残されて一人目蓮涙を流し、末の地獄へ急がれ給ふ。急ぎ給へば早程もなく、葬頭河原の姥御前、姥が体相眺めて見れば、丈は十丈ばかりに見ゆる。頭ら十二の角をば出だし、顔の赤さは朱紅柄ぢや、眼日月鏡の如く、眼怒らせ申していわく、「そこへ来るのは何者なるや、ここをどこぞと思うてきたや、ここは肌着をはぎとるところぢや。肌着なき人、身の皮はぐぞ、はぐもはぐかや三遍はぐぞ」、姥が怒りしその声聞けば、千の雷寄たる如く、肝も心もくだけのばかり。なれど羅漢の目蓮様は、只の少しも動ぜぬ気色。姥に向かいておっしゃるようは「御前御身に性あるならば、我れが云う事静かに聞けよ。どうぞ案内御願ひ申す。我は天竺釈迦牟尼如来、三の御弟子の目蓮なるが、一人持ちたる母人様が、重き罪にて八万地獄。落ちて苦しみ給うと聞いて、せめて一度逢はんと思つて、地獄修行に参りてござる」。申上げれば姥御前「それは珍し、さて有難や、むかし昔の大昔より、今が今までも、かかる地獄へ御僧様が、渡り給ふは珍しい事ぢや、親を尋ねて来る子もないが、子をば尋ねて来る親もなし。なんば尊き御僧にても、母に遭ふこと安々からぬ」。あちら向かいては嘘つき笑ひ、こちら向かいてカラカラ笑ひ、そこで目蓮笈摺おろし、あまた御経を取り出し給い、一に読みしが、浄土の三部、二番般若、妙法蓮華經。数の經文刹那がうちに、御声高々読み給はれば、今の経の功德によりて、いかな姥も合掌致し、「姥の苦患もしばらくのがれ、何をお礼にお返し申そ」、思いつきたるこの帷子と、衣領樹の枝しおりとまげて、白き肌着を一枚出して、さても其の時、「目蓮さんよ、これがあるの母親さんが、召して御座った肌着ぢや程に、是も御礼にお返し申す。御ン聞あれよ、道の辛さは限りはないぞ、劔峠はそも百拾丁、火降り峠も又百拾丁、盤石峠も又百拾丁、暗がり峠がまた百拾丁、四つ合はして四百四十丁。難渋な峠、憂きよつらきは限りはないぞ、ゆるり巡りて御帰られ」と、姥はそれより別れて行けば、一人目蓮

おしのこされて、涙ながらに笈摺担^{かた}て、末の地獄へ急がれ給う。急ぎ給えば早ほどもなく、向かいたまふが劔の峠。このさ峠の様子を言へば、雨の如くに劔が降って、足にふむのも手にさわるのも、みんな劔の峠でござる。よつて峠を凌がん為に、釈迦に賜（給）はるくわん原笠に、くわん原蓑をお召しなされ、キバの靴にて難所を凌ぎ、向かい給うが火降り峠。火降り峠のさてそのつらさ、千の松明一度によせて、灯す如くに火は降ります。または下から八万由旬、火焰燃え立つ恐ろし事よ。なれど目蓮かの装束で、火降り峠を、御越しなさる。向かい給うが盤石峠。この間峠の様子を云えば、口に言はれぬ難儀な事ぢや。一寸たえて申するならば、四十里四方の大盤石が、雨や霰のさて降る如く、なれど目蓮かの装束で、磐石峠も首尾よく越され、向かい給うが暗がり峠。さても御いとし目蓮様は、さては仏の力を借りると、観經の御文、「光明遍照、十方世界、念仏衆生、撰取不捨」と、四句の法文三遍唱え、唱え給えば早やあいもなく、月が両体御出ましなされ、こがねの山に朝日の如く、光明輝きおん越しなさる。四つの峠を首尾好く越えて、先づは目蓮悦び給い、末（次）の地獄に急がれ給う。急ぎ給えばはや程もなく、女人生まずの地獄に着かせ、女人生まずの地獄と云うは、只の一人も子もたず女、信がなきには落ち行きますぞ、生まず地獄におつるというと、赤き獄卒女に向かい、細き灯心二た筋わたし、矢の根峠の岩底掘りて、三竹寒竹、根を掘らすれど、小さき事なら休みもやらず、馬につければ七馬行馬、それを掘らねば獄卒共が、蟻のたかりし如くに責める。これを掘らんとするて見ても、その根がわく利劔の如く、右の灯芯風にて消えて、鋏のなき故両手で掘れば、十指の指先血汐となりて、辛い責め苦に遭わねばならぬ。とかく後生が大事ぢやほど、いかな尊者も見ぶるい給い、しばし言葉もなかりしぞ。どうぞ母にと会いたいものと心細々、つぎの地獄へお急ぎなさる。急ぎ給えば早ほどもなく、向かい給うが血の池地獄。

第四段

(金沢系本)

斯て其後目連尊者の事なれば。道を早めて急がるる。いそがせ玉へば。今は早六道の辻に出玉ふ。其道六筋故。何れの道が八万地獄やら。しばしあきれておはします。遙向ふより、六道無間の錫杖持。墨の衣をふうわりとめし。南無地藏菩薩きかかり玉ひ。目連尊者に打向ひ。仰られて曰。「目連は釈迦の御弟子のそふなれば、神通も在べき苦なれ共。未だ娑婆を離ん人なれば。道を教てまいらせん。弓手の徑こみちを行玉はば。八万地獄真直也。早々行て母上を。助玉へ」と云捨て。過行玉へば。目連は御跡を伏拝み。教の道を急がるる。いそがせ玉へば今は早八万地獄へ着玉ふ。一百三十六地獄。どれに愚はなけれ共。取分とりわけ八万地獄の苦くるしみは。黒鉄の扉に鉄の門。十五向ひに建違たがひい。目連尊者の事なれば門を開んよふなくて。暫しあきれておわします。一百三十六地獄の主をば。閻魔大王と申也。尊者閻魔に打向ひ「予われは天竺檀特山の釈迦如来の御弟子に目連尊者と申者也。我が母。娑婆に在し其の時に。多くの罪を作りし故今此地獄に落給。母の苦助ん為。是迫尋来りしが門堅くして入事ならず。何卒大王の情にて。扉を明てたび給」と。願玉へば。閻魔大王「孝心也。目連よさらば扉を開かすべし」と。八万地獄の臣下をば。八面大王と申也。面が八ツ。眼が六ツ。足が六本手が八本。おそろしなとも愚也。閻魔は八面呼出し「扉を開け」と申したる。「承候」と扉をさつと開きける。尊者は閻魔に礼を述。八万地獄へ入玉ふ。八面はかまのゑんざへ跳上り蓋打明て釜中を。打回し打回し黒焦の母上を。金棒に繋あひぎ上。「是が御僧の母なるぞ対面致せ」と申ける。尊者は一見御覧じて。物をも言わず目も明ず。泣も泣れず「こはいかに。何卒大王の御情に。娑婆の姿で見せ玉へ」と。頼せ玉へば。八面は「安き仰で候」と。直様母を引寄て。口にじゅもんを唱ふれば。忽ち娑婆の姿と成。かげろうのよふなる母上を。尊者の前に直したる。尊者は母に取紐。「如何成(加「つみの」)報ひにや。かかる地獄に落入て。隙ひまなく苦玉ふ事。誠に浅間敷次第哉」と。さめざめと歎かるる。母は目連に取紐。「いかに我子の目連よ。何の報いで。此様な苦しし地獄へは落た

ぞや。早く聞かせ」と有ければ。「我は地獄へ落はせず。釈迦牟尼佛の誓ひ（ちひ）により。娑婆の有様の其儘にて。母の苦助けん為是迄尋来し也。」と語玉へば母上は。「扱は左様に候か。慳貪深き我をば。母と敬ひ此様な。苦深き地獄迄尋来し嬉しさよ」と。親子手に手を取かわし。前後ふかくに歎かるる。哀と云も愚也。八面大王聲を挙。「いざ歸らせ玉へ目連よ。時の責め時遅くなる。早修羅道の太鼓が鳴る」と。母の小腕（こかいな）かいつかみ。八万地獄の釜底へ。何の苦もなく投込（な）だり。尊者は在（ある）にあらればこそ。「こは何と成悲（かな）や」と。しばし泣き入居たりしが。稍有て泪を拂ひ。七日七夜さ泣居たとて。母を助けん手立なし早々國へ立歸り。此有様を残りなく。釈迦牟尼如来に申上。「何とか方便を授りて。又候爰（き）に來らめ」と。母を地獄に見残して。檀特山へと歸らるる。目連尊者の心の内押計られて哀也。

第五段

（南礪系本）

それに続いて申して見れば、世にも邪慳な女ぢや程に、それは如何にと申しまするに、地獄数々ある其中に、女逃れぬ血の池地獄、此の間地獄の様子をいえば、釜の広さが四万と由旬。釜の深さも四万と由旬、此間地獄の向こうの岸に、殊勝莊嚴浄土を飾り、あまた獄卒より集りて、こちらの岸より向こうの岸へ、糸にまさりし橋をばかけて、さても獄卒、有罪重罪、罪人共に、「行けよ走れよ、向こうに見ゆる、あれが阿弥陀の浄土ぢや程に、越せよ越せよ」と責め来る故に、あまり責めるが、物憂き辛さ、心細々渡るとすれば、橋はぶつりとまん中程で、切れて落つればそのまま地獄。なれど女衆喜び給い、娑婆に居る時、仏果と云ふて、櫛や笄（かんざし）つむりに挿して、佛飾りを致した縁ぢや。または口には三十二枚、白き齒をば染むると云うて、米と鉄漿（かね）とを酒にて浸し、黒く染めたる功德によりて、女喜び首から上は、浮み浮んで苦しみ受けん。かかる様子を目連尊者、御覽なされて涙を流し、さても不愍や罪人共と、足も

どちらどち箆摺おろし、女人助かる血盆経を、み声殊勝におん誦みなさる。紫檀矢立のみ筆を出して、口に南無佛、南無阿弥陀佛と三度唱え、書いてすぐさま血の池地獄へ、たった一枚投げ込み給い、投げ込まれたらすぐに、湯玉が一丈へり、二枚書いてさ投げ込まれたら、そこで血の池、二丈と褪^あせた。さても嬉しとまた筆とりて、今は三枚と投げ込み給い、都合三六十八願で、とうとう地獄がそのまま褪^あせた。有罪^{うざい}重罪、罪人共が、みんな成佛遂げたのであるぞ。そこで目蓮母人さんは、なんとしたまふ。やれおいとしや。罪が深うて行方が知れぬ。そこで目蓮、母上様は何んとし給う、やれいとしやと、ものとごとくに箆摺負うて、末の地獄へお急ぎなさる。急ぎ給いてはや程もなく、山のようなる黒金門。そこで目蓮御眺めあれば、これが八万地獄の門と、聞いてつくづくよく見給えば、門は悉^{しつ}皆、熱鉄ばかり、山を見るよな七重の門ぢや。一重一重に扉が有って、門の外には六つの鬼が、まなこ日月鏡の如く、九丈二尺の鉄棒をもって、十と二本の角ふりあげて、にらみつけたるその有様は、たとへがたき、恐しごとよ。なれど羅漢の目蓮さまは恐れ給わず、かの門岸に、御寄りなされば門番共が、「そこへ来るが何者なるや。ここはどこぢやと思ふて来たや、ここは八万地獄の門ぢや。いかな罪にて汝は来たや。早く白状致せ」と云えば、只の少しも恐れぬ気色、「われは天竺^{てんしつ}釈迦牟尼如来、三の御弟子の目蓮なるが、聞いて給われ。わが母人様は、罪が重くて八万地獄。落ちて苦しみなさると聞いて、どうぞ一度会いたいものと、尋ね尋ねてここまできたぞ、どうぞ此の門開いて給へ。たのむたのむ」と、のたまひたれば、番の鬼共申するようは、「久し昔よ今日までも、今が今まで此処へは、人の来たらせ給ふと云うは、ためし少なき珍し事ぢや。いかな尊き御僧にても、門はなかなか叶はんぞや」と、言われますれば目蓮様は叶ふことではあるまいけれど、是非に是非に」とのたまひたれば、「さらば御僧お聞きなされ、門はそなたにお渡し申す」云うて、門番只打ち笑い、あちらむいてはからから笑い、「さあさ開けられさア開けられ」と、こちら向いてはからから笑ふ。そこで目蓮心の内で、喜びたまひ御思案なされ、「これは如来の御慈悲によって、経の功德

を頼まにやならぬ。さらばそうぢゃと、身腰の矢立、筆取り出して、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と、唱へ給ひて三べん書いて、北に向かいて「釈迦牟尼如来、早く御法みのりを御たのみ申す」。拝み上げては拝礼致し、東向いては、釈しやく梅くま檀だんの、十二大願御薬師如来、早く御のりをお授け給へ、願ひ申す」と三拝なされ、南向いては観音様に、「どうぞ御法をご回向あれとお願いなされ、西に向かいて声しみじみと、「本師法王無量寿如来。今ぞ御法をご回向あれ」と、涙ながらに礼拝なさる。天に向かいて日月二体、「今は早く開かせ給へ。威力定力本願力」と、唱へ給ひて黒金扉。一寸片手で押し給はれば、鉄の門ぐわらりと抜けて、扉両方一度に開き、そこで目蓮喜び給ひ、門を難なくお通りなさる。末の地獄へ趣き給ひ、とても地獄が数多うござる、紺屋地獄に鍛冶屋地獄、百姓地獄をお巡りあって、雨もさみざみ落涙なさる。向い給うが八万地獄。此の間地獄の番する者を、名をば八面大王と申す。大王怒つてとがめて云はく。「それへ来たるは何者なるぞ、ここは八万地獄であるが、如何な罪にて汝が来るや、知るも知らぬも八万地獄。今におのれをまつ逆様に、突いて突き込む覚悟せよ」と、舌をたたいたいて怒りし声が、天に響きて地にしみ渡る。千の雷寄せたる如く。肝も心も崩れるばかり。そこで目蓮おっしゃるようは、「大王しばらく静まりたまへ。我は天竺釈迦牟尼如来、三の御弟子の目蓮なるが、一人居給ふ母人さんが、此間地獄が住み家と聞いて、尋ね尋ねてこれまで来る。どうぞ大王、御慈悲で御座る。母に逢はせて下さるならば、幾世幾世も喜びます。頼む頼む」とのたまひければ、大王答へて申さる様、「さてもさて珍し事よ。とうの昔の今日までに、かくもおそろし八万地獄、親を尋ねて来る子もないが、子を探ねて来る親もない。さても奇特の御僧さんや。なんば貴方の身の上にてても、母に逢ふこと安々からぬ」。そこで目蓮涙を流し、「叶ふ事ではあるまいけれど、大王あなたのお慈悲の上で、ひと目逢はせて下されませ」と、両手合はせて、頼まれければ、とても邪慳な大王なれど、「さらば貴方に逢わせてやる」と、九丈二尺の金棒を持って、湯玉とび立ち地獄の中を、ぐるりぐるりと三遍まわし、「是や善哉これ善哉」、三度唱へて金棒

の先に、左の腕かひなを右へとさして、「さあさ目蓮是目蓮よ。是が御弟子の母人さんぢゃ」。いかな貴き目蓮さんも、歎き涙におん咽せなさる。「さてもいとしの母人さんや。やあれ笑止の我母さんや、さぞや苦しきことではある」と、召した衣の御袖でもって、落つる涙をおしぼり給ふ。母の姿をよく見給へば、肥えてみよるは、骨々ばかり。はつたものとして、おん筋ばかり。光りつよきは両目ばかり。またも衣で涙をぬぐい、「大王何卒我母様を、娑婆の姿にお直しなされ。浮き世姿は三十二相。歳は三十二才でござる。願ひ願ふ」との給ひたれば、大王尊者に申して云はく「さらば此釜、そなたに渡たす、すぐに逢ふたがよろしうござる。さあさ逢はれよ、さあ逢はれよ」と、天に響きしからから笑ひ、よって目蓮心のうちに、さても嬉しと喜び給ひ、笈をかしこに早速おろし、釈迦の金言血盆経を、み声音声、声高々に御誦みなされてましたれば、いかな湯玉もたちまち消えて、四万由旬の深さの釜が、僅か二丈の深みとなった。またも矢立の筆持ち給ひ、経の御文を書き認めて、かの間地獄へ投げ込み給ふ。直ぐに地獄が一丈引いた。有罪重罪罪人共が、釜のふちへと皆這い上る。なれど尊者の母人ばかり、罪が深くて下へと沈む。そこで目蓮大音声で、「母の大ふぢやう、母、大ふぢやう」と、声を限りに呼び給はれば、釜の底より母人さんが、哀れな姿に声細々と、「われを呼ばれる殊勝な声は、娑婆に残せし目蓮かいな」。やれなつかしと、湯玉底にておっしゃりければ、そこで目蓮喜び給ひ、御手に持ちたる御経で招き、招き給へば母人さんが、釜のふちへと御あがりなされ、よって目蓮母人さんの、御手をしっかりと手に取り給ひ、釜の中より引き上げなさる。「さてもなつかし目蓮かい」と、涙ほろほろ対面なされ、「母はやれやれ恥ずかし事ぢゃ。釈迦牟尼仏にも言ひわけたため。一家眷属なほなほ笑止。われを尋ねてよう来てくれた。母にとりては有難うござる」。「なれど母さん此の目蓮は、あなたひとりに遭ひたいばかり、難所のんで尋ねて来たぞ。どうぞ母さん地獄の責めを、しばし語りてお聞かせあれ」と、泪ながらに母にとすがる。よって母人おっしゃるようは、「これや目蓮、地獄の責めは、なかなかもって、口や言葉に話しはならぬ。聞かば血を

吐く一命終り。口に云はれん苦しき事よ」。そこで目蓮御経取り出し、一に法華經、二に三部經、汗を流して、声高々と読誦なされば、御経の功德で一つの釜が、三三九つ割れ離なるれば、九品浄土へいちいち響き、蓋はたちまち八つに割れて、八重の蓮華と転じて開く。釜の中なる罪人共も、勇み進んで細々笑ひ、一人一人が蓮の葉かむり、釜のめぐりを、おっ取り廻はし、両手たいて、左りの方へ、ぐるりぐるりと三遍まわり、これが此世の踊りの初め。責めにおうたる罪人共が、踊り上って喜びければ、西の方より紫雲が、きれいはなやか棚引なされ、中に弘誓の舟ひらひらと、諸佛菩薩が笙簫で、あまた罪人み船に乘せて、現にめでたい悟りを開く。かくの様子を御眺めありて、「やあや目蓮、合点がゆかぬ。そちの為には、此母こそはよしみあるぞや、あのがき共が、何のよしみぞ浮かんだやら」と、言ひも果たさぬ其のまま直ぐに、震動雷電たちまち曇り、天に稲妻はたはた神ちゃ。さても笑止やあら氣の毒や。もとのごとくの八万地獄。さてもあさまし、邪慳ぢやないか。われと乗りゆくさて火の車。浮かむ瀬もなき母人さんと、そこで目蓮力を落し、とても邪慳はかなわぬものと、足もどちぢ笈摺かつぎ、直ぐに精舎へ帰らせ給ひ、釈迦のみ許に、直ぐ様出でて、涙流して嘆かせ給ひ、「いかに御師匠釈迦牟尼如来、いかに御慈悲のお蔭によりて、地獄巡りを致したけれど、日頃邪慳な我母故に、かようかようの邪慳によりて、又も地獄へ沈んで御座る。どうぞ貴方の方便力で、母を浮めて下されませ」と、涙ながらにすがらせ給ふ。そこで大聖釈迦牟尼如来、「さらば施餓鬼の供養を致し、施餓鬼飯をば三石六斗、外に白旗百本建てて、黒に紫、黄色の旗も、四色数々四百の旗や。またも精舎の大木ごとに、灯し明りが高灯籠ぢや」。ほかにあまたの飾りをなされ、御釈迦如来を始めと致し、数多御弟子が八万余人、寄せて集めて声張り上げて、施餓鬼御経を御勤めなさる。さても不思議や御経の功德、現に現れ昼九つに、母は浮んで幽霊となりて、釈迦の御許へ来たらせ給ひ、歓喜涙で喜び給ふ。そこで目蓮両手を合はせ、御釈迦様をば三拝致し、共に落涙遊ばしければ、釈迦も羅漢も皆諸共に、口に云はれぬ喜びごとぢや。よって目蓮如来に向ひ、母

の仏果をお頼みあれば、そこで如来のたまふようは、「天上界へ出世をさせる。」そこで目蓮申さることは、「天上界とは有り難けれど、日に三熱の苦のあるところ、苦なき所へ母人さんを、御出あるよう」御頼みあれば、釈迦牟尼如来、「さらば悪人済度のために、東日の本、大和やまとの国の、壺坂寺の弥陀わだつての脇立、観音様と封じ込めるぞ。喜びあれ」と仰せあるれば、聞いて目蓮満足なさる。言うて尽きせん御咄なれど、先は略して筆留めまする。

第五段

(金沢系本)

斯て其後目蓮尊者の事なれば。八万地獄の母上を跡に見残し足早に。檀特山へ帰らるる。道に障もあらざれば。檀特山に着玉ひ。釈迦牟尼佛に打向ひ。「御佛様の慈悲により。地獄巡をつかまつ仕母の苦見受し處。中々助る手立なし。何卒佛の御慈悲に御經供養遊ばされ。再び地獄へやり玉へ」と。身をもだへてぞ歎かるる。如来此由聞し召。「さらば千部施餓鬼を行て得さすべし。二度地獄ふたたびへ行玉へ」と千部施餓鬼をなされたり。数多の御經を認て。目蓮尊者に下さる。尊者是を戴て。「こは有難き次第かな。片時を早く急がん」とあまたの御經をおひづるにしたためて肩に懸。恋しき御寺を立出て八万地獄へ急がる。いそがせ玉へば程もなく八万地獄に着き玉ふ。門の扉に取付て尊者扉を押開き。釜の邊へ立寄て。笈の中より御經を取出し女人の浮む蓮華經や法華經を釜の中へ投込玉へば。不思議成かな八万地獄の大釜はハツに破て。八葉の蓮花と轉じ変て。中より光明耀かがやきたり。かげろうのようなる母上も蓮の蓮華に乗玉ひ。浮み上らせ候へば。目蓮尊者の事なれば。「こは有難き次第かな」と喜び玉ふぞ道理也。檀特山の釈迦如来。千部施餓鬼の弔に母上斗にあらずして。一百三十六地獄。有罪無罪の餓鬼道迄。皆々浮み上りたる。閻魔法王を始めとし。八面大王牛頭馬頭の。あほう。らせつに至迄。皆々な涙を流したる。鬼の目にも涙とは此時よりぞ始まれり。母は蓮華の上よりも。我子の尊者に曰よふ「母の助かる其為に。御經供養なされしに。世の罪人も浮む事。我はねた

ましく思也」と申され玉へば。目連は「此度浄土へ参る身が。左様な事をのたまふては、石を抱て淵に入るとは此事也。誤果て念佛を申させ玉へ母上」と。ひたすら進め玉ひたる。かかる所へ虚空より檀特山の釈迦如来紫の雲に打乗て。光明放て現れ玉ひ。目連尊者に曰は。「是目連よ御經の功力にて母は浮み上れ共。いまだかうざい。絶へずして。あねみそねみが強き故。又候地獄にきわまる」と。仰せ出され候へば。目連尊者のたまふよう。「母上様の身替りに。尊者を地獄へ入玉ひ。母を浄土へ遣り玉へ」と。身をもだへてぞ。歎かるる。釈尊これを聞玉ひ。「誠に孝心が不敏さに。母は地獄の苦を去て。日本大和國壺坂寺の如意輪觀音とふんじ込て得さすべし。普く衆生を守るべし」との仰也。母の浮ませ玉ふ。其時は。しかも七月十六日。午の刻と申するに壺坂寺へ入り玉ふ。抑七月十六日を孟蘭盆會と号て。祝いの踊りを始めたり。扱踊りの装束は甘茶の帷子素麵の帯。蓮の葉の笠にて。顔を隠し踊しことは末の世の女人誠の為成るべし。壺坂寺の御伝記を讀上奉る。

「金沢系本」も若干の文字の異同があり西村本を基に比較した。岩本裕博士の活字化されたものがすでにあるがこれには明らかな誤植もあるので諸本を参考に校訂した。その折、西村本の漢字（全て妥当とは言えないが）をそのまま用いた。これに対して、「南礪系本」は諸本を対照すると、文字の相互の出入りが多いので、前後の文脈にいささか不自然なところが見られるが、この初稿の趣旨である語り物の特徴的諸表現を提示することに重きをおいた。その際、拙論で指摘したように、およそ金沢系本の詞章は三字・四字・五字＋四字・三字・五字と言った七五調であるのに対して、南礪系本は三字・四字＋四字・三字の七七調を基調としている。そこで、前掲の南礪系本の参考詞章においては、この点に注意を払っていることも記しておきたい。それは、原本の措辞になるべく「三字・四字＋四字・三字」の七七型に詞句をしようという意志が働いているからである（とはいえ、諸表現を盛り込んだ関係で、語調が崩

れているところもあるが）。

むすび

本初稿はわが国民衆の所謂「口伝心授」（口と心で伝授する）による「目蓮尊者故事」の語り物、「口説」^{くどき}の活きた諸相を出来るかぎり反映させた基礎資料として作成したものである。この校異の作業の過程で、諸本の系統が徐々に明らかになって来たと同時に、わが国民衆本の難解さも痛感させられ、当初、予想していた数倍の労力を必要とした。それでも、煩瑣を厭わず、詞章の字句の異同を追求する作業は、これらの資料の整理においては不可避であると認識させられた。その結果、写本の初見では全く分からなかった字句が判明し、本来の豊かな内容が浮かび上がって見えてきた。遺憾ながら十分に解読できなかった部分を若干残したものの、これで南礪系本の内容の分析ができる基礎が整ったと思う。

既述のごとく、北陸地方に伝わる目蓮故事の盆踊唄には、二系統ある。ほとんどの論著が「金沢系本」に集中していて、この「南礪系本」にはほとんど言及せずに、二系統を分けずに前者で代表させて論じている。それは、度々指摘したように、岩本裕博士が京都大学所蔵本を活字化したような一種の「定本」がないこと。「南礪系本」には版本がなく、その書写の解読は上述のような原因で難渋すること。伝承されている諸本相互の文字の異同も相当に多いこと。近年に改めて書き直したのも、意味不明のところが少なくないこと等々、研究の対象となりにくい諸事情がある。こうしたわけで、実際に「南礪系本」を正面から取り組む状況になかったとも言えるのである。『金沢の口頭伝承』⁽⁵⁾所収のものは数少ない「南礪系本」を活字化した、かつ、校合して試みに初歩の定本を作成しようとした労作で

ある。また『日本庶民生活史料集成』(第十七卷) 所収の活字二種も参考にはなるが、活字化の際、誤字、誤植があるように見られるし、わずかに二種に止まるので、これらのみでは全貌は見えてこないし、それだけを代表として「南礪系本」の研究とするには不安を禁じ得ない。

本稿では「南礪系本」の全容を提示することに重点をおき、庶民の口承芸能の実相と、両系統の内容や詞章またその韻文形式の相違を、明らかにしえたように思う。これを基礎に、語り物として著名な中世の説経節『目連記』二種等々、古来から伝承されて来たわが国の「目連物」の異なった内容のものや、外国に数多く伝わる目連故事との比較検討が可能になった。これをうけて、人物や情景に対する語りの表現に目を配りながら、他の目連物と対照・分析することで、筆者の所期の目的である南礪系本の語り物芸能としての価値をさらに闡明したい所存である。

(1) (『言語文化』Vol.41六一頁～八〇頁所収 一橋大学語学研究室 二〇〇四年)。

(2) 『礪波の民謡』(ちよんがれ集) 上巻「ちよんがれに就て」六頁(福光図書館蔵 私家版 一九八一年)。詞章は十三頁～三二頁。

(3) 第十七卷「民間芸能」(萬歳・チョンガレ・口説き) 所収(三書房 一九七二年)。四九二頁～四九六頁と五一五～五一二〇頁。

(4) 上平村で採集した詞章。一八〇頁～一八六頁(富山県教育委員会 一九八五年)。

(5) 但し、これは諸本から妥当な部分をとりまとめたところであり、詳細な校合したわけではない。七九頁～八六頁(金沢市教育委員会 一九八四年)。

(6) 石破洋『地獄絵と文学』一六五頁(教育出版センター 平成四年)。

附記

本稿を作成するに当たり、多くの方々のお世話になった。筆者の意図を御理解戴いてご協力を賜わった、福光、井波、城端、福野など各図書館の方々、とりわけ福光図書館では高田輝男館長はじめ館員の皆さん、さらには井波図書館の方に、特段の便宜を図っていただいた。また南礪市教育委員会の西村勝三先生からはCDを、城端の斉藤耕三先生には資料とテープの提供を頂戴した。ここに深く鳴謝する次第である。